
リープMyハート

kinonaa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リーブMyハート

【Nコード】

N3284J

【作者名】

kinonaa

【あらすじ】

このお話は自由で我がままな人達の生き方とその想いを中心にして進んでゆくお話です。

リープMyハート

ねえ、何で泣いてるの？

貴方は何時も自分を見て悲しそうにするけれど・・・
ねえ、何で泣いてるの？

それは嬉し涙と言うけれどその位の嘘なら解るから

貴方の涙を見ると自分も悲しくなるの

その涙が自分のせいならば、自分がもっと成長すれば貴方は笑ってくれるのかな

自分がもっと「すごい」人になればあなたは笑ってくれるのかな

貴方が笑ってくれるのなら自分はずっと頑張って「すごい」なるから

だからその時は笑って私を抱きしめて

このことを知ったら君は怒るかなそれとも叱るかな
でも決めたんだ

自分の理想のためには自分が邪魔で

君の理想にとってもこの世界にとっても自分はただの毒でしかないのだから

このことを知ったら君は泣くのかなそれとも決めるのかな
君には自分ほどの才能も能力も無いけれど自分には無い可能性を持っているから

所詮自分は自分の操り人形、できることなんて解りきっている

自分は君の可能性とこの世界の自由という名の法律のために僕という存在を殺します

プロローグ

(プロローグ)

朝、ルーア村に朝日がふりかかる。それによりルーア村の1日が始まってゆく。

チュン、チュンチュン。

「んんんー」

ある家の中にいた一人の少女が朝の日の光をうけて目を覚ます。

(・・・眠い)

とても起きる気にはなれない。まあ、このまま寝てもどうせ誰かがおしにくるだろうし、それまで眠ろうと、その女の子はまた目を閉じてまたねようとしたときだった。

ドン　ドン　ドン・・・。

「夢^ゆ加^かさん、起きてますかー、朝ですよー、起きてくださいー。」

ドンドンドンドンドン・・・。

ドアうるさく叩かれている。

近所の家のおばさんの子供だ。どうせおばさん言われておこしにきたのだろう、その夢加と呼ばれた女の子は仕方なく布団から出て起きることにする。戸を開けてへんじをする。

「はいはい起きてますよ」

「母さんが朝ごはんの用意ができたから早くこいだってよ、あと頼みたいことがあるとか」

ゆかはため息をつきながら言う。

「まったく、どうして他の家の者にこう次々とお使いやら頼むのかな」

「一番頼みやすい立場にいるからじゃない？」

ゆかはちょっと待ってと子供を外に待たせ、顔を洗うなどため息をつきながらも外に出る準備をする。

それが終わって外に出る。

「じゃあ、行こうか」

「ほらー早く早くー。待ちくたびれちゃったよ」

（はいはい）

それから家に着き、夢加は不機嫌そうにあいさつをする。

「おはようございます、おばさん」

「おやおや、その様子だとまだ寝起きだねのようだね、ほら、さっさと飯食べちまいな今日は街のほうに買い物にいらしてもらうんだからね、ほい、メモ」

というふうに着くなり買い物のメモをわたされる。

「じゃあそれを買ってきてもらおうよ頼んだからね」

夢加は顔をひきつらせながら言う。

「も・う・す・こ・し、頼み方というものがあるんじゃないですか、おばさん？」

「おやおや、そんな小さいことにこだわるなんて、まったく仕方ないね、やってくれるかい？夢加」

（こいつううううう……。）

「だいたいなんで私に頼むのよ、ほかの人に頼むなり自分でやるなりすればいいでしょ」

「おやおや食べさせてもらってる身でよくゆうね、もらう分の3倍仕事をやれてやっと一人前だろう。文句言っていないで早く行っておいで、日が暮れちゃうだろう。今日は仕事無いだろう」

（答えになってない！！）

結局少女はこうしていても仕方ないので行くことにする。

彼女は亜魔ノ夢加あまのゆかおおざっぱに切られた、肩の少し上まで伸びた得にいじる事もない薄い紅色の髪をしているこの世界、魔界にすむで見た目14歳ぐらいの女の子ある。

魔界とはこの少女が住んでいる世界のこと。で半人や人とはまったく異なる存在や人とほとんど変わらない種族などなど実にさまざまな者たちが存在する世界である。

「転ぶんじゃないよー!」

後ろからおばさんの声が響く。

そう毎日毎日転ぶわけ無いだろうななどと思いながら夢加あ
るいていると、足に何かぶつかったかんじがする。そして一瞬の宙
に浮かぶ錯覚。

(へ?)

ドサ!!

遠くで笑ってる声が聞こえる、夢加は顔を赤らめながらも
起き上がり、街に向かって歩きだす。

(かってに笑ってなさい)

そんなことを思いながらかいものをすませに、街に向かっ
て歩いてゆくのであった。

街の名はベルウェル。村から約一時間強の所に在るそこそ
こ活気がある街だ。

ベルウェルまで向かう道も歩きやすく、見渡しもいい草原
が続く道だ、一番王都に近い街でもあり私、夢加が仕事バイトをしている
所もこの街にあるわけだ。

そして国の名前はリサ・ウルスと言う。そして今、この国
は周りの国に対して戦争を仕掛けている真っ最中なのだ!、戦争に

より魔界全土を征服することで世界共通の秩序をつくり、世界の安定を。という理由でベサリウス王がその正義をふりかざして周りの国を襲いはじめたのが始まりだ。

周りの、そこらへんの国ぐらいなら簡単におとすぐらいの力と実力は持っているリサ・ウルス国は今もそれ続けている状態だ。

（私の生活に影響がでなきやいいんだけどな・・・）

夢加はぼんやりとそう思う。

「それに私はそのやりかたで最後までうまくやりきったやつを私は知らない」

そんな独り言をつぶやきながら少女は買い物をすませるために市場に向かうのであった。

「えーと今日買うものはと、・・・・・・・・なに、この量は」

夢加が開いたメモには約1.5メートルにわたってビッシリと小さい文字で注文が書かれていた。

「ほんと、自分で買ってほしいよ、ええと料金は」

渡されたお金を数えながら料金を計算する。

「これがいくらであれがなにで・・・・・・・・・・よし、たりるね」

片っ端から買って行こうときめて、まずは野菜からだ走りだすのであった。

「おじさーん！これとこれ、あと………をください」

「いらっしやい夢ちゃん。今日はずいぶんとたくさんかうんだねえ、おつかいかい？」

「そうなんだよまたなんだよひどいよね！こんなたくさん夢加はバっとメモを広げて見せる。

「は、ハハハがんばりなよ夢加ちゃん。今、野菜包むからね」

「うん、よろしく」

八百屋のおじさんはそういいながら野菜を包みに奥に行く。そのときだった少女は、やつ’の気配を感じた。夢加に緊張がはしる。

（やつめ、どこ、どこにいる？）

やつの気配を探ってゆく

（上か！）

その場所を確定したのと同じ時。

「夢加、覚悟！」

店の上のほうから声がした。夢加は店の中から外へ飛び出

る。さっきまでいた場所の地面に小さい穴と砂ぼこりが舞い上がるのが見えた。

そして店の屋根からこちらにだれかが飛び降りてきた。

「いやー、避けられたか、残念」

そこには夢加と同じぐらいの歳だと思われる少年の姿があった。

「やっぱりあなただったか、じゅう」

夢加はそのやつを見ていった。それは夢加と見た目同じぐらいの身長をした少年だった。

この少年は白羽良銃（しらはらじゅう）私、夢加と同じ一人ぐらしでルーア村の住人だ。はっきりと言わないからよく解らないが、なんか今は別居している妹もいるとかいないとか、まあどうでもいいかな。

「危ないなあ、いきなりしかけてくるんだもん」

「そうでなきゃ奇襲になんないと思うけど？」

おとなしそうな顔で笑う少年。二人の間に火花がちる、周りの人たちが仕方なさそうに避難する。

この状況は・・・まあ、いつものことだ。犬猿の仲というわけではないけどまあ、あれだ。喧嘩友達ってやつじゃないかな。

そして二人はお互い相手の様子をみた状態にいる。

先に動いたのは銃のほうだった。すばやく両手に拳銃と思われるそれを持ってこちらに向けて撃つ。弾として出るのは鉛ではなく光、その光弾が銃の拳銃から撃ちだされる。

彼が使っているのは気銃という武器だ。簡単に説明するならば鉛の変わりに気と呼ばれているものなどを飛ばす武器だ。

そして飛ばされた数は3発。夢加は銃に向かって真っ直ぐはしり、左右のステップを踏むことでその光弾をすべてよけてしまう。そして赤く光る右手をふりおろすことで赤い光が銃に飛ぶ。

彼らが使っている光は主に気や魔力と呼ばれるものだ。気は身体強化に、魔力は術などを使うのに適しており、他の世界などでは魔法使いなど呼ばれたりするが二つともこれといった大した違いは無く単に二つとも力ちからと呼ばれていたりする。

銃は右に少し移動してその赤い力をよける。そして両手の気銃で夢加にむかって連続で発砲。

夢加は前へと走りながらそれを両手で全て後ろにはじく、そして銃へと殴りかかる。

(このー！！)

銃は彼女の後ろに着地するコースで上に跳び、夢加に発砲しようとするが、力の光がこちらに向かって放たれていることにき

ずく。

どうやら跳んだ瞬間にもうその動きにはいつていたのだろう、その光に当たる。

爆発がおこる。

「よっしゃ！次いくよってうわ！」

光弾が上空から放たれ夢加はあわてて左によける。

（させてたまるか）

銃はむりやり体の体勢を立て直した状態で下にむけてさらに連射。

夢加は飛んでくる弾に対して走りながら左右に移動したり行く向きを変えたり速度を変えたりそして周りの建物を利用したりして弾をよけるが、その弾のうち一発を前へ身を跳ばしてよけてしまう。

銃は着地、ダメージはうけているが撃つ分に問題はない、よって発射。

気銃から大きい一発が放たれる。

夢加に気弾が接近してくる、体勢は悪くよけることはできない。

（だったらやることは一つ！！！）

彼女は弾の強さ、角度、質などを瞬時に判断、そして。

「うあああああああああ……」

夢加は手のひらを合わせてそれを握り、両手でこぶしをつくり、それを下から上へとななめに振り上げる。大きな光弾をはじく、そして特攻。銃の顔面を殴り飛ばす。

吹っ飛ばす彼、しかし空中で体制を直してしゃがんだ状態で砂埃をあげながら地面をすべる。

そしてまた向かい合う二人、そのとき。

「バカヤロー!!!!」

ものすごい大声がひびきわたる。

「てめーらしいかげんにしやがれ。めいわくだろーが、喧嘩ならべつのばしよでやれ!!」

八百屋のおじさんだった。まあいつものことだ。

周りの人たちは事が収まったのが確認できると二人のところに歩いてゆく、そしてアル紙の束を渡し、こう言った。

「かたづけ、よろしく」

ただ、その言葉が二人の耳にこだまするのであった。

帰り道、太陽はもう落ちかけている。結局二人は壊した建物などの代金を借金することになったのであった。

その後、銃と夢加の二人は街のあとかたづけをやり、最後

にゲンコツを一発もらって、おそい家への帰宅をしているのであった。

「だいたいそっちがいきなりやってきたのが悪いんだからね」

「ふん、そっちだってよく同じようなことしてくるじゃないか」

二人は帰り道の最中ずっとこんな言い合いを続けていた。しかし、しばらくして。

「ハァー」
「ハァー」

と、二人してため息をつくのであった。

夢加が言う

「やっと返済できたと思ったのに」
「またやり直しだねハハハ」
と銃が答える。

「私たち、いつになったら返せるんだろう」
「さて、いつになるんだろうねえ」

苦笑まじりで銃が答ええてくる。そして明るい声で。

「まあ、なんとかなるさ、早く帰ろう。おばさんがきつとご飯作って待ってるよ」

夢加が微笑をうかべながら言う。

「そうだね、早く村へもどろつか」
二人の影が夕日に照らされ、のびていた。

「・・・な・・・で」 「こ・・・い・・・」 「こ
ないで！」

一人の少女が何か言っている。

「いや・・・こないで」

少女はおびえたように震えていた。

「なんで・・・ねえなんで」

震える少女に問いかける長い髪のもう一人の少女。そして、
その女の子の周りには何重もの光る円が存在している。

そして震えているほうは髪が短かった。そして、その短い
髪の少女が言葉を発する。

「もう、限界なの、こうしなきゃ・・・こうしなきゃわた
しが・・・」

この後も少女は言葉を続けているがよくわからない。そし
て周りも暗く少女の顔もよくみえない。

「そ・・・んな」

(ここは、どこ、夢？じゃあこの子は？・・・私？)
短い髪の女の子は幼い夢加だった。

ここはどこなのだろう、草原の中央に雲が月の光を隠す中
二人の少女がそこにいた。

「そんな・・・ことって」

それは傷ついたような声。どうやら長い髪の女の子は短い
髪の子の言ったことを理解しているようだ。

雲が晴れてゆく、月の光が草原にふりそそぐ。

「夢加、ひどいよ・・・」

（この子、わたし？）

「ゆるさない、こんなこと・・・、絶対にゆるさないんだ
からあー!!」

そこで目が覚める。

「へんな夢、なんだったんだろ」

自分と同じ顔の、けどどこか違うと感じる、そんな少女
だった。

（夢、ただの夢だね。気にすること、ないか）

窓を見ると月が見える。それも満月だ。

「まだ、夜なんだ」

いったん目が覚めるとしばらくは寝る気がしない。少女は

外に出ることにする。

雲がない、夜空を見るのには丁度いいと言えるだろう、夢加はしばらく夜空でも見ようと見晴らしがいい場所へと移動するのであった。

プロローグ（後書き）

皆さんとりあえず始めまして。感想、意見。何でも良いです。書いてくれたら幸いです。

月下の泣言

「月がきれい」

少女は村が見渡せるがけのような場所で月を見ていた。

「あれ、夢加なんでここに」

「銃？あんたもきたんだ。月がきれいだと思ってね。あんたは？」

「今日は満月だからね、見に来たんだよ。それでも毎月見に来てるからね」

そういえば前にもそんなこと言っていた気がする。

「満月か」

夢加はそうつぶやき、月を見ながら歩き出す。そのまま歩いていると足に何かが当たる感触がする。

（あれ？）

「そうだ、夢加、ここらへんは足下がデコボコしてるから……
・あれ、夢加？」

銃が周りをキョロキョロと見て探していると。

「おい」

声が聞こえるそれかなり近い所から。

「まさか」

銃が崖の所に歩いて行くと夢加が片手でぶらさがった状態でそこにいた。

「あー。わるいけど助けてくれる？」

にっこりと笑いながら彼女はそう言った。

「まったく、しょうがないなあ」

とりあえず手を伸ばし、つかもうとする。

ボコ

そのきだった。夢加のつかんでいた所が崩れたのである。

「へ？」

と夢加。

「なあ！？」

と銃が言い、ぐわし！と反射的に夢加の腕をつかむ。

「うわ、重っ」

「ししし、失礼な！落としたら怒るからね！殺るからね？化けてでるからね？」

「とつとにかく落ち着いて。引き上げればいいんだろ？簡単だよ」
そしてさらに銃が夢加の手をつかむときから支えとしていた手の所
が崩れる。

「なあにいい!？」

銃はなんとか足でぶらさがる。

「ぎゃー!! 足の力ぬかないですよ？おちないですよ？とにかく早くの
ぼらなくちゃ」

「うううううう・・・きつい」

・・・・・・それからしばらくして

「「はぁー」」しばらく地面に倒れこんでいた二人は起き上がり二
人ほぼ同じタイミングでため息をつくのだった。

「夢加、おまえ」

銃が怒ったような声で言う。

「わざとじゃ、ないよ」

とりあえず笑ってみる

銃は、もういいと言って銃はそっぽを向いてしまう。

「怒らないでよー。ねえ、銃？次からはきょうつけるから、ね？」

銃はため息を一つつき、仕方ないなあと夢加の方にむいてやる。それにより銃はあるものにきずいた。それは空から近づいてくるたくさんの光だった。

「あれは、戦艦？」

夢加が後ろを向いてその戦艦を確認する。

「シルエト軍のマークと旗がしてあるね。理念は愛と真の平和とかそんなところじゃなかったけ？ 国に奇襲でもしかけるのかな」

「ということはみんなには害はないってことだね？」

銃が心配そうに言う。

「大丈夫だよきっと。なにもしなければね。まあ、伝えるとしても方法が走って隣町ぐらいいしか残されていないだろうけど」

「うん、最近村の住民じゃない人とかよくみるからなあ」

さて、どうしようかと夢加が聞いてくる。

「なにが？」

聞くと夢加が答える。

「今夜は野宿かなあって。今から戻ったら捕まるよね」

夢加は困ったように言う。

「ハハハ、そうだね、戻るのは無理か」

銃はガツカリしてうなだれる。とりあえず向こうから見えないところまで移動して焚き火を付ける。そこでしばらくの時間すごしていると、突然爆発の音が聞こえる。何かと思い見てみると今度はシルエト軍とは反対側から違う軍が来ていることに夢加がきずく。

「あれ、今度は・・・って銃、あれ、王国軍？」

その軍隊は確かに王国軍の旗を掲げてそこにいた。そしてその主砲にはどの艦もすでに光がともっている。

「そんな・・・まさか、この村ごとやる気!？」

「夢加、非難するぞ。ここもあぶない」

銃は夢加を無理やり引張って走り出す。そして爆発。王国軍の主砲の束が発射されたのだ。二人の意識もそこで失う。

「兄さま、兄さま。起きてください、兄様」

だれかの声がきこえる。ちょっと待ってよ、疲れてるんだから。

「ねえ、兄様。私もいつか兄様みたくなれますか」

ああ、当然だろ、なにせきみはぼくの妹で・・・なんだから。

ちゅんちゅんちゅん

「ん、朝、か」

目を開けたらそこには空が広がっている。

「あれ、どうしてぼくはこんな所で」

そうだ、月を見に行っただ。それから夢加がいて、それから夢を見て、それから・・・。

「そうだ、村は、村はどうなったんだ！」

銃はガバツと飛び起きた。そして村の状態にきずく。

「そんな・・・」

村はその痕跡を少しだけ残して消えていた。そして夜、空を見た場所さえも吹き飛ばされていた。それから銃は、はっときずく。

「夢加は、夢加はどこに」

銃は大声を出して周りを探し出す。

「夢加――どこだ――！！」

しばらく探してみたが見つからない。村のほうに行ったのかもしれない。銃は村を指指して走り出す。

村は、いや、村だった所はやはりひどい状態だった。上から見ただ人が住んでいた。それなりに住んでいた場所は元から何も無かったかのようだ。

銃は夢加をしばらく探していたがついにその後姿を見つけ出す。夢加は大きな岩の上で座っていた。少しためらいながらも銃は声をか

ける。

「夢加。やっと見つけた」

声に振り返った夢加は泣いていた。気まずい沈黙が二人をおそう。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

先に口を開いたのは銃だった。

「ぼ、ぼくは何も見えてないよ」

そう言いながら銃は自分で自分の目を手でふさぐ。ホントなにや
てるんだろう。そんな姿におもわず。

クス。と笑う。

「む、今笑ったろ、これでも必死で考えたんだからな」

「ごめん、ごめん、あまりにも馬鹿らしくてね」

そう言ってから少し間をあけてからまた言う。

「ねえ、みんな無くなっちゃったね」

「しかたないよ。しかたない事なんだよ」

さびしそうに言う夢加に銃はそういつてやることしかできなかった。

「うん、そうだよね」

それからまたしばらくおいて。

「ねえ、銃。悲しいね」

それはすごく小さな声だった。しかし、銃にはその言葉が大きくひびくのであった。

それから2、3週間たったある日。

「旅にでる？」

二人の生活はあるていど安定してきたある日の事だった。

「うん、お金ならギルドのライセンス持つてるから心配ないからね、仕事には困らないよ」

「どうして急に」

「急にじゃないよ。前から考えていたことだよ。それに・・・」

夢加はそこでいったんせりふを切る。

「まだ割り切れてるわけじゃないから。少し・・・つらいんだよ。ええとそれでね、一緒にこない？」

「旅か」

少女の目がどうする？といっている。いいかもしれない。前のこともあるがこの国は色々といづらい理由があるし、それに面白そうだ。返事を言うと少女はうれしそうな顔をする。うん、旅に出よう。

その日空は晴れ晴れとしていた。

新しい日常。

ここはギネルラ。この街の酒場に男女の二人組みの、子供が入ってきた。

カラン、カラン。入り口に付いている鈴が鳴る。二人の子供は入って、カウンターごしの椅子に座る。

「いらっしやい。お客さん、見ない顔だね、旅の人かい？」

二人のうち、少女の方が答える。

「まあね、気の向くまま各地を転々とね」

「男女二人でうらやましいかぎりです」

「もう、そんなんじゃないですよ。あ、私は麦茶とパスタで」

「僕はミルクで」

二人の前に注文した物が置かれる。

新参者を警戒しているのか周りのやつらが二人のことを見ているが、二人ともそれを無視している。そんな状態の中、少年が少女に話しかける。

「さてと、ねえ夢加。これからどうしようか」

夢加と呼ばれた少女が答える。

「そうだね、とりあえず宿の予約でもしない？夜、探して空いてる所が無かったなんてこと、嫌だからね」

少年はしみじみとした感じで喋りだす。

「そうだなあ。また外で寝たくないからなあ。お金の方もそろそろ危ないんじゃないかっただけ？」

「そうだったっけ？じゃあ、こなし屋としてギルドの仕事請けなきゃね」

そうして喋っていると酒場のマスターが話しかけてくる。

「へえ、きみ達ギルドの資格持ってるんだね。きみ達みたいな子供がめずらしい」

それに対して夢加が自慢げに胸を張って答える。

「へっへっへ。すごいでしょ。こなし屋としてはかなり年少な方ですよ」

その時、後ろから大きなごっつい、イノシシ男がやってきた。

「へ、たかが新人。どうせ雑用ぐらいしかできねえよ。試験つたって、大して難しいわけでもないしな。ただやろうとするやつがないだけだろうが」

こなし屋とはこの世界の便利屋だ。物探しだろうが何だろうがお金さえ払えば法律に反する物意外なら何でもやるという仕事だ。よくその街の仕事を依頼したり受けたりする場所、ギルドにお尋ね者の写真などが貼ってあったりする。

夢加はイノシシ男の言葉にムツとしながら言った。

「ふん、見た目で判断しないでほしいね。これだから見た目しか気にしない雑魚は嫌なんだよ!」

「口だけの何もできないガキが、ほざくな」

「ほら。だから雑魚だって言うんだよ。結局、見た目で勝手に決め付けてる」

二人の口げんかはそれからしばらく続いたが、イノシシ男が口論の末怒っう。

「このガキ!」

イノシシ男がテーブルに手を叩きつけ、その拍子にテーブルに置いてあった夢加の麦茶とパスタが皿の割れる音と共に床に落ちる。

「あーーーーー! ! ! !」

少女のすさまじいほどの悲痛大声の叫びが店内に響き渡る。

「グス。私のグス、食べ物」

少女の痛げなすすり泣きが聞こえる。

「な、なんだ。文句でもあるのか」

あるに決っている。人の大事な大事なパスタをよくも落としたな。しかもなんだ、その言いぐさは。まだ一口も食べていなかったというのに、この。

「ブタやろう」

少女は一言つぶやいた。その言葉にイノシシ男（ブタ男）は激怒する。

「んだとこのガキ！もういっぺん言ってみやがれ」

「何度だって言ってるこのブタやろう。人の食べ物をよくも、絶対に許さない」

夢加は怒りと悲しみをこの身に秘めて立ち上がる。イノシシ男（ブタ男。）が自分の武器の大きなハンマーを持ち上げる。

「ぶらああああああ！！」

「このおとおおお！！」

そして二人はぶつかりあう。

少女と少年は外を歩いていた。

「てへへへ。ごめん、銃」

夢加は少年、銃に謝りながら歩いていた。

「あのイノシシさん、今頃店の弁償かな」

銃が遠くを見ながら言う。

喧嘩は結局、夢加の勝ちだったが、その喧嘩で店の色んな所を壊してしまったので夢加が男を倒した後すぐに食事代を置いて逃げてき

たのだった。

「店の喧嘩は負けたほうが払うのが常識だよ」

「その常識はいつ考えたもの？」

夢加は今、と答えてからほら、仕事に行こう。と、ごまかすのであった。銃はため息を一つ、つく。

「まあ、いいか。めんどくさい仕事を請ける事にならなければいいんだけど」

そうして二人は歩いて行くのであった。

ここはブルムクラント、言う街。その街に一人の少年が夜道を一人歩いている。

「もう少しだ。もう少しで」

その少年は一人喋りながら歩き続ける。

「あと少しでおまえを」

そして夜空を見上げる。

「間に合わせるさ。ユイナ、おまえを見送るその前に」

そして少年は歩いて行く。

思い会う二人

「行って来る」

ブルム克蘭と言う街の住宅街の外れにある古そうな家から声がする。

「お兄ちゃん。行ってらっしゃい」

小さい女の子が何処かへ出掛けるらしい少年を見送っている。

少年の名前は狩留家・瞬歳かるがしゅんはだいたい見た目18歳という所だろう。

「きょうつけてね、けがしちゃいやだよ」

兄と呼ばれた少年はその妹の頭をなでる。

「大丈夫だ。心配性だな、ユイナは」

兄と呼ばれた少年は妹の声を聞きながら歩き出す。

（えーと、今日は・・・）

少年は今日の仕事を確かめながら今日の仕事場へと向かう。そしてある店の前に着き扉を開けと。

「いーや。650だ650にしろ！」

「いやいや、いくらなんでも、730だ。こ・れ・以上・は!!ま
けられないよ」

大声で喋りあっている一人はこの店の店長だ。もう一人は客だろうか、赤い髪の女の子とその彼氏? 困ったようにその店長と女の子を見つめている。どうせ客が商品をまけてくれとでも言ったのだろう。他の店員も何人かいた筈だが店長が出ている所を見ると全員、言い負かされたのだろうか。あの店長とまともにやり合えるとは、あの少女、かなりの熟練者と見た。

「くうーなら、これでどうだあ!」

「いや、ここなんて・・・じゃない。それに」

「これは、これこれこういう物で・・・」

それからもしばらく言い合いが続く。しばらくして少女とその彼氏? が店から出て行ってから店長がこちらに喋りかけてくる。

「ふっ、手強い相手だった、ひさびさの強敵だった」

「で、結果はどうなったんですか?」

「900の物を520で売れと言われたが710で売ったよ。ふ、ふふふふ覚えてるがいいあの女。今度来た時がおまえの最後だ」にぎり拳を作りながらそう言った。どうやら悔しがっているようだ

「そんな事より仕事だよ、仕事。ほらほら瞬君もさっさとして」

はつとした様にそう言い出す店長。話しかけてきたきたのはそっちなのに

（そろそろ昼か。ユイナ、今日も持ってくるのかな）

そんなことを考えていると店員の一人が腕を首に回してくる

「んっふっふ。おまえ今日も妹さんが持ってきてくれるのかな？ 瞬くんは」

しょうがなさそうに瞬が答える。

「そうですよ、作らなくていいって言ったって作ってくるんだから仕方ないでしょ」

「あーあ、そんな事言って。妹は大切にしろよ」

言われなくてもそうしてる。

「ふん。俺ほど妹のことを想ってるやつなんてそうは居ませんよ」

「はっはっは」

店員はそう言うのと笑いながら行ってしまった。なんだというのだろう。

その時外が騒がしくなり始める。喧嘩でも始まったのだろうか。店長が隣りで肩をたたく。

「まかせたぞ」

めんどくさいが仕方がない、店のガード役もやっているのだから。

(まったく、どこのどいつだ。店の前で喧嘩など。めんどくさい)

外に出て様子を見てみると4人が騒ぎの輪の中心にいた。さらにその一人が朝の赤い髪の少女とその彼氏？だったのだ。あの客とうんざりした気持ちでもう二人を見てみる。もう一人はツンツン箒頭と言うべきなのだろうか、まさにいじけたガキという雰囲気撒き散らしている金髪だった。

そして最後の一人はなんと。

(ユイナ!?!・・あの箒頭)

ユイナだった。箒男がユイナに言い掛かりをつけてるに違いない。妹を助けるべくその人の輪をかきわけて行くのだった。

「行ってらっしゃいお兄ちゃん!」

ユイナは兄、瞬を見えなくなるまでお出迎えした後家に入る。

家のお兄いちゃん狩留家・瞬はさまざまな仕事をいっぱいやっていて毎日我が家の借金を払うため朝、昼、晩ってかまわず仕事をやっているの。その中にはよく怪我とかもあるみたいでとっても心配しています。だからせめて少しでも楽しませてあげれたらと思ってがんばった結果。家の事は一通りできるようになったのです。すごいでしょ、エッヘン。

瞬が出て行ったあとユイナはまず朝ごはんの食器のかたづけ、それが終わったら洗濯物だ。さすがに手洗いは時間が掛かりすぎるので

少し無理を言って洗濯機を買ってもらった。

「んっしょ、んっしょ、ふう」

洗濯物を入れ終わったのですいっちを押す。洗濯機が動く姿を見ながらよく買ってもらえたなあ。自分ながら思うのであった。でもその洗濯機をめぐる言い争いは数時間にわたり、繰り広げられたのだが。

それから家の掃除をやって弁当の準備を始める。

「今日はー何にーしっようっかなー♪」

歌いながら二人分の食事を作る。弁当を作り終えたなら後はこれをお届けるだけだ。ユイナは兄の今日の午前の勤め先に向かって歩き続ける。

店が見え、そこに向かって走り出す。その時だった、横から歩いてきた、だれかにぶつかってしまう。

「いってーなーこのガキ、きょうつけやがれてんだこのクソガキ」

あたってしまった相手はおそらく男。肉体年齢はわからないが変なツンツンな、そうまるで箒みたいな頭をしている。

（ふわー、すごい頭、色も何か不自然だし、形も変。はっ！まさか妖怪の変装！？）

その男が何か言ってきたので、ついこう謝ってしまう。

「え、ごめんなさい不思議頭の妖怪男さん」

「ああ！んだとこのガキヤ！！」

無邪気ならではの言葉と言うべきなのだろうか。

「どうやら年上に対しての言葉ってのを教えこまなきゃならねえ様だな」

妖怪男が襟首をつかんで少女を持ち上げる。

「ふあ？んんん、放して、このお」

そしてそいつが今、まさに殴ろうとする。

「ふおゴガ？！」

そんな時、だれかの手が伸びてその男の顔にまさにクリンヒット！
！とゆう風にめりこみ、地面へと叩き伏せてしまう。

「あーあー。だらしのないなあ大の男がこーんなカワイイ子をいじめるなんて」

見ると赤い髪をした女の子が下に見える。どうやら自分は上に跳ばされたようだ。

（うわーたかーい）

落ちたら痛いかなとかの考えとかは考えなかった。体に振動が来ても痛くなかったので見ると、今度はおとなしそうな男の子に抱えられていた。

「だいじょうぶ？」

にっこりと笑いながら言う。

「てえめーら!!」

顔を真っ赤にして言うどうやら怒ってしまったようだ。

「かくご出来てんだろうな。おめえら」

そしてそいつが今まさに殴りかかろうとした時。男が横にまた吹っ飛ぶ。

「店の迷惑だ」

そう言いながら上げた足を下げてそこに立っていたのは。

「お兄ちゃん！」

そう、その男はユイナの兄、瞬であった。

その思い　その理由

夜、瞬とユイナの家に二人の客が訪問していた。

「二人とも、今日はユイナが世話になった。ありがとう」

瞬はユイナを助けてもらった礼として二人を家に招待したのだった。二人は女の方が夢加、男の方が銃と名乗った。

「いやいや、当然の事をしたまでだよ。しかし、聞いてはいたけどここまでボお・・・」

夢加はそこまで喋ったら言葉を止めた。瞬がどうしたのかと聞いてくるがなんでもないと答えておく。

（銃、おまえ・・・）

見ると夢加の腹に銃の肘がめり込んでいるのだった。しかし銃はそんなの知らないというふうに話を続けるのだった。

「まったく、ひどいもんですね、こんな小さな女の子に暴力だなんて」

（あの子はだめで私はいいいのかよ）

（やかましい、他人の家にお邪魔しといていきなりボロくさいやおんぼろなんて、いくら本場で周りの人が思ってるからって失礼だろ）

銃と夢加がテーブルの下でひそかに戦り合い始める。

（てめえら聞こえてんだよ！！）

瞬はひそかに思うのであった。瞬はあの後まだ仕事があったので礼はそれが終わった後、せめて宿泊と食事を作ってあげるぐらいはとゆうことになったのであった。

ついでに食事の材料の代金は夢加たち二人がだした。その事について夢加が文句を言う。

「それにしてもなんで私達がお金を出さなくちゃいけないのー？」

「当然だろ、これからしばらくこの家に泊まるんだろ？せめて今日ぐらいは出してもらわなきゃな」

お礼じゃなかったのか？！！！！

その事について聞くと。

「ああ、それなら食事作ってやっただろうが。それでチャラだ」

あれ、話ちがくね？なんてことを感じながらも夢加は言い返す。

「恩を受けた側が勝手に決めるな！それに客に何か出すのは当然だろ！」

そんな二人のやり取り横から見ていたユイナは思わずく

すと笑ってしまっただった。

夜、ユイナが食事の後片付けを終えてのんびりして椅子に座っている所に宿泊することになった男の人がリビングに入ってくる。そして前の椅子に座ってくる。

「楽しそうだったね、二人とも」

たしか銃と名乗っていた人だ。ユイナはにっこりと笑いながら答える。

「うん、あんなに楽しそうなお兄ちゃんは、ひさしぶりにみたよ」

そんなユイナを見ながら、聞くかどうか迷っていたが、ある疑問に思っていることを聞いてみることにする。

「寂しくないの？いつも一人で」

それを聞くとユイナは一瞬驚いたかのように目を見開くが、すぐに元に戻る。それから静かな調子で、そしてしんみりとした表情で口を開く。

「仕方ないよ、私のためにがんばっているんだもん。普通にお金を返したり生活費貯めるだけなら、あそこまで頑張る必要なんて全然無いのに」

どうゆうことなのだろうか。そんな疑問がまた出てくるが、それ以上は聞かないことにする。最後の質問として銃はこんなこと

を聞く。

「ねえ、ユイナちゃん。お兄ちゃんのこと、好き？」

「うん、大好きだよ！」

満面の笑みを浮かべながら答えるユイナをかわいいなあと思う。銃は、つい思ってしまうのであった。

（大事にしなよ、お兄ちゃん）

夜、その家にはしばらくの間、光が灯っていた。

「おはよう」

朝、夢加が目を覚ます。

「おはようございます」

ユイナが起きてきた夢加に朝のあいさつをする。夢加はそのまま台所で顔を洗う。顔を拭いて周りを見た夢加は銃と瞬が家にいないことにきずく。

「あれ、二人は？」

「お兄ちゃんは仕事で銃さんは判らないなあ」

そうなんだ、と言いながら夢加はテーブルに座る。夢加と銃がこの家に泊まり初めてもう5日たった。

ちよつとまってと言いながらユイナは台所に入る。それ

から音が台所からはじめる、朝食でも作ってくれているのだろう。少しして食事が運ばれてくる。

「ユイナちゃんは優しいね、泊まらせてもらっている上に朝ごはんまで作ってくれるなんて」

朝食を置きながらユイナが言う。

「そんな事ないよ、お昼を作るついでだもん。ついでに言っておくけどもうすぐお昼だよ」

「あはは、少し遅かったかな。まあ、でも今日はすること無いしいいじゃない」

ねっ、と片目をつぶってウインクをしてくる。まったく、

この人は。

お弁当を作っている途中、夢加が朝食を食べながら聞いている。

「今日も瞬にお昼持ってくるの？」

夢加が聞いてくれたので答える。

「そうだよ、お弁当も、もうすぐできるよ」

「今日は何処の仕事場だっけ」

「えーと、今日の朝はカエリアの店。ほら、前の喧嘩があった店だよ」

なぜそんな事聞くのだろうと疑問に思い、夢加の方を向いて見ると、そこには少しばかりニヤついた少女の顔があるのであった。

「よし、暇だし、私も付いてくよ」

「夢加さんも？じゃあ、お弁当もってちょうだいね」

もちろん、と夢加はにっこりとわらうのであった。

ここはレストラン、ザ・ガーデンこのユイナと夢加はこの店で昼食をとることにした。

「ふー。つかれた」

夢加はレストランの席に座るとぐったりとテーブルにうつぶせになる。その姿を見ながらユイナは呆れたといわんばかりの表情だ。

「付いてくるのはいいんだけど、店の人と喧嘩するのはやめてほしいな。」

店の人と夢加が喧嘩（言い合い）をしているのを見ながらため息を吐いていた兄の姿を思い出しながら言った。

「あまいね、ユイナちゃん。ショッピングは、戦争だよ」

意味不明な言葉を言っているがユイナはそれを無視する。わたされたメニューの絵を見ながら何を食べるかを選ぶ。じゃあこれ、と選んだのはファルシングフィッシュリデントという名の料理だ。

「うわ、高、なら私はこれだ。ポークディフェレントのカルダントセット！」

なぜかそれに対抗して止めればいいのに夢加も高い料理をたのむ。

「さてと。ねえ、ユイナちゃん。料理がくる間ちよつと話しがあるんだけど、いいかな？」

ユイナは突然の話になんだろうと思いながら答える。

「ん、いいけど何？」

「部外者の私が聞くのもなんかなーと思ったんだけどね。瞬のことで、聞きたいの」

そこで一旦間をあけてから夢加が話を始める。

「なんで瞬はあそこまで無茶しながら仕事をしてるの。借金をしてるって聞いてたけどそんな話も周りの人たちからは聞かないしどうなっているのかなって。あのままじゃ体の方が壊れるよ」

それを聞くとユイナは悲しそうな顔をしてうつむいてしまう。どうしたというのだろう。

夢加が不仕儀に思いながら見ているとユイナはうつむいたまま話し始めた。

「実はねその借金。もう払わなくていいことになっているの。でも家のお兄ちゃん、変なところで頑固だから」

どういふことかと思っていると横から突然、のんびりとした声で話しかけてくる者がいた。

「アラー。ユイナちゃんじゃないのー。奇遇ねえこんな所で」

ユイナは声の方を見てからこちら見てを話を続ける。

「調度いいね、紹介するの。この二人が我が家の借金を払ってくれた人たちで、それから。私の2番目の両親です」

そこには見た目約37歳前後の二人組みの男女が立っていた。

夢加がこの二人はだれかと聞くと、ユイナは答える。

「こっちの男の人がイルフェリ・ゴル・リブルンさんで女の人がアリスンさん二人は夫婦なんだよ。それで今話をしていたこの隣の人は亜魔ノ夢加さんだよ」

二人の夫婦と夢加はそれぞれお互いに挨拶をする。それから二人の夫婦はユイナ達の隣のテーブルに座る。そしてイルフェリさんがユイナに話しかける。

「今日は外食かね？めずらしいね、ユイナちゃんが外で食べるなんて」

「うん、今日は全部払ってもらうからお金の心配はいらないから」

「はっはっは。なるほど、そうゆう事か・・・しかし、きずけばもうすぐなのだね。いや、やつとの1年間と言うべきか。本当に良いのかね、私達としては嬉しい限りだが」

「うん。もう、決めた事だもん。当日にも改めて言うけど、

よろしく願います」

そう言って頭を下げるユイナその目にはある種の決意とも言えるかもしれない光がやどっていた。それを見たイルフェリは困ったもののだと言わんばかりの表情だ。

「お兄さんの事もあるから日にちを伸ばしても、払わなくてもいいと言ったのだが」

ユイナもイルフェリと同じように困ったとゆうような表情で話す。

「家のお兄ちゃんほ、ほら、頑固だから。意地とプライドも混じってるんじゃないかな」

それにねと、ユイナは苦笑しながらさらに話を続ける。

「心配なんだって。減らせる噂は少しでも減らしておきたいとか、このままお金を肩代わりしてもらうなんてそんなかつこ悪い事できるか。せめて借りていた借金全額返してやるってね。馬鹿みたいでしょ？」

「そうか、確か今回の大会で優勝すれば払いきれんだっ
たな」

夢加は話に入るタイミングがつかめないのと真剣な話をしているようだったので黙って気にはなったのだがその話を聞いていたのだった。

ユイナの家への帰り道。夢加はレストランでの話しが気になったので、その事をユイナに聞いてみた。

「ねえ、さっきのザ・ガーデンでの話しなだけでさ」

「さっきの事だよ、私ね、あの人達の子供になるの」

ユイナは語りだす。

「そしてね、うん、まず借金の話からしようか。私を生んだ人達はどっかに消えちゃったの、たぶん借金が理由で。元々人が良かった善かったりしたのかな？それからお兄ちゃんが仕事をやりだして、そんな中だよ、あの二人が借金を肩代わりしてくれたの。消えた二人の知り合いでね、前からよく家に来たりしてた人達なんだよ。と、こんな感じかな。まあ、ありきたりの話だよ」

どう？、とユイナが聞いてくる。だいたいのところは理解した。こう言っちゃなんだがほとんど予想通りな展開だ。養子に行く話はその後誘われでもしたのだろう。

「あの人達といるとね。安心するの。うまく説明できないけどね、まるでお父さんとお母さんという時みたい。他人なのに、変かな？私」

ユイナは顔を赤らめながら微笑んだ。夢加はそんなユイナを微笑ましい気持ちで見ている。夢加はそんな彼女の頭をなでる。

「いや。ぜんぜん変じゃないよ」

「でも、お兄ちゃんは断っちゃった。それは少し、残念だ

な」

その言葉を呟いた彼女は少しだけ、悲しそうに笑っていた。

昼過ぎ、瞬はいつも通りに仕事場にいた。

「ふう、そろそろ、午後からの仕事に行く時間か」

三日後のこの街にある闘技場での大会に勝てば金はすべて払い終える。その前日と当日用事は何も入れてない。午後のほうも含めて、そちらはかなり苦勞したが。

「頑張らなきゃな」

自分にそう言い聞かせ次の、午後からの仕事に行くのであった。

夜、晩御飯も食べ終わり、瞬は屋根の上に、上がり、夜空を見ていた。

「もう少しなんだな、目標まで」

瞬が考え事にふけっていると誰かが屋根に上ってくる事にきづく。上ってきたのは銃だった。銃は片手を上げて挨拶をする。

「やあ」

「なんだ、お前か」

「なんだとはひどいな」

銃が瞬の横に座る。

「聞いたよ、妹のこと、借金のこと」

瞬は短くそうかとだけ答える。

「一つ聞いていいかな」

「なんだ？」

「どうして君は、養子に行かないんだ？」

そうだな、と瞬は頭をかきながら考える。

「確かにあの人達はいい人だ。信用もできる。だけど」

瞬は一呼吸おいてから答える。

「だけど、俺にとっての両親は借金押し付けてどっか消えちまったクズどもの方なんだ。あの人達は確かに好きさ。でも、親とは思えない。たとえば言われてもバカだと言われてもいいんだ、俺は今でも、あの二人以外を親と認めたくない」

瞬はそう言うってから月を見上げて絶対に、と呟いた。そうか、と銃は呟く。そして立ち上がりながら言う。

「それなら、僕からは何もいえないな」

そして銃が屋根を降りようとする時、最後に銃は振り向い

て言う。

「三日後の大会、勝ちなよ」

瞬はふっと笑ってただ一言。

「当然だろ」

と言って返すのであった。

そして夜はふけてゆく。

鐘の音を余所に

「よし、いくよ、それ」

長い赤髪の少女が一人、ボールで遊んでいる。その少女は何度も壁に向かってボールを蹴って、戻ってきたボールをバウンドさせずにまた壁に蹴る、それを繰り返し行っている。そして、少女が一段と強くボールを壁に蹴ろうと足を振りかぶりながら言う。

「いくよ、夢加。今度は負けないよ！」

そして、ボールは一段と強く壁に向かって飛ぶのだった。

朝。夢加は目が覚める。それから起き上がりながら呟く。

「夢、か」

たぶん昔の夢だと思う。めんどくさがって髪をほとんど切らなかった時の昔の自分の夢。

「ふふふ、懐かしいな」

そう呟いてから、少女は布団から抜け出し、窓から外を除く。確か今日は瞬の闘技場大会出場の日だったはずだ。そんな日ぐらい、早く起きるのも悪くない。

夢加が窓の外を見ると小鳥が三羽、向こう側へ飛んで行くのが見え

た。

大会当日。瞬は起きた後、洗面所で顔を洗った後、いつもは引っ掛けたままになっている、ある紐を後ろ髪に結び付けて髪をまとめる。

「よし！」

そんな時だった。後ろから声が聞こえる。

「お兄ちゃん。起きてたんだ」

ユイナだった。

「ああ、昨日は早く寝たからな。いつもより早く起きちゃった。ユイナはいつもこの時間に起きてるのか？」

「普段はもう少し遅いよ。私もいつもより早めに目が覚めちゃった。ねえ、お兄ちゃん」

ユイナがこちらを呼んだので、なんだと返してやる。すると。

「今日で返しきれるんだよね」

「まあ、勝てばな」

「勝てるよ」

ユイナが断言する。それからユイナは真っ直ぐ兄を見ながらしつかりとした強い口調で言う。

「家お兄ちゃんが。あんな大会ごときで、負けるわけ無いよ。だから、かっこよく、決めてよね。お兄ちゃん」

「ああ、当然だろ。俺が負けるわけがない」

そんな妹に瞬も断言して、その言葉に答えた。そして、その言葉を聞いて、ユイナは笑顔になるのであった。

闘技場入り口。夢加たちはそこに集まっていた。

「それじゃ、私達は観客席の方で応援してるよ。」

「まあ見てなって。こんな低レベルな大会、勝って賞金ゲットしてくるぜ」

そう言って瞬は選手控え室の方に歩いて行ってしまった。瞬が行った後、夢加は誰かを探すように周りをキョロキョロしている。

「それにしてもさ、ユイナちゃん。遅いね」

夢加が周りをキョロキョロしながら言う。

「そうだな、弁当作ってから行くって言ってたから、もうちょっとかかるかもしれないなあ」

「んー、仕方ない、私達は先に観客席で見ようか。もうすぐ試合、始まっちゃうよ」

そして、二人は観客席の方に向かうのであった。

ユイナは道を歩いていた。

「予定よりも遅れちゃったな。ちょっと頑張りすぎちゃったかな」
急いではいるが、中の料理が心配で走る事はできない。よってユイナは早歩きで今現在、闘技場へと向かっている途中なのであった。

「間に合うといいんだけど」

一回戦の途中ぐらいなら間に合うかもしれないと、さらに足を速めるのだった。

そんなユイナの後ろを付けているやつらがいることにユイナは気付かずになっていたのだった。

「よお、見つけぜえ」

夢加たちが観客席で瞬の出番を座って待っていると箒頭をした誰かが話しかけてきた。

「へっへっへ。お前等よお、瞬のやつと知り合いつだったなあ。ちよつと渡して貰いたいもんが在るんだけどよお」

無視。それが夢加たち二人が下した判断だった。というのもこういうやつらは話しているだけでぶん殴りたくなるほどウザイので見ると嫌だというのが二人の考えだった。

「おい！聞けよ！おいつたら。これが見えねえのか！」

無視しても、いっこうに止める気配がないので夢加がつい無意識の内にぶん殴って吹っ飛ばしてしまう。何か悲鳴のような物がするが二人は気にしない。そして殴った後にある紙切れが振ってきた。その内容は、こう書いてあった。

“こいつは預かった。返してほしければ。第13番倉庫までこい”

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しばらくの間、沈黙が続く。最初に口を開いたのは銃だった。

「脅迫状？」

ごく普通の言葉しか頭に浮かんでこない。

「みたいだね。で、こいつは誰の事？」

うーん。と二人してしばらく考え込む。そして今度は二人同時に思いつく。

「「ああ、ユイナか!？」」

そういえばまだ来ていなかった筈だ。瞬に伝えるか伝えないか、どうしたものか。夢加もこちらを見ながら目でどうする?と聞いてくる。試合はもうすぐ始まるはずだ。瞬に伝えたらそのまま試合放棄でもしそうだ。よって瞬に伝えるという選択肢は消える。

「仕方ない」

銃は本当に仕方なさそうに言う。

「僕達で行こうか。たすけに」

「あーあ。やっぱりこうなるのか。瞬にはどう伝える？」

「そうだなあ……黙って行っちゃおっか」

「だね」

そして二人は歩き出す。闘技場の外へと。ユイナを助けるために工場へと。その時に響いたレディーファイト！！の声と鐘の音を聞きながら。

第13番倉庫。ユイナは倉庫の二階、と言っても壁に手すり通路がくっついて固定された場所と言えは分るだろうか、とにかくそんな場所で見張りらしき黄色頭のやつとそこに居た。一階には木箱やらドラム缶などがそこら中に重ねて置いてある。

「ふあーあ」

ユイナはあくびをしながら眠い目をこすっていた。眠い。こうやって待っているだけだと暇なあまり寝てしまいそうになる。どうせこいつらはいつもの喧嘩やいじめの粛正の腹いせにユイナをさらって家のお兄ちゃんを脅して、大会失格！なんて事を考えているのだろうが。

まあ確かにそんな事を聞けば大会無視して真っ先にこっちに助けに来てしまいそうだが。まあ、それはそれで嬉しいのだが。

（来るわけないよね。あの人たちが止めるだろうし）

そうやってハァーと、ため息を吐いていると倉庫の扉がガラガラガラと開き始める。そうして、そこに立っていたのは。

「お兄ちゃん！？バカ、何できたの」

「ユイナあー！待ってろ。今助けるからなあ！」

そうして周りの人たちをギッタンバツタンと薙ぎ倒し……
・・なんて事は無く。そこに立っていたのはやはり。

「いえーい！夢加、とう、じょう！」

元気良く叫びながら夢加が立っていたのだった。

（ハァー。やっぱりそうだよ。分ってたよ、分ってたいたよ）

そんな事を考えていると、近くの見張り役がこちらを掴みながら言う。
う。

「瞬の野郎はどうした」

「悪いんだけど、瞬は来ません。残念だったねボクたち」

「てめえ、こいつがどうなっても良いのか！」

そんな言い合いを余所に、ユイナの目はその時、目の前にある窓の外の隣の倉庫の屋根に見える銃の姿を見ていた。それも気銃を構えてこちらに向けている状態の姿をだ。どうやら夢加がオトリになつて銃が周りに気付かれないようにユイナを解放する作戦みたいだ。

（どうか、ユイナに当たりませんように）

ユイナはただ、それだけを祈ってその姿を見ているのであった。

そのまま銃を見ていると、銃が気銃を持ったまま腕を振り回し始め

る。虫でも近くに飛んでいるのだろうか。そう思いながら見ていると不意にダン！という不吉な音がする。なんと銃が腕を振り回した拍子に彼の気銃から弾が出てしまったようだ。さらにその弾はなんとユイナの額に向かって発射されていた。

「えええええ！！うっそー！！」

外からはユイナちゃん！と言う声まで聞こえてくる。ユイナは反射的に近くに在る物なんでもいいから適当に掴んで盾にする。すると。

「むごお！」

その盾にした何かは弾の衝撃がくると妙な音を出してこちらに寄りかかってくる。どうやら見張りを盾にしまった様だ。

「うわっ」とと

寄りかかってきた見張りが少し重い。ユイナはその見張りを思いっきり上に跳ね飛ばす勢いで腕に力を入れる。

「もー、ど・い・て！」

その結果。体は軽くなり、男は・・・。

「ふごっ、ぐがっ、ぬごっ、ひぎゃー！！」

どん、ごん、がん。と派手にドラム缶の山を転がりながら落ちていってしまった。

シーン。夢加が時間を稼いでいた下、一階では静寂が辺りを支配していた。銃の弾は貫通式の設定をしていなかった筈だからあの男も死んではいないだろう。そして夢加はその中で一人思った。

（銃、あんたはスナイパーには向いていない）

しばらく呆氣にとられていた男もハツとして怒鳴りだす。

「こんのクソアマ！！なにしやがった」

まったく仕方がない。夢加は内心呆れながらもユイナを手招きして、そばに呼んだあと後、こう言った。

「そんじゃあ、この子は返してもらいますので。そこんところよろしく」

「ああーん？てめえ、人のこと無視しやがって。逃げられると思っ
てんのかコラア」

夢加の周りを13、4人程がグルリと囲む。それを見たユイナはバカにするような顔で言う。

「べつに逃げるなんて最初っからそんな事考えちゃいないよ。なん
せお前等全員・・・」

その時二階のほうでガシャン！とガラスが割れる音がして二階に銃
が降り立つ。それを見た夢加はニヤリと笑う。

「てめえら、やっちまえ」

男の一人がそう命令をしたと同時に、周りのやつらが襲い掛かってくる。それを見ながら夢加は一言、最後に言う。

「ボッコボコにいじめ倒すんだから」

「お疲れ様。二人とも」

先ほどまで二対複数の弱い者が繰り広げられていた場所は再び静寂が戻っていた。

「やあ、ユイナちゃん。・・・うん、大丈夫みたいだね。何処も怪我してない」

ユイナの体を確かめていたら銃が話しかけてきた。

「よし、だったら早くしたほうが良いんじゃないかな。じゃないと本当に間に合わなくなるよ」

夢加は慌てて立ち上がる。

「おお！そうか、じゃあ急がないと。銃、ユイナちゃん背負って、走るよ」

なんで僕が、などと文句を言いながらも銃がユイナを背負って三人の影は闘技場の方へ向かって行くのだった。

レディーファイト！！

闘技場初戦の一回戦目。瞬は始まりの鐘の音を決闘場で聞いていた。
(ユイナ、もうすぐだからな)

一つの決意と妹への想いをもって。

それは始まり。

決闘場、瞬は鐘が響いた後改めて相手の顔を見る。何処かで見たことがある顔だ。何処でだっただろうか。瞬が考えていると、その瞬の相手である男は手に持っていたナイフをこちらに向けながら瞬に喋りかけてくる。

「くくくく、やっとだ。やっとお前にあの時のかりを返せるぜ。本当にずいぶん稼いでくれたもんだぜ」

「お褒めにいただいて光栄です。で、何処かで会ったことあるっけ？ どうもいまいち覚えてなくてよ」

「あんたには色々と苦渋を舐めさせられたからな。それを全部返すまではたとえあんたが忘れても俺は忘れたくても忘れられねえぜ」

それを聞いて瞬はニヤリと笑う。

「なんだ、あんたも俺に倒されたくちか、ご苦労だね、また倒されて来るんだからな。まあでも今回はいたぶるのは無しだ。安心しろよすぐ終わるから」

「ぬかすな！！勝負の結果が毎回同じと思うんじゃないっ！！」

その言葉と同時に男がこちらに襲ってきた。男は連続でナイフをこちらに振るってくる。

「おらおらおら・・・」

首、腹、わき腹、足、などなどさまざまな所へナイフを振るう。だが瞬はその攻撃をすべて避けてしまう。首を曲げたり、後ろに軽く跳んだり、左に回り込んだり。しまいにはバク転で避けたりもし

た。それも、全てポケットに手を入れたまま。

「ふうう」

男がナイフを両手で逆手に持ち、大きく踏み込んでこちらを刺そうとするが。

「ふん」

瞬は相手のナイフを持った手を正面から片手で掴む。そして空いてる手を大きく振りかぶり。

「てええええい！」

そのままコブシを顔面にぶち込んだ。相手はそのまま吹っ飛び、床をしばらく転がった後、立ち上がろうとする。

「このやろう。てめえなんかに負けてたまるか」

瞬は呆れた表情で言う。

「ったくよ、弱いくせして一々突っかかってきやがって、いい加減にしろよお前ら」

「う・・・るせえ、てめえみたいな若造に舐められてたまるかってんだよ。気に入らねんだよてめえ」

そして男が顔を上げた、しかし、そこには瞬の姿は無い。男が辺りを見渡す。

「どこだ。何処に行った」

「こっちだよ」

しまったと思った時にはもう遅い。瞬は相手の脳天に気合と共にかかと落としをくらわせて男は奇声の一つ上げることなく床に崩れ落ちた。

ここで試合終了の鐘が鳴る。

「KO。KO。です！第5試合、二回戦に進んだのは瞬選手です」

司会の声を聞きながら瞬は決闘場を離れるのであった。

試合の後、瞬は夢加達を探して観客席にまで行ったが見つからなかったのでまずはロビーで休もうと思い、そこまで行って何か飲み物を買おうとした時、ロビーの受付の人に呼び止められた。

「瞬選手ですね。お手紙を預かっております」

どうぞと言って渡された手紙にはこう書かれていた。

“ ユイナちゃんを迎えに行ってきます by Y・A ”

「Y・A、亜魔ノ夢加のことか」

ユイナに何かあったのだろうか。心配だが夢加達が行ってるのなら、それに任せるべきだろう。瞬は次の相手はだれか確かめるために他の試合の観戦に観客席に向かうのであった。

準決勝もみごとに勝ち残った瞬は他のもう一つの準決勝を見るた

めに試合を観戦していた。ついでに、ユイナ達は来ていない。

「KO・KOです。準決勝を見事に勝ち残ったのはワーウロルフ選手です」

「ワォーン」

遠吠えをしながらそこに立っていたのは体中体毛に覆われたウルフ族の者だ。

「しかし珍しいな。今時完全な獣姿の獣人なんて」

と言うのも今や獣人の過半数は人の姿に尻尾や耳などといった場所が獣の物だったりするぐらいの違いぐらいしか違いが無い。それにこの世界ではなぜか混じり物の方が多いぐらいだ。その中でも獣人と人の混じり物、正式な呼び名こそ無いが、通称ビーマン（ビーストとヒューマンの混血だから）などと呼ばれていたりする。

彼らは人の遺伝子の情報の方がビーストよりも体に影響しやすく、ほとんどの場合が見た目が人と変わらなかったり、体の一部が獣のものになったりするぐらいだ。中には1割未満の確立ではあるが獣姿の者も生まれて来るものの、人、獣人、ビーマン？だけで見てみても純血は2割程度なのだ。

その獣人が今回のような街クラスの大会ごときに出てくるのだ。珍しいとしか言いようが無い。しかもなかなかの実力者だ。

「ち、めんどくさい相手だ」

瞬は一人呟きながら一人選手控え室に向かうのだった。

決闘場。瞬はそこで最後の相手、獣人ワーウロルフと対峙していた。研ぎ澄まれた爪と牙が良く目立つ。瞬が改めてそのウロルフ

フのことを観察していると司会が試合の始まりをつける。

「それでは始めて下さい。レディーファイト!!」

その声と共に試合開始の鐘の音がする。

(さて、どうしようかな)

瞬がそう考えていると相手がにやりと笑みを含んだ顔で言う。

「どうした、来ないのか？来ないなら、こっちから行くぞ！」

そう言いながら相手が突っ込んでくる。鋭く、速く、相手を貫くような勢いで攻めてくる。

「おおおおおお・・・!!」

ウロルフが右手をこちらにくり出してくる。それに対して瞬は左足を相手がかりり出してきた右手にぶつける。バアン！二人の右手と左足がお互いに弾かれる中、ウロルフは強引に体の体勢を保たせてまた右の手を前にくり出す。瞬は避けられずそれに当たるが、当たる寸前で片足でだが相手の力の行く方向へ自ら跳ぶ事と両腕でガードする事でダメージを減らす。

「このっ」

瞬は体勢を立て直して着地するが相手が追撃をしようと、ふっ飛んだ瞬を自分も跳ぶことで瞬に近いきていた。今度は出した左手の爪で突きをくり出す。瞬はそれをギリギリのタイミングで体を左にそらすことで回避、カウンターで相手に蹴りを顔面にぶちこんでや

る。

「ぐはあ！」

狼人、ウロールフがふっ飛ぶが、やはり体勢を立て直され、着地。その後二人は距離をじりじりと詰めてゆく。ある程度近づいたら今度は瞬が右手を狼人の腹に向かってはなつ。狼人は片手でそれをガードして瞬の足を蹴ろうとするがそれをジャンプして避ける。狼人はさらに爪で瞬を刺そうとするが左足で弾かれる。

爪でひっかいたり避けたり殴ったり刺そうとしたり弾いたり蹴り飛ばしたり、そんな攻撃の応酬が繰り返される。

瞬は思う。パワーだけなら相手の狼人の方が上だろうと。まともに一発くらうだけでも考えものだ。だがしかし……。

そんな中、狼人の裏拳が瞬の腹に当たってしまう。瞬はそのままふっ飛んで決闘場の壁に転がりながら激突する。そしてそのまま息が詰まり咳込む。

「いっつつ痛」

それからうなりながら相手、ワーウロールフの方を見ると、肩で息をしながらこちらに近づいてくるのが見える。

「ちっ！てこずらせやがって」

そんな中、瞬は思う。ここら辺が限界かと。

（もう少し粘りたかったけど仕方が無いな）

そして相手が手を振り上げる。

「終わりだ。これで俺の勝ちだ」

そしてふり下げようとする時、不意に声が響く。頑張ってと。

（ああ、何とか間に合ったんだな。善かった。まったく、間に合わないかと思っただぜ）

そしてまた同じ声が聞こえる。

「お兄ちゃーん！やっちゃえーん！！」

そして狼人の手がふり下げられる・・・が、そこに瞬はいなかった。

「後ろだよ、このとろま」

瞬は思う。確かに力は相手の方が上だろう。だがしかし。

「速度では、俺の方が上だな」

そう言いながら壁に狼人を蹴りつける。そしてまたユイナの叫び声が聞こえる。

「負けたら、許さないんだからね！！！！」

瞬は親指をユイナの方に立てて答える。

「任せろ！これからカッコイイとこ見せてやる！！」

そう叫んだ後、狼人が起き上がり突っ込んでくる。

「ふざけんな。今まで負けたやつが！」

振り下ろされるその爪を後ろに下がることで避ける。狼人は続けてまたその爪を振ってくる。今度は瞬は動こうとしない。このまま当たる！と思われた手が空を切る。何処に行ったと探していると何処からか声が聞こえた。

「遅いんだよ。カタツムリじゃねえんだ。もっと速く動けねえのか？おい」

瞬はウロルフの腕に座りながら乗っていた。そのまま立ち上がり狼人を壁に蹴りつける。

ドコン！そんな音と共に壁に叩きつけられた狼人はしかしまた立ち上がる。

「この野郎。ぶっ殺す！」

そう言って手を振り上げるがまた壁に激突。しかし、またまた狼人は立ち上がる。

「まだ、まだだ・・・ぜ」

狼人はまだ立ち上がるが。

「さっさと沈め、蝸牛」

今度は顎を蹴りつけられて狼人は今度こそ気絶した。ここで試合終了の鐘が鳴る。そして司会が叫ぶ。

「試合終了ー！」

そんな司会の声を聞きながら瞬は思う。きまったと。

（決まった。瞬、大逆転勝利の巻。まさにカッコイイと言うべき勝ち方だな。うむ）

観客席でユイナは。

「はあー、間に合った。まさかとは思ってたけど。本当にああいうやり方をするなんて。だけどよかった。お兄ちゃん嬉しそうで」

さすが兄妹と言うべきなのだろうか。わざわざ兄の演出に乗ってあげる妹なのであった。

闘技場入り口。瞬たちは男女の二人組みに話しかけられた。

「優勝おめでとう。瞬君」

「おめでとう」

「あんたは。イルフェリさんにアリスンさん。来てたんですか。」

イルフェリは言う。

「当然だ。わが息子も同然の子の努力が報われるかどうかの日だぞ。仕事なぞやっていたられるか」

瞬は恥ずかしそうにしながら言う。

「俺は貴方たちの子供になった覚えはありませんよ」

「まあ良いではないか。今日は祝いだ。寄って行くといい。君たちもどうかね？」

イルフェリが夢加と銃に聞いてくる。しかし二人はそれを断る。

「そんな祝いの日に私達みたいな部外者は相応しくありませんから。それに、今日でここを出ようと思ってますから。さすがにこれ以上はね」

「おいおい、そんな話今日初めて聞いたぜ」

瞬は驚いた表情でそう言った。それにたいして夢加は微笑みながら答える。

「うん、言ってなかったからね。どう？少し寂しいんじゃないの？」

「んなわけないだろ。ふん、早く言っちゃまえ。そのほうが静かになつてせいせいする」

うりうり、と肘でこずいてくる夢加にいつてのける。ユイナはそんな姿を見てくすくすと笑いながら二人に言う。

「またね、二人とも。またいつか会えると良いね」

瞬がほら行くぞと歩き出したので、またねと手をふりながら遠ざかって行く。そして見えなくなった頃、夢加が。

「さて、行こうか」

と呟くのだった。

「ああ、そうだね。行こうか」

そして、二人は次の街へと旅に出るのであった。

「ハア、ハア、ハア」

ある夜の街を息を苦しそうにしながらふらふらと今にも倒れそうな足取りで歩いている少女がいた。その少女には尖った八重歯が生えていた。

行き先は特に無い。少女はただ歩くだけ、自分が倒れるまで。

その少女の目には周りの風景は映っていない。そんな物には興味が無いから。障害物が在ると解ったなら無い方へ向かう、それだけだ。やがて少女は歩く事さえ出来なくなり、地面に倒れこむ。このまま倒れていれば全部終わる。そんな少女にあるのは安堵感。名も、過去もすべて忘れて。だが、記憶に無くとも自分の心が覚えている。そしてその心が訴える。

「もう終わりたい」

そんな時だった。一人の少年がその地面に倒れている少女を見つける。

それは偶然。たまたまいつもとは違う道で帰ってみようという気まぐれゆえの。

そして何を感じたのだろう、その少年は少女にまだ意識が在ると確認したらその少女に手を伸ばす。そして少女は何を感じたのだろう少年のその手を少女は掴んだ。

それが少年、狩留家・瞬とその少女の出会い。それがこの二人のプロローグの始まり。

不明な少女 それはもう色々と

(プロローグ 二つ目)

(ここは・・・何処？)

布団の上。それが、瞬が連れてきた少女が起きて最初に考えた事だった。そのまま少しの間ぼーっとしていると足音がする。なんだろうと思ひ足音の方を向いていると一人の男が出てきた。

男はこちらを見ると驚いた顔になる。そしてこちらに近づいてきた。

「気が付いたのか。善かった。あの後気絶して2週間ぐらいの間ずっと眠ったままだったから心配したよ」

よく解らないが、どうやらこの人が自分を助けてくれたようだ。少女がお礼をしようと言葉で“ありがとう”と言おうとするが不思議だ。なぜか喋れない。少女は仕方ないので動作でそれを表す。

少年は“気にしないでいい”と言うがそれは感謝するなという事だ。他の奴はどうか知らないけど私には無理な事だ。と思ったところで何が出来るわけでもないのでもたまたま動作で感謝の念を表す。そうすると少年は顔を赤らめる。

「そ、そんな事よりそろそろ名前の方も聞いていいかな？おれは瞬って名前なんだけど」

少女はそう言われて困ってしまう。相手も教えてきたのだ、ここは自分も名前を教えるべきなのだろうが自分は今、喋れないのだ。答

えようがない。そこまで考えた時に少女は気付く。

（私の名前、なんなんでしょう？）

それこそ名前を教えようがないではないか。それに気付いた少女はさらに困ってしまうのであった。

「ふーむ、困った。さて、どうしたものか」

瞬はいつもの店のカウンターで座りながら何かに悩んでいた。

「記憶喪失。そして喋れない状態か」

最初は行き倒れかと思い、元気になるまでの間のつもりだったのだが記憶が無い状態とわ。そんな状態で家を追い出すわけにもいかないので今は病院から家に移して住まわしている状態だ。

やはり戻るまで家に置いとくしかないのだろうか。そんなことを考えていると目の前に弁当の包みが置かれる。

「なに深刻そうな顔してんの。お兄ちゃん」

そう言いながら目の前にユイナが立っていた。

「ユイナか。こんにちは、だな」

「うん、そうだね、こんにちは。お兄ちゃん」

「へえ、じゃあまだ戻らないんだ。記憶」

「まあな、俺の方もどうしたものかと困っていてな」

瞬とユイナはユイナが持ってきたお弁当を開いて外で昼食を食べていた。

「記憶かあ。何かきっかけとか在れば何か思い出すのかな」

ユイナの言葉を聞いて瞬はまた困ってしまう。

「きっかけといってもなあ。彼女、ここら辺で生活してた訳じゃないみたいだしなあ」

その言葉にユイナは、ふうん。と答える。ずいぶんとその子の事が気になっているみたいだ。ユイナはその事になんとかだがなぜかイラつときたのでこんな事を言っている。

「じゃあどうするの？このまま自然に回復するのを待つ？たぶんだけれどその内黙ってどっか行っちゃうんじゃないかな？」

ユイナは人を見る目はかなり有るほうだ。少なくとも自分よりは。特に人の性格や猫をかぶっているやつを見破るのはかなり得意だ。

というよりも趣味の一環になっている気もする。そのユイナが言うのだ。やはり注意しとくべきだろう。まあ、べつにそれならそれで良い筈なのだがどうしてか瞬は彼女のことを中途半端で放り投げるのは嫌だった。

「・・・なあユイナ。こんなのはどうかな」

瞬がなにか思いついたらしいので、ユイナはそれを聞くことにする。

「なあに？お兄ちゃん」

「それはな・・・・・・・・・・」

仕事の帰り道。瞬は一人文句を言いながら帰っていた。あの後、その考えを言ってみたら、それ、本気？と聞かれたので一応と答えた。らガミガミと説教をされて仕事に戻るのが遅れた。その結果仕事は延長となり帰るのが遅れたわけだ。そんな事があり、ブツブツと文句を言っている内に家の前に着いたのでドアを開ける。

「ただいま」

そう言いながら家の中に入ると、中には誰もいない。一通り家の中を探してみるが見つからない。

「おーい」

・・・・・・・・・・。静寂が家を包み込んでいた。

街の、ある草原。少女はそこで一本の木に座って寄りかかるようにして眠っていた。スー、スー、スー、スー・・・・。定期的な寝息が続いていたがそれが途切れて少女が目を覚ます。

（ここは・・・。そうですか、少し寝ていたみたいです）

そんなことを考えながらまだ眠いその目をこすりながら立ち上がる。空はもう夕方になっていた。

（少しだけ、思い出せましたね。自分のこと）

思い出した内容、それは自分が吸血族の者の一人だということ。そして自分の名前の事の二つである。どういう生活を送っていたとかはまだ思い出せていない。そして、なぜだか思い出したくないという感じさえる。

（なんででしょうか）

解らない。思い出せば解るのだろうか。思い出したい、けど思い出したくない。

そんな矛盾が今の自分の心情。でも、思い出すにはもうこの街に居てはダメな気がする。おそらく、この街じゃあもう、記憶は戻らない。

決まったは良いがどうやって話をきりだそう。少女は体を伸ばしながら夕焼け色に染まった空を見ながら考える。帰った直後か夕食かその後か。そんなことを考えている中、突然声をかけられる。

「見つけた。遅いから心配したぞ」

瞬だった。遅いから探しに来たのだろう。テーブルの上に置いたメモが役に立ったというわけだ。しかしこれはこの街を出る事を話すに調度いいタイミングなのではないか？ いや、その前に名前を

教えておこう。

少女は地面にしゃがんで“自分の名前⇒ヤサ・シルエイ”と書いて瞬に教える。それを見た瞬は一瞬驚いた様な顔をしたがすぐに嬉しそうな顔に変わる。

「そうか、善かった。名前思い出せたのか。改めてよろしくな、ヤサ」

手を差し出して握手を求めてきたのでヤサも少し照れながらもそれに答える。

「それでな、ヤサ。相談なんだが。俺と、外に出てみないか？お前の記憶を探しに」

ヤサはその突然の言葉をしばらくの間、理解出来ずに呆氣にとられていたが、ハッと気が付き、素早く紙とペンで文字を書く。

＜どうしていきなり？＞

と、書いて瞬に見せると照れくさそうに答える。

「なんだかな、なんとなく街の外を見てみたくなっとな。記憶の面でも役に立つと思ったんだけど。・・・どうする？」

しどろもどろに言う瞬を見てヤサは思わず声無き笑いをしてしまう。おそらくだが解っていたのだろう。自分がこの街を出て行こうとすることを。こういうのをお人好しというのだろうか。そしてヤサは瞬に返答を返す。ただ一言。

<お願いします>

ヤサの紙にはそう書いてあった。

「よろしくな、ヤサ」

それを見た瞬は、そう言って微笑むのだった。しかし、瞬はそれからすぐに考え込んでしまう。

「後は、ユイナか。納得してくれるといいんだけど。無理かなあ」

瞬はもうすでに暗くなりかけた空を見ながら呟くのであった。

「なんで、こんな事になったんでしょう」

頑張って頑張って頑張り続けて。そして自分は何もしていないのに。少女はぼんやりとある小屋の中の窓から夕日を見ながら呟いた。

「なのに、何でこうなるんでしょう」

解らない。いくら頑張っても何も、何も変わらない。

「もう、嫌になってきちゃいますね」

少女はポツリと一人、夕日を見ながら呟くのであった。

(・・・・・・夢?)

夜中、ヤサは目を覚ます。明日はこの街を出る日だ。瞬の妹ユイナを説得していたために三日の遅れが出た。

(絶対に帰ってくるから、か。あの姿を見てると、つい羨ましく思っていますね)

それにしてもあの夢、あれは自分の過去の一つなのだろうか。・・・解らない。いつか、思い出す日が来るのだろうか。

ヤサはそう考えながらチラリと窓を見ると、そこに月が見えた。

明日は早い。早く寝た方がいいだろう。ヤサは布団をかぶり直してそのまま目を閉じるのだった。

あくまでもマイペース

ここはスラスコの町。この町のある家の少女が町の朝日と共に目覚めようとしていた。

「んー」

少女は身を起こしベッドの上で体を伸ばす。

その少女は見た目約16歳前後、仕事はある料理店のウェイトレスや料理などをやっている。そして名前は譜闇・ふあん・こうえ恍会ふあ今日も仕事だ。

少女は洗面所で顔を洗い、朝食を食べた後、食後の紅茶を飲みながら外を見ながら呟く。

「困ったわね。遅刻だわ」

しかしいつものペースを崩すわけにはいかない。何故ならそれが私の信念だから。悪く言えばわがままだ。

「マイペースイズベスト”これぞ世界の真実なり”」

少女はあくまでもマイペースで紅茶を飲み終わったら支度をして、外に出る。店に行く途中さまざまな人に挨拶をされたのでこちらも挨拶を返しながらその道のりを歩いて行く。

「おう、嬢ちゃん。どうだい？買ってかないかい？」

「あらおじさん、クスクス、止めて置くわ。今いそいでるの」

そんな風に店の人との会話をしつつ歩いているとやがて少女が勤めている料理亭に着く。そして恍会は店のドアを開けて中に入り挨拶をする。

「おはようございますマスター」

そう言いながら店の中に入る。それにしても今日は嫌な夢を見た。それは恍会の昔の夢。もう約35年ぐらい前、（この世界の住人の人間の歳をとる速度は低次元界に比べて約3分の1ほどの速度）まだ小さかった頃の出来事だ。

（やっぱり、まだ引きずってるのね、私。情けない）

そんな事を考えていると店の奥から店のマスターの声が聞こえる。

「やあ、今日は早い方だね。遅刻だけど」

「ええ。私も少しは成長してきて最近速く起きれるようになって来ましてね。遅刻ですが」

「ははは、なら早く仕事についてもらおうかな。後2時間ぐらいで店開けるから掃除が終わったらこっち手伝ってもらおうから」

恍会は返事をして着替えて（エプロンを着けて三角巾を頭に巻くだけだが）一人呟く。

「さあ、始めるわよ」

そして店の掃除を始めるのであった。

カラン コロン。店のベルが鳴る。どうやらまたお客が来たようだ。

「いらっしゃいませ」

挨拶をしてからその客を見るとそれは少年少女の男女二人組みだった。

「でもさあ……やっぱり」

「うーん、でもこうゆうのも……」

どうやら二人とも話すことに夢中でこちらに気付いてないみたいだ。二人はそれから適当な席に座っても、まだ話し合っている。

恍会がどうしますか？とマスターを見るともう少し経ってからにしようマスターが言う。

10分経ったがしかし二人はいつこうに話を止めようとしなない。それどころか口論、というか口喧嘩を始めてしまっている。恍会は仕方が無いのでそれでも二人の所に注文を取りに行くことにする。

「あーもう！！だから銃は……」

「そーゆう夢加だってねえ……」

「あとう、ご注文はお決まりでしょうか……」

恍絵が話しかけるが返事が無い。どうやら気付いてもいないようだ。

「ご注文はお決まりでしょうか」

さっきよりも大きな声で言ってもまだ二人は口喧嘩を止めない。

「あの一ー!」

それでも止めない。こりゃあしばらく止めそうに無いなと周りの客達も含めそう思ったところ、恍会は二人の座っている席のテーブルにコブシを叩きつけた。

ズドン

!!

轟音が店中に響き渡る。テーブルにコブシがめり込む。

「ゴチュウモン。ナニニシマスカ」

笑顔で言っているのだがその笑顔が怖い。そして何故かその言葉がカタカナで書いてある様なイメージが浮かんで来る。男女の二人組み（夢加と銃）は驚いた表情でこちらを見ている。そして、最初は女性の方から注文を言う。

「え、えっとじゃあマンダラスレソフォニーレセットで」

「じゃあ僕はグレントクリエパラジョイセットを一つ」

「解りました。マンダラスレソフォニーレとグレントクリエパラジョイ、二つともセットでよろしいですね」

注文を聞き終わったのでメモした紙をマスターに渡す。

「マスター。注文追加です」

微笑む恍会にため息を吐きながらマスターは言う。

「悦会さん。何度も言うけどそういうのは止めようね」

マスターはどこか諦めた様にいうのであった。

我こそ ナルシスト

「運が悪かったね、君たち」

「うわ！だれ。」

いきなり後ろから聞こえた声に夢加は驚いて後ろを振り向く。振り向いた先には一人の男が笑いながら立っていた。

「今日の彼女はいまいち機嫌が良くないようだね、普段ならもう少し我慢するはずなのだがね」

夢加は怪訝な顔でいきなり後ろに現れて勝手に喋り始めた男に言う。

「あんた誰？そんなことを言う前にまずは自分の名を名乗るのが先だと思うんだけど」

夢加がそう言うのと男は急に笑いだし、いちいちポーズをとりながら喋り始めた。なんとなくウザイ男だなと夢加は思う。

「ふふふ、ははははははは！よくぞ聞いてくれた！私の名？ふふ、そんなに知りたいのか仕方が無いなあ、うむうむ。教えてやろう。この私こそなんと！あの！！かの！！伝説的に有名なあああああ！！！！」

「シャニー・グラトルさんですよお客さん」

横から声が聞こえたので見ると先ほど注文を聞きにきたウエイトレスだった。ついでにさっきの男、シャニーとかいうらしいがそのい

きなり大声を張り上げ始めた男は自分の言葉を邪魔されたのがショックで床に縮こまっていじけ始めた。

「どうぞ、お飲み物です」

「あ、どうもご苦労様」

夢加が銃と自分の二人分の飲み物を受け取ってかたっぽを銃の前におく。

「シャニー・ GRATULってあのシャニー・ GRATUL？」

銃が驚いた顔で言っている。そんな銃の言葉にシャニーが反応する。

「そう。“あの！” シャニー・ GRATULだよ！あの“有名な！！” シャニー・ GRATULなのだよ」

どうやらそれなりに有名な人物らしい。どういった人物なのだろうか。夢加は銃に聴いてみることにする。

「ねえ銃、だれなの？そのシャニーって人。そんなに有名なの？」

シューシューシュー

夢加がそう聞くとなぜか周りの話を聞いていた無関係な人まで静かになってしまった。そして最初に口を開いたのはウエイトレスさんだった。

「凄いですねあなた。そんなことも知らずにいられるなんて。ある意味驚嘆にあたいします」

「知らない？この私を？ふふふ、ならば教え込んで……」

そんな中銃は一人、頼んだ飲み物を飲みながら落ち着いた様子で言う。

「世間知らずなわけじゃないんだけどね。まあ、不思議なことの一つだね」

「もう。何なのよ」

それからしばらくその冷えた空気は続くのであった。

「だからあ。誰なのよ、この人」

「何度も言ってるじゃないか。シャニー・グラトルだよ」

さっきから何度聞いてもこの調子だ。つまりは本来説明が要らないぐらい知ってて当たり前の凄い人ってことなのだろうけど。横でその本人が教えたそうに私の後ろをうろちよろとしているがまあ、気にしない事にしよう。本人に聞いたら何時間としつこく説明を受けそうだから。

そうやって無視していると今度はテーブルの周りを咳払いをしながらうろちよろとしだした。それでも無視を決め込んでいると今度は歌いながらわざとうるさく音をたてながら踊りだす。かなり近寄りがたい状況だ。周りの人が無言で聞いてしまえと目線で訴えているのを感じる。そして銃が……。

「ねえ、夢加」

仕方がない。夢加は諦めて本人、シャニーに思いっきり嫌そうな顔をして聞くことにする。

「シャニーさん。あんたは何をやっている人ですか」

するとシャニーは凄く嬉しそうな顔をして喋りだす。

「ははははははは………。そんなに知りたいのなら仕方がない！今度こそ！！ちゃんと説明してあげようではないか。この私が何者なのかを！！まあ、本来なら説明の必要すら全く無いのであるが。そう、その本来なら説明の必要すら全く無い超スーパウルトラデンジャラスキングオブベストザデラックスクライシスザオリジン！！！！に凄くて本来なら説明の必要すら全く無いほど有名な人物。そう、それはシャニー・グラトル！！！！そして、その正体はわああああああああ！！！！！！！！！！」

「見つけたぞシャニー。今度こそテメエをぶっ殺してやるぜ！」

シャニーがヒートアップしている中、突然店の中に怒鳴り声が響きわたる。見ると店の入り口にかなりむさい雰囲気の図体のかい男が立っていた。

シャニーはその男を確認すると、物凄く迷惑そうにこう言った。

「なんだ、君か。私は今とても大切な用事の最中だ。君ごときが邪魔をしないでくれたまえ」

シャニーが手でシツシツ、あっち行けとその男に向かってやってみせる。

「なんだところあ！！バカにしてんじゃねえ。てめえがやらねえつて言うんならこの俺様と部下173人でこの店でてめえとおっぱじめても良いんだぜ」

シャニーは一つため息を吐いて立ち上がる。

「恍会君。シャンデイルニルを一つたのむ。時間は・・・そうだな、6分を目安にしてくれ」

「はいはい、解りました」

恍絵は注文のメモを取る。

「ふふふふ、この私の演説の邪魔をするとは。愚かなやつめ。だが殺しはしない、食事が不味くなるからな。まあ、全治10年間ぐらいはやるべきか・・・」

そして外に出て行こうという時にシャニは不意に後ろを向いて、それと、と言葉を付け足す。

いい加減さっさと行っちまえ！！と夢加は密かに思う。

「ふふふ、皆、私の心配は要らないよ。安心して待っていたまえよ」
夢加はウザッ！！とか思いながらその格好つけながら外に出て行くそのバカを見ているのであった。

バキ、ドゴ、ドカ！、ドカン！

「うぎゃ、ぐわー、のがー！、ふんぎゃ！」

シャニが出て行ってから5分後。いきなり現れた男とその手下達の悲鳴は止まることなく何重にも重なって店の中にも響いてくるのであった。

「ばっバカナ！俺がつれてきた部下173人がこんなにもアツサリトやられるなんて」

「さて、覚悟はできたかね？食事は暖かい中に食べたいのだが」

「くそ！なめるな！！」

どうやら外の五月蠅い騒音も、もうすぐ終わるらしい。そんな声が聞こえる中、夢加のテーブルの上に頼んでおいた料理を恍絵が置く。

「おまたせしました」

「きたきた」

夢加はいただきますと手を合わせてから箸を握って置かれた食事を食べようとする。しかし、その時だった。

突然店の入り口が勢い良く、バン！！と音をたてて開き、先ほどの男が吹っ飛んできた。そしてそのまま夢加の座っている所のテーブルにぶち当たる。

ツシャーーン！！！！

ガッツ

当然のごとく上に乗っていた食べ物の食器が音をたてながら床に落ちる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

夢加はとにかく無言で落ちた食べ物を見つめている。そこにシャニーが店に入ってくる。

「やあ、みんな。男が吹っ飛んできた来たと思うが、大丈夫だったかな？」

マスターは呆れたと言う様に頭に手を当てる。

「壊した分は後で弁償するから安心したまえ。さて、恍会君。私の食事は後どれくらいだ？」

そんなことを言っている中。カランと何かが落ちる音をシャニーは聞く。これはおそらく箸が落ちた音だとシャニーは推測する。そんなことを考えているとシャニーは足下の影が違う人の影と重なっていることに気が付く。

シャニーは上を見ると先ほどの二人組みの少女の方、確か名前は夢加と言っただろうか。とにかくその少女がシャニーを上から手を振り上げた状態で襲ってきていた。そして夢加がシャニーに向かってその腕をふり下げる。しかし、シャニーはその場から一步後ろに下がるだけでその攻撃をよけてしまう。

ズガン！！

店の床の一部がその夢加の攻撃で碎ける。

夢加はそれから素早く床を砕いた手をシャニーに向かって横に一線する。

シャニーはバックステップでそれを避ける。それから一息ついて夢加に問う。

「ふむ、いきなり何の用かな？話し合いで解決・・・」

「ふふ、ふふふ、ふふふふ。うふふふふふ・・・」

「・・・できそうにないようだね」

夢加はなぜ今までできずかなかったのだろうかと思える程の殺気を放ちながら笑っている。

「仕方ない、ならば、せめて外でやろうか、皆さんに迷惑がかかるからね。話はその後聞くとするよ」

「よくも、よくもご飯をー！！！！」

結局会話になってない二人なのであった。

「ハア、ハア、ハア、ハア・・・」

夢加がシャニーに勝負を挑んでからしばらくたった頃、夢加は地面に手をつきながら苦しそうに息を切らしていた。

「さて、まだ戦るかね？」

「こ・・・の野郎・・・あたり・・・まえた！」

(ちえ、強いなあ。勝てないよ)

夢加は内心そう思いながらもやはり立ち上がり、この勝負を続けることにするのであった。しかし、本人自身勝ち目が無いのは感じているところ、勝てるとは思っていない。ただ・・・。

(ただ、せめて何か一発かましてやらないと私の気が済まないんだよね)

夢加はそう思うと一回大きく息をして気持ちを落着かせる。

「さあ、続きを始めるよ!! かかってきなさい。食べ物の怨み、思いついてやるんだから、このナルシストめ!!」

夢加は言い終わると同時にシャニーに突っ込み、シャニーに向かって右の拳をくり出す。

「ふ、ナルシスト。それは“凄い”者にのみ名乗ることを許された至高の称号! 凄くないナルシストなどナルシストではなくただの“負け犬”だ!! 覚えておくがいい、私はシャニー・グラトル!!! 真に選ばれたナルシストの一人であるぞ!!!! ふははははははははは!!!!!!」

そう笑いながらシャニーは繰り出された拳を片手で受け流してしまふ。右の次は左、その次は右のアップパー、そして回し蹴りなどなど、とにかく連打、連打、連打で夢加は攻め続ける。

「一生やってろ!!」

シャニーはしばらくそれを全て片手で受けてたがその攻撃を受け流

した後腹に一発蹴りを入れる。夢加はぐうと呻き声を上げて吹っ飛ばが、吹っ飛びながらもシャニーに向かって球体状の力を複数、放つ。

「ふん」

シャニーがそう呟きながらそれを左手で叩き潰そうとするとシャニーの左手が当たる寸前に不意にそれが破裂する。結果、煙で周りが見えなくなった。

（ふむ、目くらましか）

夢加が見えなくなったが構わない。シャニーは気配で夢加の居場所を突き止めようとするがその途中で夢加の存在が急に感じられなくなる。おそらく陰を使用したのだろうが、それが解っていてもなお、シャニーはその彼女の陰に驚愕する。

ついでに、陰とは隠れたり逃げたりする術技のこと。

（ばかな、この私から完全に違和感すら感じなくするとわ）

そう、彼が驚いたのは異常なほどの夢加の陰の練度である。いくら上手な使い手でもだれかが“いる”という感じまでは隠しきれないものだ。しかし彼女はその違和感までも完全に隠しきってしまったのだ。

「ふふふ、まるで超一流の暗殺者だな」

シャニーは一人呟いてから右手を上げると、シャニーの右手の黒いオーラ（シャニーが使っているのは気）がその量を増して行く。そ

してその右手をふり下げて自分の足下の地面に気功弾を叩きつける。
結果、気功弾を叩きつけられた地面を中心に爆発が起きて周りの煙
が吹き飛ぶ。

「うわああああ!!?」

それは夢加の声だった。その声が自分の真後ろから聞こえた。危な
かった、あと一秒遅れていたら夢加の攻撃がこちらに当たっていた
だろう。夢加はそのまま吹っ飛び地面を転がりそのままグツタリと
倒れたまま喋る。

「ううー、なんかムカつく」

そんな夢加の所に先ほどの少年、銃が歩み寄り手を伸ばす。

「ほら、立てる?」

その言葉の後銃は夢加に何かをささやく。すると夢加もハッとして
急いで立ち上がる。そしてこちらに。

「じゃあ、私達はこれで」

と言ってそのまま急いでどこかに去っていった。なんなんだ?と思
ってそのまま二人を見ていると恍会が一枚の紙を持ってこちらに近
ずいて来る。

「はい、シャニーさん。壊した分の代金です。あの二人の分も入っ
ています」

ああ、なるほど、だから逃げたのか。シャニーは黙ってその紙を受け取るのであった。

「亜魔ノ夢加、か」

「ん？どうかしたんですか？」

恍会が不思議そうにきいてくる。

「いや、今度は彼女の全力が知りたい物だなっと思ってな」

「全力？彼女、本気じゃなかったんですか？」

「本気だったろうな、けど、全力は出していない。いや、出せないのか？まあ、それよりも、なぜあれで普通にやっていたのか？疑問だな」

恍絵はさらに不思議そうな表情で首を傾げる。シャニーはそんな恍会を見て、笑いながら言う。

「ハハハハハ。まあこの私の目だからこそ気が付いたのだ。君が気付かなくても仕方無いことだよ」

「はいはい、どうせ私じゃ魔界の守護神の魔王様の言う事なんか理解できませんよ」

恍絵は呆れた感じに言うのだった。

「ははは、それよりも恍会君。私の食事はどうなっている」

「ああ、まだ作ってませんよ。時間がかかりそうだったので」

「ふむ、そうか。では急いで作ってくれたまえ」

そう言いながら二人は店の中に入って行くのだった。

過去への思い

ハア、ハア、ハア……。ずっと走り続けているせいで息が苦しい、足下がフラフラとして、おぼつかない。

「恍会早く！」

恍会の手を引きながら目の前を走っている女性が言う。

「ハア、ハア待ってよ、い、息が」

体が重い、息が苦しい、頭がボーっとしてくる、そしてフラフラする。

そんな恍会を見てその女性は恍会を背中に背負ってまた走り出す。

しばらく走った後、その女性が少し休もうと言い、崖のそばの少し広くなった場所に二人は腰を下ろす。

「大丈夫？ まだ走れる？」

恍会は息を整えようとしながら。

「うんハアハアハア、だ、大丈夫だよ」

恍会は笑って答える。女性は微笑みながら恍会の頭をなでる。

「ほら、上を見てごらん。星が、あんなに輝いているよ」

その女性は上を見ながら恍会に言う。恍会は上を見ると、わあ本当

だ。と嬉しそうに言うがすぐに残念そうな顔になって呟く。

「こんな状況じゃなきゃもったいいのに」

女性は笑いながらまた恍会の頭をなでる。そして崖の方に歩いて行く。恍会はその女性の後姿を見ながら思う。どうしてこんなことになったのだろう。鎧を付けた人たちが現れたら村が燃えた。ただ、そんな現実だけを突きつけられる。

「嫌だよう。こんなの」

恍会はそう呟いた後、女性の所に走って抱き付く。危ないよ。と注意されるがこの人ならこんな事で落ちたりはしない。

そうして抱き付いていると女性が声をかけてくる。

「恍会、飛ぶ練習してる？」

「ええと、まだだよ。難しくてまだ浮かぶ位しか、ええと・・・出来てないよ」

それを聞いて女性はそう、とだけ呟く。

「ごめんね、もうこれ以上は無理かな」

「え？なんのこと」

恍会が聞くと女性は抱き付いていた手を離させた後、恍会を押す。そして押された方向はすぐ近くにある崖の方向。

（え？）

恍会は反射的に手を伸ばして片手で崖に掴まる。

「どうして」

恍会は問うと女性は一言。

「足手まとい。一言で言うなら邪魔」

そう言って女性は崖に？まる恍会の手を蹴り上げる。手を蹴り上げられた恍会は当然下に落ちて行く。恍会は落ちながら叫ぶ。

「どうして！どうしてよ！！」

そして少女は下に落ちていった。

「ん、ここは・・・そう、夢・・・ね」

朝、まだ日も昇らぬそんな中、恍会は目が覚める。

「この夢、最近頻繁に見るわね」

そう呟きながら恍会は窓から外を見る。そしてまた呟く。

「・・・どうしてよ」

恍会が働いている料理亭、そのマスターが開店の準備を始めようと着替えて厨房に入ろうとした時、店のベルがカランカランとなるのが聞こえた。

マスターが誰が入ってきたのかを見るとその人物は恍会だった。マスターは驚きながら恍会に声をかける。

「恍会君！？今日はずいぶんと早いんだね」

「あら、マスター、おはようございます。今日は早めに目が覚めてしましまして。」

「そうか、なら店の準備の方を手伝ってもらおうかな。」

マスターがそう言うとき恍会は、では、着替えてきますね。と言って店の奥に入っていた。マスターは思う。

（恍会君、何か遭ったのかな？）

マスターはそう密かに思いながらも店の開店の準備を始めるのであった。

店の開店後。恍会はいつもと変わらない様子で店で働いている。

「恍会ちゃん、注文よろしく」

「はい、何にしますか」

「すみませーん。注文お願いしまーす」

「はい、少々お待ちを」

お昼時になってもいつも道理にトタパタと走り回っている。

カランカラン。そんな中、客がまた一人店に入って来たようだ。恍会は入ってきた客に挨拶をしようと入り口の方を向く。

「いらっしやいませ！ってシャニーさん」

「やあ、恍会君。こんにちわだね」

「最近よく来ますね」

「ははは、美味しいお店に足を運ぶのは当然のことだよ」

「まあ、べつにいいんですけどね。注文はいつものやつですか？」

「ああ、いつものやつで」

「じゃあ運んで来ますのでこちらに座っててください」

恍会はシャニーを席に案内した後メモを取り奥に引込んだ後、料理を持って出て来て運んだ後またメモを取る。シャニーはそんな恍会の姿を見ていたがしばらくして。

「ふむ」

と呟き、何かを考えている。しばらくして料理が運ばれてきたのでそれを受け取って食べながら客が減るのを待つ。客が減り、恍会に暇ができた所でシャニーは恍会を呼ぶ。

「おーい、注文を頼む」

恍会がすぐにやって来たのでシャニーは飲み物を注文する。そして書いたメモを出しに行こうとする所をシャニーは呼び止める。

「ああ恍会君ちょっといいかな？」

「ん？何ですか？」

「なあ恍会君、気に入らないことが在るならたまには暴れたりする

のも良いかも知れんぞ。それか、見つめ直したり、な」

恍会はそのシャニーの言葉を聞いて一瞬驚いた顔をする。

「・・・そうですね、見つめ直す・・・か。それも良いかも知れませんが。考えておきますよ」

恍会は微笑みながらそう言ってまた仕事に戻るのであった。

夕方、仕事を終えて家に帰る途中、恍会は今日シャニーが言ったことを考えていた。

「たまには暴れてみるのも良いかもしれない、か。そういえばギルドの仕事に盗賊退治が最近追加されたんじゃないかなかったかしら」

たまにはそういう仕事も請けてみようかなと恍会は考える。

「それにしてもあの子、夢加」

そうあいつだ、あの子を見てるとある人のことを何故か思い出してしまう。

「そう、似てるのよね性格とじゃなく、どこことなく雰囲気か」

だから、何となくイライラしてしまう。今までずっと避けてきた事だから。

「私は、どうしたいんだろ。忘れたいのか、それとも」

恍会はそう言って空を見上げる。沈みかけた太陽が見えなくなるま

でずっと。

とある森の中にある村、一人の男がそこに立っていた。男の前にあるのは二つのお墓。男はその墓前に立っていた。男はその墓に向けて一人しゃべりだす。

「もう、3千年も経つんだな。あの日から」

男はそう言ってしばらく黙っていたがまた一人喋りだす。

「結局、俺は何ができたんだろう。現状維持くらいか？ふん、くだらない。そんなの何も出来なかったと同じじゃないか。それどころか殺そうとまでして、ほんと、最低な男だよな。」

男はそれから空を見上げ、喋り続ける。

「情けない最低な父親だよな。お前は、自分を捨ててまで、守ろうとしたのにな」

今ままで一時たりとも忘れたことは無かった。・・・いや、忘れられなかった自分が見たあの子の最後の姿。それは・・・。

「泣いていたよな。本来なら、もうなにも感じることもなんて出来るはず無いあんな状態で、泣かれながら刺された」

なにもしてない、そう、あの子はなにもしてないのに。解っていたはずなのに俺は・・・。

「俺は、自分の立場としての役目を、仕事の方を選んだんだよな」

そんな事を考えていると男の後ろから自分呼びながら近づいてくる者がいる。どうやら来たようだ。男は最後に呟く。

「なあ、エリル、お前のやったことはあの子の助けになったのか？」

そう呟いて男は自分を呼んでいる声のほうに向かって歩き出す。ここに来るたび毎回同じような話をしている。本当に情けない奴だな。

「はあ、まったく、一族の長がなにやってるんですか。だいたいあなたは……」

男はガミガミと言ってくるその者のお説教を男は、はいはいと適当に返事をしながら歩いて行く。

（俺の寿命も、もうすぐか）

そんな事を密かに思いながら。

ある一人の少女が道を歩いている。周りには何もなく、ただ地面が延々と続いている。どこに向かえばよいのか、自分がどの方向から来たのかもこの空間ではすぐに解らなくなる、そんな場所に少女は長い間ずっとずっと、歩き続けてきた。

しかし、少女はある時ぴたりとその足を止め、足下の地面をしゃがんで調べ始めた。しばらくして少女はまた立ち上がり呟いた。

「やっと、見つけた」

その声は今にも消えてしまいそうなほど小さい。

「これで出れる。この空間から、これで抜け出せる」

それから少女は地面に手を付ける。そうするとその地面に光る円形の模様が浮かび上がる。その模様はよく見ると小さな文字で、できた小さな円形の模様が何千と集まってできている。少女がそのまま手を当てているとその模様が碎ける。

「あいつめ、絶対に許さないんだから」

そして少女は光に包まれて、少女がいた空間は崩壊を始めた。

お仕事開始！！

朝、銃はある宿屋の部屋で目を覚ます。

「うん？朝か」

ベッドから身を起こして部屋のカーテンを開けて、窓から外を眺める。そのまましばらく眺めていると廊下からバタバタと音が聞こえてくる。それからすぐに部屋のドアがバタン！と勢い良く開かれた。

「銃、起きてる？！」

その騒がしい音の原因はやっぱりと言うのかやはりと言うべきか、夢加だった。

「やっぱり君か。どうしたの？夢加、こんな朝早く」

「ふっふっふ」

銃が聞くと夢加は笑いながら言い放つ。

「銃！盗賊退治に行くぞ！！」

「………は？」

「えーと、つまり最近この近くに居る事がわかった国宝級のお宝をね盗んだ盗賊団のお宝の奪還と殲滅をアルセル国がギルドに依頼してきたと。そういうことか」

その後、銃は夢加に無理矢理つきあわされて仕方なくギルドへ向かう途中に今回の仕事の説明を聞いている所であった。

「はあ、なんで僕が。その仕事って先着何組さまとか、そういう制限は無いんだろ？夢加一人で十分じゃないか」

「うーん、今回の仕事は報酬が報酬だからね。競争率高いんだよね。報酬は早い者がちだから少しでも可能性上げときたいんだよ」

「ふーん、で、場所は？」

「ふふふ、着いてからのお楽しみ♪」

夢加は笑いながらそう言って銃の先を歩き出す。夢加がこの言い方をする時はろくな事にならない、大丈夫だろうか。銃は不安を抱きながらもギルドに向かって歩くのだった。

そしてついにギルドに着いてしまう。ギルドに着いた二人は仕事の受付の窓口に行き、声をかける。

「おーい、おっさん。この仕事受けたいんですけど」

受付のおっさんがこっちを見る。

「ん？おう！小娘か。依頼内容は・・・やっぱりこれか。ん？今日は若僧の方も一緒か。珍しいな、お前がこの手の仕事を受けるなんて。まあいいか。」

受付のおっさんが書類を出してきたので銃がそれを書いておっさんに渡す。

「ふむ、では仕事の話に入ろうか。今回奴らのアジトがあるのはガオルドの森の高地だという所までは分かっている。知ってると思うがガオルドの森は捕食型植物達の生息地でもある場所だ。そこをアジトにできる盗賊たちも当然それなりにレベルが高い。中にはその首に賞金が賭けられている奴も混じっているから各自注意して行動するように。まあ、個人的にはとてもお勧めできる様な仕事ではないな」

説明を聞きながら銃は心の中でため息をつく。

（夢加のお楽しみって……。何だか盗賊退治ってレベルじゃないよね、この仕事）

「おーけい、おーけい。大丈夫任せときなさい」

夢加は気楽そうに言っているが本当に大丈夫だろうか。非常に不安である。そして仕事の話聞き終えた夢加がこちらを振り向き“さあ行こっか”と当たり前のようにこちらに手を伸ばしてくる。

「いや、夢加これはさすがに、なんと言うか凄く危険な香がするんだけど」

銃のそんな言葉に夢加は満面の笑顔で言ってくる。

「大丈夫だよ。私とあなた、二人でやるんだもん。できない事なんてなにもないよ!」

「あー、でも、うーん……。仕方ない、行ってあげるよ」

よし、じゃあ早く行こうと夢加はこちらの手を掴んで走り出す。う

わ! ちょっと。と言いながら二人はギルドからそのまま出ていってしまう。

「うらやましいねえ」

二人が出て行った後一人おっさんは呟くのであった。

二人が出て行って少しした後、一人の女の子がギルドに入ってくる。

「お早う御座います、今日はいいい天気ですね」

恍会だった。恍会は入ってきた後真っ直ぐ受付の所に向かってくる。

「やあ、お嬢さんか。今日は何の用だい」

「ガオルドの盗賊退治で」

「おいおい、本気かい? きみ、戦闘とか苦手じゃなかったっけ? いつもの仕事も入ってるけど」

「またあいつですか、でも今回はやめときます。たまには体を動かすのも良いかと思ひまして」

「ううむ、まあそう言うなら。しかし、一人で大丈夫か?」

「現地で適当にみつけます」

仕事の説明を聞いたあと恍会はそのまま現地に向かった。

(本当に大丈夫なのか?)

出て行く姿を見ながらやはり心配をしてしまうおっさんであった。

そしてさらにその後すぐに違う人が来た。

「ギルドはここでいいのか？」

年は、見た目約17歳前後ってところだろう。知らない顔だ。とにかくその少年は仕事の案内板を眺めた後こちらにやってきた。

「ガオルドの盗賊退治を頼む」

（はあ、これで何件目だよこの仕事）

思わずため息が出てしまうおっさんなのであった。

あれえ？単独行動！？

ガオルドの森。夢加達は草を掻き分けておくに進んでいた。周りには他の同業者達も一緒に奥に進んでいる。

「ふう、ひどい道だね、まったく」

夢加は進みながら誰に言うわけでもなくつぶやく。その言葉に銃がこたえる。

「ははは、森だからね。しかもこの先は山道になってもっときつくなって行くだろうね。獣もけっこういるし、さっきのなんかまるで火炎放射器みたいだったなあ」

銃はしみじみといった感じで上の方を見ながら言う。これに対して夢加はうんざりとした様子だ。

「はあー。そうだよねさっきの獣もそうだけど一番厄介なのが・・・」

夢加が喋っている途中、銃が不意に右を向いて夢加が今喋っているその一番厄介な存在を知らせた。

「夢加、右」

「はいはい、解ってるって」

そう言いながら夢加は右手を素早く上げて何か大きな物をガシ！と掴み、それをそのまま引いて引き千切った。夢加の手にはある植物、そう、捕食植物の残骸が握られていた。

「一番厄介なのが、やっぱこの捕食性肉食植物達だよね、これで何回目だろ。12, 3回ぐらい？慣れればどれがそれかすぐ解るけどね。初めて見たときはどれがそれなのかぜんぜん予想できなかったもんね」

「ははは、そうだね。僕なんかもう18、9回襲われてるよ」

夢加と銃はそれこそうんざりするといった様子で喋り、二人で力なく笑ってため息を一つ深く吐いた。そんな時、後ろで女性の声がする。

「あらあら、二人とも、だらしないわよ。このぐらいの道でもう疲れてるなんて」

二人はくすくすと笑いながら喋りかけてくるその声の方向を向くと、そこにはあの料理店の少女、恍会が立っていた。

「恍会！何であんたがここにいるのよ」

夢加は少し驚きながらも嫌そうな顔でその少女をみる。

「あら、私が教えた仕事よ？本人が請けていてもべつに変じゃないと思うけど」

恍会の私が教えたという所に銃は反応する。

「へえ、今回の仕事は君の紹介だったんだ」

「ええ、そうですよ。お互いこないだの夕食の買い物に行途中で偶然会ったのでその時のお喋りで」

銃はその言葉を聞いてなるほどと思う。今回の仕事は恍会が夢加に

教えてそれを夢加が請けた物だったらしい。

まあ、だからどうしたと言いたくなるが。そういえばその時はどんな話をしたのだろう。銃は何となく気になったので恍会に聞いてみる。

「お話？　そうですねえ、たとえば・・・」

恍会が喋ろうとすると夢加はこちらの腕を取って早く歩き始めた。

「ほら、そんな事はどうでもいいから早く盗賊達のアジトを探すの！」

「うわっと、ちょっと夢加？」

はら早く、とこちらの腕をぐいぐいと引っ張ってどんどん先に進もうとする。気のせいか少し機嫌が悪いようにも見える。恍会もその歩みに付いて行きながら夢加に喋りかける。

「そんなに急いで大丈夫かしら？　孤立して集団で襲われるなんて間抜けなバカがやる事よ？」

「ご心配なく。気配を探ることなら慣れていきますので。それに時には勇気を持って行動することも大切な事です。少なくとも私にとつては最後まで集団で行動して目的を果たせない方が超間抜けなバカのやることです」

気のせいだろうか？　二人にどこと無く険悪なムードが漂っているように感じる。銃の目には二人の間に火花が散る幻のような物が見えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人はただ、黙ってにらみ合っているだけでも拘らずなぜか周りの空気がどんどん重くなっているように感じる。銃が何も言えずにただ黙って見ていると、その内疚会の方が口を開く。

「ふうーん。夢加ちゃん、勝負しましょう」

「先に頭を捕まえた方が勝ち。そんな所？」

「クスクス。それでいいの？私が勝っちゃうわよ？」

「あははは。冗談は止めてほしいな。私の勝ちだよ」

それから二人はどちらともなく走る準備をして地面に足を着き。

「「位置に着いて・・・」」

身構えて。

「「スタート!!!!」」

そして、走り去ってしまったのであった。

（おーい夢加。この仕事一緒にやるんじゃないかったっけ？）

「まったく、二人とも何やってるんだか。」

銃はやれやれといった風に肩をすくめる。

「まったく。だいたい」

そう呟きながら自らの武器を取り出す銃。

「はあー」

そうやってため息を吐いていると周りの木の上から人の形をした物が落ちてきた。

「敵陣の真っ只中だというのに……ねえ、盗賊の皆さん」

自分とその他の同業者達の周りに落ちてきたそれは嫌な感じの笑い声を立てながらそれぞれ武器を取り出して構える。銃も含める、周りの同業者達もすでに戦闘体勢だ。盗賊の中の一人が手を上に上げ、一言。

「奪え」

その言葉と同時に腕を下げたのが戦闘の合図となった。

「うおおおお……!」

まわりの奴らも。

「行くぜてめえら!」

「めいれいすんな!」

「てめえは黙れよ!」

「早く行くぞバカ!」

などとバラバラな声を上げながら向かっていく。そして銃も。

「仕方ない。相手してやるよ」

そして、戦闘は始ま

った。

ギルドと盗賊達がぶつかり合っている中、銃のいる場所にも盗賊たちは襲ってくる。銃は周りの泥棒たちに向けて発砲していると横から敵の一人が襲い掛かってきた。

「くらえやあ！！」

銃から見て右から左へと横一線にナイフを振るってきたので銃は右の拳銃でそれを受け止めてもう一丁の左手の方で相手の頭を打ち抜いて吹っ飛ばす。

「ぬごあ！」

そして今度は後ろから刺そうとしているのでギリギリまで誘い込んでもから一氣に体を捻りながら回避して拳銃で頭をたたき伏せて気絶させた。

「ふぎゃ！！」

銃が相手が気絶して白目を向きながら倒れて行くのを確認してから前を見ると盗賊が今度は首狙いでこちらに向かって走りながらナイフで斬りかかろうとしている所だった。銃は上半身を後ろに反らすことでそのナイフを避けてそのままその盗賊の腹に3発弾をぶち込んだ。

「かはっ」

今度は悲鳴を上げることも無くそのまま倒れこんでしまった。

銃は一息ついて周りを確認してみると他の同業者達も3人前後のチームを組んで盗賊どもと戦い合っているみたいだ。銃は再び集中して周りの盗賊たちに注意を向けて二発連続で発砲、二発とも敵の頭に当たって吹っ飛びそのまま地面に倒れ伏した。

「そろそろ退いてくれると嬉しいんだけどな」

銃は一人そう呟きながら発砲していると不意に真上から襲って来る相手に気が付いた。銃はすぐさまその場から飛び退いて回避、音も立てずに着地したその何者かを見る。

見るとそいつは先ほど周りの盗賊達に“奪え”と命令していた相手だった。その相手は両手の小刀を構えながらこちらを向いて笑いながら口を開く。

「さてと、宜しくお願いします・・・で良いのかな？」

「ははは、何でも良いんじゃないかな自分が気に入ればそれで」

「それもそうですね。でわ、珍しいお宝、奪います」

「正直な物言い、気に入ったね」

銃は喋りながらその相手に3発連続で発砲。しかしその相手は銃の気弾を片手の小刀で弾いてしまう。

「危ないなあ。名前ぐらい名乗らせてよね」

強い。気を引き締めて行く必要があるみたいだ。そして相手はそんな銃の気持ちとは裏腹に気軽そうにしている。

「じゃあ、名乗るよ？自分の名は春風。忘れないでね」

そして銃も名乗る。

「白羽良 銃だ」

先に動いたのは春風の方だった。春風は銃の方に向かって素早くジグザグに曲がりながらこちらの前方に向かって姿勢を低く保って走ってくる。銃は後ろに下がりながらも二丁の拳銃で向かってくる相手に打ち込む、が当たらない。

春風は曲がるときも速度を変えず、なおかつ0コンマ1秒（0.1秒）単位で走る速度を微妙に変えてこちらの標準を狂わしてくる。そして銃は春風の間合いに入らされる。春風は右手の小刀を走りながら腹に向かって一線した。

「ちっ」

銃は空に向かって跳躍して後ろをとり、春風の攻撃後の僅かな硬直時間をギリギリのタイミングで狙うが相手の春風が両手の小刀を後ろを向いたままこちらに向かって投げてきた。銃は間に合わない判断。構えようとしていた拳銃でその二つを直接叩いて弾いてから構えて、相手に射ち込むが当たらない。

春風は左右と動きながらこちらの弾丸を確実に見切り、再び懐から出した小刀で全て弾いてしまう。やはりだ。単純な速さで向こうに負けている。銃は再び“ちっ”と口を鳴らしながらも続けて発砲。今度は木の陰に入られた所で発砲を止める。

「さて、どうするかなあ」

この僅かなやり取りだが相手との実力の差はもはやハッキリ痛感させられている。そんな事を考えていると相手が木の陰からやはり気楽そうに笑いながら両手の小刀を持って姿を現してきた。それを見ながら銃はまた呟いた。

「イリュニス、ver2に移行。いけるよな？」

そう呟くと銃の目の前に文字が浮かんできた。

oad 完了” “移行 ver2”

“OK” “1

mode

固定 スピードブレイク”

銃はその最後に浮かんできた文字を読むと薄く笑みを作りながら春風に向かって言う。

「さて、お決まりながらの言葉を述べさせてもらうけど、勝負はここからだよ」

「あははは、どうゆう風にこれからののか、見せてもらおうか」

「ああ、言われなくともな」

ダン！春風は銃弾が自分の頬をかするのを感じる。頬に手を当ててみると手に液体の感触がする。見てみると手に付いたそれはやはり自分の血だった。油断していたとはいえよけきれなかった様だ。さつきとは比べ物にならないほど弾速が上がっている。しかも弾速だ

けではなくどうやら弾の強度と威力の方も上がっているみたいだ。

（なるほど。彼の場合、verごとにモードを固定されて自由に変われないみたいだね。その代わりとしてなのか、性能の上がり方はかなりのもんだね）

春風は一人納得する。だが、それでもこの状態でも反応できない速度じゃない。

銃が再び気弾を3発連続で撃ってくる。春風は二発避けて最後の一发だけ小刀で受けた。それから春風は左の木の方角に向かって走り出す。走っている間も銃撃をしてくるので時には避けて時には弾いきながら走り続ける。

先ほどから感じてはいるが彼の射撃は最初の数発を外しただけで後は全て正確にこちらに向かって放たれている。実際に弾道を確認してから行動をしなければ避けることも出来ないだろう、その正確さと予測能力は非常にめんどくさく、やり難くてしかたがない。

春風はそう感じながら目の前の木を一気に走って上がり、てっぺんに来た所で跳んで太陽を背に上空から襲い掛かった。銃はそれを両手の拳銃で受け止めた。てっきり避けるかとばかり思っていたのだが。銃は春風の小刀を両方受け止めた後、力づくでその小刀を弾き、空中に蹴り上げて気弾を撃ち込む。だが、春風は空中で身を回転させることでそれを回避して同時にその回転を利用して銃に切りつけた。

銃はそれを後ろにバックステップで避けて着地した春風に今度は4発連続で撃ちつけるが今度は全て切り落とされてしまった。ギンギンギンギン！春風の小刀が小気味いい音を出しながらその軌跡を作

り出す。銃がさらに数歩下がる姿を見ながら春風は銃に喋りかけた。

「珍しいもの持ってるんだね、君。元々の主人はあなた？」

「いや、形見として譲り受けたんだよ」

春風はさらに聞く。

「それじゃあもう一つ、念のため聞くけど“本物”だよね？」

「聞くまでもないだろ」

春風はそこまで聞くと薄く笑みを作った。

「あはは、やっぱり。懐かしいね、なんだかよけい奪いたくなってきたかも」

「やってみなよ」

そして、二人は再び戦闘をするために構えるのであった。

「あっちゃあー」

恍会との勝負を受けた夢加は一人、森の中でさ迷っていた。夢加は周りを見渡して一人喋る。

「上も周りも全部木しか見えない。どっちに進んだら良いんだろ」

夢加は一人で盗賊のアジトを探している内に森の深い所に入ってしまい空すらも木々に遮られて目印の山すらも見えなくなってしまっていたのだった。夢加は少しの間何か考えていたがそのうち“うん

！”とうなずいて判断する。

「しっかた無いなあ・・・木に登りながら行くかな」

夢加はそう呟いて木に手を付けた瞬間だった。

ズキ！！

夢加に不意に頭痛がはしる。

「っ！！」

思わずその場にうずくまってしまう。

ズキ！ズキ！ズキ！ズキ！・・・。

頭痛はどんどん大きく治まる気配が無い。夢加はうずくまったままその痛みで動くことが出来ない。さらに上に複数の気配を感じるがこの状態では隠れる事が出来ない。気付かずに通り過ぎてくれと思うばかりだ。だがしかし、こういう時に限って嫌なことは続く物だ。その気配は向かう方向をこちらの方に変えてきた。どうやら気付かれてしまったようだ。

（くそお、こんな時に）

まさに最悪の状態だ。さて、どうする。と考えていると不意に声が聞こえた。

っと出れた。

や

(だれ?)

そして夢加はそのまま意識を閉じてしまうのであった。

苦心なる昔

「ひっく、ひっくひっく。ぐすん」

家の中で少女が一人で泣いている。

「お父さん、お母さん、どこお？帰って、きてよ。一人は、やだよ
お」

一年前、少女の父親が死んだ。原因は病氣、病名は忘れた。そして一週間前、母親が死んだ。原因は病氣だった、病名はやはり覚えていない。少女には病氣の名前なんてどうでも良い事だったから。

お婆さんは言った。二人は遠い所に旅立ったんだよって、だから少女は言った。ならばずっと待っている、二人が帰ってくるまでずっと、一人でも。料理は近くの家のお婆さんが作って持って来てくれているから問題なかった。そして少女が両親を待ち始めてから一週間がたった夜の事である。少女は暗い家の中で泣いていた。旅立った二人を待ちながら、たった、一人で。

「どうしたの」

少女が泣いてるそんな時だった。一人しか居ない筈なの家に何処からか声が聞こえてきた。少女はビックリして辺りを見渡しながらかつぶ。

「だれ？誰なの！？」

しかし周りを見渡してもだれも見えない。少女は怯えながらまた叫

ぶ。だれ！、と。そして、謎の声が答える。

「むだだよ。周りを見渡したって誰もいない。なぜなら私は君と重なった存在だからね」

「わかんない。何を言ってるのか解らないよ！」

「怯える事はないよ、何をしようという訳じゃないから。ただ、君の名前を覚えてくれるかな？」

少女はまだ怯えていたが自分の名前をその声に教えてやった。

「私？私は、赤。亜魔ノ あまの せき 赤だよ」

「なるほど、亜魔ノって名前なんだ。ふふふ、君にとっては始めましてって事になるのかな？だったら私は夢加。亜魔ノ 夢加だよ」

最後にその声は宜しくね、と付け加えたのだった。

盗賊たちは頭を抱えながらうずくまっていた少女が立ち上がり、こちらを見ながらニヤリと笑うのを見る。どうやら気付かれていたみたいだ。盗賊達三人は雄たけびを上げながら襲い掛かった。

「くらえええええー！！！」

そんな盗賊たちに対して少女は手を手刀の形にして横に振るだけだった。その手刀は盗賊達に届くことは無く、空振りに終わった・・・はずだった。なぜか自分の体が痛みを感じ盗賊達の体から血が飛び

散った。盗賊の一人が自分の体を見ると体に一本の切り傷が付いてるのが確認できた。いつの間に？と思いながら盗賊たちは地面に激突するのだった。そのまま傷を抑えながら地面に転がっていると少女が喋りかけてきた。

「大丈夫ですよ。私も殺しは好きじゃないですから、安心してください」

盗賊がその声の方に顔を上げるとそこには髪の毛の長い赤い髪の少女が立っていた。その少女は苦しそうにしている盗賊に対して頭を蹴りつけた。盗賊は頭に衝撃を感じて意識を失った。

「うう、出るのに疲れてこれ以上は・・・無理・・・かな」

最後に少女の独り言を聞きながら。

ガサガサガサ、ガサガサ。

「ふう、やっと出れたわ。えーと、次はどっちに行こうかしら」

恍会は草などを掻き分けながら一人山道を進み続けていた。

「登り道は、こっちかしら？」

盗賊達のアジトを探しながら恍会はなお森を進み続ける。

「見かける盗賊の数も増えてるし、もうすぐだと思っただけだなあ」

アジトに着いたらまずはどうしようかと考えながら恍会はとにかく先へと森の中を進み続けていると。

ガサガサガサ。

すぐ近くの左の草の音を立てながら誰かが近づく。私とした事が、どうやら考え事に夢中になって気が付かなかったようだ。

（盗賊団？それとも同業者？）

恍会はどっちだ？と思いながら音のする方へ身構える。そして。

「うおおおー！覚悟しろ！！」

（盗賊団！）

恍会は草を突っ切って跳び出してきた少年を盗賊団の一味と判断。戦闘の体勢に入る。

「ええい、やってやろうじゃないの」

恍会は腰に下げていた両刃の剣を抜き放つ。

「いざー」

そして恍会は戦闘を始めたのだった。

ギルドと盗賊団達があちこちで戦闘を繰り返している中、盗賊団の一人、春風は大きな木の上に座ってその様子を見物していた。

「あーあ、勿体無かったなあ」

木の上で一人枝に座りながら呟いていると下の方からこえがする。

「じゃあ何で本気でやらなかったんですか、春風さん」

下を見ると手下の一人がこちらに向かって木を上ってくる。先ほど伝言を頼んだ奴だ。結果の報告にでも来たのだろう。

「おまえか。どう、伝えてきた？」

「ええ、ちゃんと伝えてきましたよ、」

手下は自分の左側にある枝に座る。

「返答は？」

「はい、春風さん。貴方の判断に任せる。と、言っていました。さすがですね、貴方ぐらいですよここまで自由に行動する事を許されているのは。信頼されているんですね」

信頼なのだろうか。無責任という気もするのだが。

「つたくあのバカ頭領が」

「・・・ほんと貴方ぐらいですよ。頭にそんな態度を取れるのは」

まあいい、あとは手下達にこの事を伝えて行動するだけだ。こいつにはまた一つ走り行ってもらおうとしよう。春風がそんな事を考えていると手下の方が春風さんと、話しかけてくる。

「ん？なに」

「先ほどの話なのですが、あの拳銃、そんなに良い物なんですか？」
「うーん、まあ、珍しい物ではあるかな。かの有名な大鍛錬士最後の一品ってほだしねえ」

「大鍛錬士！それってあのグリゼロフの事ですか！？死ぬ間際に完成させた大鍛錬士最後にして最高傑作という？うわさには聞いたことあったけど、本当に在ったのか」

春風は手下の言葉に知らなかったの？と呆れた様に話しかけた。

「最高傑作、か。使い手次第ではかの心器とすらも互角に渡り合える性能を持つ・・・はずだった物。作られたのはざっと40年ぐらい前になるのかな。あの拳銃の性能を引き出すには技術だけではなく、使い手の器、それにその者の心の決意などが必要であって・・・」

「へえー、あいからわず詳しいですね。で、春風さん。もう一つ聞きたいことが在るのですがいいですか？」

まだ拳銃の話の途中であった春風は少し不満そうにしながらも答える。

「いいけど？」

春風は手下の言葉になんだろうと思いつつも許可を出す。

「ここ最近気になって仕方なかった事なのですが。どうしてお宝を盗んだのが俺達だって事が分かったんでしょうかね？」

「ん、何の事かな？」

春風はわざとらしくそっぽを向きながら答える。手下はそのまま言

葉を続ける。

「しらをきろうたってそうはいきませよ。国の宝物盗もうとするやつなんて貴方達ぐらいなんですからね。貴方達二人が王室から盗んできた子供が書いた下手糞な絵。あれが今回の騒動の原因ですよ？ どうせ途中で見つかって逃げ帰って来たんでしょうが・・・」

「ちょっと待った!!」

春風が突然大きな声を出して言葉を遮る。手下が何だ？ と驚いていると春風がこちらに指をさしながら喋りかけてくる。

「今の言葉、訂正して貰おうか。まず一つ、持って来たのも盗んだのも私だ。あいつじゃない。そして二つ、自分は見つかっていないしそれはあいつも一緒だ。城の内部にはっきりと自分達だと解るような証拠も残していない。OK？」

「お、おっけい」

手下は少し気押されながらも言葉を続ける。

「じゃあ、何で自分達だと解ったんですか。証拠を残していないならそんなのばれるはずが無いでしょう!!」

「んー、盗んで外に出るまでは上手く行ったんだけどねえ。ねえ、ほら、最近うち等の盗賊団のトレードマーク決めたよね、覚えてる？」

「ええ、そりゃ旗まで作らせられましたし」

「実は、城の門の前でそのマークをどうするか言い争いが始まっちゃってねえ。城壁や門とかに削って見せ合ってたらいつの間にかそこら辺、見渡す限りビッシリと。いやあ、あれは爽快だったなあ。

団の名前とかも書いてあったからなあ。あはははは……」

怒りを取り越して呆れてしまうとはこの事を言うのだろう。そんな事をすれば恨まれるのも当然のことだ。手下はその場でうなだれる事しか出来なかった。

「あんたは、あんたという人は」

「まあまあ、気を取り直して。ほら、そろそろ出発するよ。他の奴らに連絡！自分は先に集合場所に向かってるから急いでね」

「うわあ、ちょっと待ってくださいよ」

春風は立ち上がると手下を無視してさっさと下に降りて歩いていつてしまう。手下は急いで他の仲間の一団の所に向かい始めるのだった。

「白羽良 銃、か。今の君にとって、それは偽名？それとも本名？どっちなんだろうね。……まあ、決まってるか」

手下が行った後。春風は空を見上げながら寂しそうに一人呟くのだった。

「自分も……居たんだよ。当たり前のように君に壊れた一人として」

それから三十分後。春風の一団は撤退を開始した。

「ふう、もう少しか？」

銃は周りの景色を見ながら呟いた。結局あの後、春風たちは撤退し

てしまった。全体的な戦況を見ての判断だろう。その後も数回他の盗賊達に襲われたりして苦労したがやっとここまでできた。捕まえた盗賊にアジトの場所を聞き出して今その場所に向かっている所だ。

「くそ、むかつくなあ」

銃は呟いた。手加減されていた。それが無性に悔しい。まるで何かを試されている。そんな感じだった。

「本気で戦りあってたら、やっぱり負けてたんだろうな。前は、昔はこんな事無かったんだけどね。やっぱり上手く行かないもんなんだな、直接的な戦闘は」

銃は空を見上げる。そう、昔の話だ。今の僕とは関係ない、ずっと昔の話。

「そのはずなんだけどね。なのに、何でまだ迷ってるんだろう。くだらない、あんな事のために」

昔はこんなこと無かった。ただ、当たり前のように全てが簡単に進んで、僕の世界を見て、そして気が付いた。

「おまえとの降らないたった一つの未練。それが未だに引き止める。もう、決めた筈なのに、この道を進むと。ほんと、どうして君達家族は僕の邪魔をするのかな」

そう、始めの一步を踏み出したその状態で未だに進めずに、僕はそこにいる。後ろに下がる事もできず、横、前に進む事も出来ずにここにいる。

「いいかげん、進めよ」

銃は呟いた。ただ一人、自分に言い聞かせるため。

ハーフ&ハーフ

ゴオオン！！ドオン！！グオオオオオ！！ドカン！！。ガオルドの森の中、恍会は自分に向かって飛んで来る炎や爆発や炎の竜巻などから必死に逃げている所だった。

「うわあああ！っと」

恍会はまた危険を感じて体ごと放り出すような感じで左に向かって跳ぶ。するとさっきまで走っていた所を大きな火の玉が通り過ぎた。恍会はそれから素早く立ち上がりまた走り出す。

「もう、何時まで追って来るつもりよ！」

恍会は逃げながら後ろから未だに追って来る少年に対して叫んだ。

「まったく、何時まで逃げる気だ！」

後ろ少年も同じような感じで叫び返してきた。

「あんたが諦めるまでよ！」

「おまえが諦めるまでだ！」

「真似しないでよ！！！」

「してねえよ！！！」

そんな風に言い合いをしながらも少年の炎は激しく少女を襲う。恍会は逃げながらもその少年のことを観察していた。

先ほどから少年が出してる炎は、炎でも基盤六属性番外に位置する

獄炎と呼ばれる種類の火属性の亜種に位置する物だ。先程から見て
いると炎に当たった物は確かに全て燃えてはいるがその炎は決して
他の物に燃え移ったりはしていない。冥界の主に地獄に存在してい
る鬼の一種、獄炎鬼のみが使える水すら燃やすという “断罪の炎
”。つまり後ろの少年は鬼の一種という事になるのだが、あの少年
の見た目は人間だ。そして力の感じで判断するなら。

「鬼と人のハーフ、混ざり物。つまり混血って訳ね」

恍会は相手が飛ばしてきた炎玉三発を避けながら呟いた。そして炎
弾を避けられたと確認するや否や今度は空中に跳んで今度は大きな目
の一発を飛ばしてきた。恍会は安全な方向を感覚で探り素早く進む
方向をそちらに変えて走りながら前に身を飛ばす。炎の玉が地面に
当たりドカン！！とあたりの物を爆風で吹き飛ばしす。恍会もその
爆風に吹き飛ばされた。大した威力だが当ってはいないのでとりあ
えず回避成功と言って良いだろう。再び立ち上がり走り出す。する
と追いかけていた野郎がイライラとした感じに叫んできた。

「いい加減に当たりやがれてんだこの盗賊め！！」

恍会はやはり逃げながら叫び返す。

「当たってたまるもんですか、まるこげになっちゃうじゃない！そ
れに盗賊はあんたでしょうが！！」

「なにい！？だれが泥棒か。俺はギルドの依頼でお前ら泥棒集団ぶ
っ潰しにここに来てんだ。泥棒扱いしてんじゃねえ！」

「私だって同じよ。襲う相手はちゃんと確認してからにしないこ
のバカ！」

「うそを吐くなあ！！依頼は早い者勝ちだろうが！！」

そう言いながらまた少年が炎玉を飛ばしてくる。恍会はそれ避けながらまた叫び返す。

「仕事の条件ぐらいちゃんと確認しなさい！今回は集団系の仕事でしようが！！！」

その恍会の怒声を聞いて少年はやっと攻撃を止めた。そして本当かよ？という風な疑わしそうな顔で近付いてきた少年に対して恍会は未だに持っていたギルドで渡された説明書きを手元に出してそのバカに見せてやる。

「ほら」

少年は最初こそ、それをいぶかしげに読んでいたが読んでるうちにみるみる顔が青ざめていくのがよく解る。どうやらこのバカでもやっと仕事の内容がちゃんと理解できたようだ。

「んで？何か言うことは？」

恍会はニツコリと笑いながらその少年に向かって言うのであった。

「すみませんでした」

「声が小さい！！」

「すみませんでした！」

「ほら！もう一回！！」

「すみませんでした！！！！」

その後、少年は地面に頭を擦り付けながら恍会に謝り続けていた。

「まったく。仕事の内容もろくに理解出来てないなんて信じられないわ。まったくこの大バカは」

「おっしゃる言葉ありません」

少年はただひたすらに誤り続けることしか出来ない。

「ふん、まあいいわ。こんな所で喚いてたって仕方ない。あれだけ目立ってたんだもの、何時襲われてもおかしくないわ。早くここから移動しましょ」

さんざん文句言って時間を潰した本人が何を言っているのだろう。少年は薄っすらとそんな風に思ったが言える立場でもないの口には出さなかった。少年は土下座の格好から立ち上がって彼女が歩き出した方向に付いてゆこうと歩き始めた所、前を歩いていた少女が振り返ってきた。

「あーそうそう。君の名前は？」

「俺？俺の名前は炎鬼移送えんきいそう 炎だえん」

「私は譜闇 恍会、よろしくね」

恍会がそう言った所で突然って訳でもないが沢山もの盗賊が木陰の影などからぐると二人を囲むように姿を現した。それを確認した恍会は炎に盗賊達に聞こえないようにこっそりと囁いた。

「一撃で決められるように今の内に力を溜めといてね。あと、合図したら一緒に跳んでね」

炎はその言葉を聞いて僅かに頷いた。そしてその盗賊団の中の一人が少しだけ輪の前に出てきて二人に向かって喋りかけてきた。

「さて、持ってるもの全部渡すってんなら見逃してやるが？この人

数で囲んでんだ。抵抗しても無駄だぜ」

恍会達はお互い背中合わせになって臨戦態勢に入った。

「ちっ。そうかい、なら行きやがれ野郎ども！」

男の合図と共に二人を囲んでいた30人強の盗賊達が襲い掛かってくる。

「3，2，1・・・跳べ！」

恍会はギリギリのタイミングを計り合図を出した。二人は同時に上に跳んで盗賊達を回避する。しかしだ。いくらギリギリのタイミングで回避して下の奴らが体勢を崩していても地面に着地すれば大して意味の無い行為で終わってしまう、どうするのだろうか。炎が落ち始めた体を感じながらそう考えていると突然体が空中で受け止められる感じがして炎の落下が止まる。いったいどうしたというのだろう。炎が後ろを振り返るとそこには。炎を片手で掴んで支えている恍会の姿があった。

「よし、まだ溜めている最中ね。合図するまで溜めてなさいよ」

そう言いながら炎を支えている恍会の背中には二枚の蝙蝠こうもりの翼にも少し似た魔族の翼が生えていた。だが、しかしその翼の色が魔族の羽根にしては少し変なのだ。何が変なのかというと羽が片方白いのだ。本来なら両方黒いはずなのだが。

「魔族と天族のハーフ？」

炎が思わずそう呟くと恍会は可笑しそうにクスクスと笑った。

「はずれ。天族じゃないのよ」

ではどの種族なのだろう。ハーフである事は今の台詞で確定したが天族以外で魔族の血筋にあそこまでの影響を及ぼすほど強くて羽を白くする存在性を持った種族を炎は思いつかなかった。そんな事を考えている内に体勢を崩していた盗賊達がこちらに向かってジャンプして襲い掛かって来ていた。炎がどうするのかと聞くと。

「大丈夫よ。もう準備は出来てるから」

恍会がそう言うのと炎を掴んでいる手とは別の敵の方へ伸ばした恍会の手の方から突然円を基準にした模様のような物。つまりは術式が浮かび上がってきた。そして炎は自分の体が突然重くなったのを感じた。そしてその影響は炎だけではなく他の盗賊達にも起こっている様だ。こちらに跳んできていた盗賊は皆地面に墜落してしまった様だ。この術は・・・。

「重力変動術、最下級、プレス。足止めならこの程度で十分でしょう? という訳で重いから後は宜しくね?」

恍会がそう言うと同時に、炎を支えていた手がパツッと放された。

「うお!? と了解。後は任せな」

炎はそう言うのと今までずっと溜めていた力を一気に炎玉として直接は当てないように方向調節をして撃ち出した。結果、盗賊達は皆爆風で吹っ飛び気絶してしまったのだった。

盗賊達を気絶させた後、恍会は地面に降りて一息ついていた所だった。

「ふう、重かった」

「重かったって持つてるほとんどの時間が普通の体重だったはずだろ？何で重いんだよ」

「五月蠅いわねえ。貴方と一緒にしないでよね。私はか弱いだよ」

「魔族の血筋が言ってもなあ。説得力が無いぜ」

「魔族の血筋は羽を消しているときと存在させている時とじゃ力の扱い方が違うのよ。まあ、私の場合、体の時間の流れ方も違うんだけどね。だいたい私は30年以上も人間としての存在で生きて来たのよ、飛べたこともそうだけど私にとっては術を使えたこと自体よく出来たと褒めてあげたいわね」

つまりはあの作戦は一種の賭けみたいな物だったという事か。よくそんな作戦使う気になった物だ。それにしても時間の流れが違うとはどういう事なのだろう。それに今の言い方だとうやらもう一つの種族は人間の様だがやはり色が合わない。突然変異というやつだろうか。炎は気になったので聞いて見ることにした。まあ言い方を変えるのなら知的好奇心が疼くってやつだ。

「時間の流れが違う？」

「そうよ。私は存在的に色々安定していない所があるらしくてね。羽を消してるときと出してる時とじゃ年を取る速度、と言うより老化の速度。つまりは寿命の消費の仕方が違うのよ。まあ聖者と魔族だから何となく納得しちゃうけどね」

へえ、そうなのか。解ったような解らないような理由だが・・・っ

て聖者って何だあ？称号の一つだろうか何だか余計に解らないことが増えたぞ。炎があれこれ考え込んでいると一息ついていた恍会は立ち上がって炎に言う。

「んじゃ、そろそろ行くわよ。必要な情報も集めたからアジトの場所もバッチリよ」

「はあ？集めたって何時、どうやってだよ」

そうやって炎が聞くと恍会はクスクスと笑いながら行った。

「企業秘密♪」

「お、おいちよっと待てよ、置いてくな」

そしてそのままスタスタと歩いて行ってしまふ。炎は急いで立ち上がりその後を追いかけるのであった。

前への痛心たる一步。

森の中で気絶していた夢加は目を覚まし、辺りを見渡しながら呟いた。

「う・・・ん？ ああそうか」

そう呟きながら夢加は近くの木の根元に座り込んだ。

「そうか。そうだったんだ。嫌だなあ、思い出しちゃったよ。小さい時のこと、ここに来る前のこと・・・全部」

そう呟いて夢加は上空に向かって手を伸ばしながらボウとしたような何処か気の抜けた表情で空を仰いだ。

「でも、まだ暫らくはこのままでいられるかな。目を覚ますにはかなり時間が掛かるみたいだしね」

夢加はそう言いながら今度は地面に仰向けの格好で倒れこむ。今、自分の目には空が映り、手には地面の感触がある。歩こうと思えば前に進むことが出来、病気にもなっていない、健康だ。

何時からだろうこの感覚が当たり前になったのは。

「私は・・・・・・なんで生きてるんだろうね、生命の意地ってやつなのかな。まったく、困ったもんだね」

夢加はそのまま暫らくボウっとしていたがその内“よし！”っと気合を入れながら立ち上がった。そして何かに気が付いたかの様にあ

る一点の方向をじっと見だした。

「んんー？向こうの方向、人の気配が沢山集まってるなあ。もしかしたらアジトかも、言ってみるかな」

夢加はそう言うと言を掻き分けながらその気配を感じる方向へと向かい始めるのだった。

盗賊のアジト。そこは木の柵で囲まれて中には木製の家などが建っている。そこは一見すると小さな一つの村にも見える所だった。そのアジトの付近では盗賊とギルドの乱戦の場となっていた。銃もその乱戦の場で盗賊達と戦り合っていた。

「くそ、進めやしない」

銃は気弾を拳銃から発射しながら忌々しそうに言う。周りの同業者達も盗賊団の頭領を捕まえようと先に進もうとするが多数の手下が邪魔で先に進めずにいる。確か今回の報酬は盗賊を捕まえた分、報酬が支払われる事になっていてさらに頭領を捕まえた者にはボーナスで追加報酬が支払われる方式になっている。皆それで我先にという感じでアジトに入り込もうとしている訳だ。

「うおー！お頭を守れ！！」

盗賊二人が銃に向かって走って襲い掛かって来たので銃弾二発で撃ち倒した。

「さっさと倒して報酬ゲットしたいけどさすがに一人じゃ強行突破

も出来ないしどうするかなあ。何時までも周りに合わせている訳にもいかないしなあ」

銃がそうやって一人呟いていると後ろから声が聞こえた。

「ふっふっふ。手伝おうか？」

その声の主など見る間でもなく解る。

「何が手伝おうか？だ。先に一緒にやろうって言い出したのはお前だろ夢加」

「ふふん。そんな細かい事いちいち気にしてたらストレス溜まって体調不良になっちゃうよ。それよりこの状況の事だけど。タイミング見て一気に突っ込むよ。囲まれる前に相手の頭を捕まえてボーナスゲットだよ」

「はあ、お前なあ。まあいいや、おっけい。相手の頭の場所は解ってんの？」

「ふっふっふ、解ってないな。こういう場合大抵は一番目立つ建物か大きい建物と相場が決まっている物なんだよ」

それは、結局は適当に探せと言う事ではなからうか。まあ他に良い案が在る訳でもないのだが。作戦を確認した後二人は背中合わせになり最後の確認をする。

「夢加、合図は任せた」

「おーけい。んじゃ、いっちょ暴れてやりますか」

そして夢加と銃の二人は共に戦闘を開始した。

スラスコの町。この町のギルドの前にどこかの国の軍服を着た人とそれに向かい合って並ぶ人の列が出来ていた。夢加は壁に寄りかかりながら横で金銭を数えている銃に話しかける。

「どお？ ボーナスの方は。どの位入ってる？」

そう聞くと銃はこちらにその報酬が入った封筒を渡してきた。夢加は渡された封筒の中身を数え始める。

「ひい、ふう、みい・・・うわ、何これ。なんで盗賊退治如きにこんな高い報酬が用意されてんの！？ まあ国からの直接の依頼ってだけでも十分おかしいんだけどね」

「さあね、そこら辺は僕は興味無いから知らないけど、色々と訳ありの仕事だったって事でしょ。それより夢加、この後どうする？」

銃がそう聞くと夢加は、うん？と眠たそうに答える。

「とにかく疲れたから眠る。約二週間ぶりの布団だからねよく眠れそうだよ。そして後二、三日過ぎたら、行こうか」

「そうだな。そんな所かな。食料品とかも買わなきゃいけないな」

二人がそうやって話していると恍会が話の途中から話しかけてきた。

「あら、もうすぐ別の所に行っちゃうんですか」

恍会の言葉に夢加が答える。ついでに、結局恍会がアジトに着いたのはお頭争奪戦が終わった後で町への帰り道の際は“あのバカさえいなければ”とブツブツと文句を言っていた。

「まあね、私達これでも旅人だからね」

夢加が答えると恍会は、そう、と呟いた。それから少しの間何か悩んでいる様だったが不意にこちらに手を伸ばしてきた。そして恍会はにっこりと笑いながら簡潔に言った。

「握手しましょう」

夢加は意外そうな顔をして恍会を見ていたがやがて恍会と同じようににっこりと笑って言った。

「うん、いいよ」

そして夢加も手を伸ばして恍会の手を握り、恍会も夢加の手を握って握手した。握手をしている時もした後も二人はお互いにもう何も喋ることは無かった。

日が傾いて空がオレンジ色に染まった頃、恍会の家の前にそいつは立っていた。

「やあ、恍会くん。帰ったみたいだね」

「シャニーさん、なんで私の家の前にいるんですか？」

恍会は自分家の前に立っていたシャニーに不思議に思って聞いた。

「ギルドの仕事に行っていた集団が帰ってきたって聞いたのね。そろそろ帰って来る頃だと思って待っていたのだよ」

「へえ、そうなんですか。それでその理由は？」

「うむ恍会くんが仕事を止めたとマスターから聞いたのでね。何故かと思ひ此処までやって来たという訳なのだが」

「ああ、そういう事ですか。そうですね、そのことなら中で話しましょうか。私は疲れてるんです」

「うむ、では、お邪魔させてもらうよ」

恍会はシャニーをテーブルに着かせた後、紅茶を二人分用意して自分も座る。

「では、理由を聞かせてくれるのだね？」

恍会はコクンと頷く。

「私、故郷に行ってみようと思うんです」

シャニーはそれを聞いて静かに目を閉じて、そうかと呟いた。

「やっと自分を見つめる気になったのだね。自分の気持ちを」

「はい、だから見てこようと思います。何であんなことをしたのか。その上で自分がどうしたいのか。何時までも下らない意地だけで自分の人生縮めるわけにもいきませんから」

聖者である父と魔族である母のハーフ。あの二人の子供。それ故に羽を出している時と消している時で寿命の縮み方が違ってしまう不安定な存在、譜閨・恍会。あの事件から今まで彼女は一度も羽を出すことなく人間として生きてきた、己の寿命を縮めてでも。ただ彼女を、己の母親を拒絶する為だけに。

「私はただ、今まで逃げただけなんです。理性では解ってるつもりなのに、信じようとしてるのに。でも……ダメなんで

す。私の未熟な感情的な部分でどうしても受け入れらなくて、だから今まで逃げてたんです。人間として生きることであの人を否定してただ事実から目を背けて拒絶してただけなんです。ほんと、情けないです自分が。気に入らない。ただそれだけでそれから逃げて拒絶して目を背けて。自分が嫌いになります」

恍会はそう言って俯いてしまった。俯いてしまった彼女をよく見ると僅かに肩が震えているのが解る。シャニーはそんな恍会に向かって、優しく微笑みながら頭を撫でてやる。

「恍会くん。そんなに自分を責めるじゃない。確かに君は今までただ逃げていただけなのかもしれない。でも君はそんな自分の欠点に誰の力を借りる訳でもなく自分の力だけで気付けたじゃないか。それだけでもすごいことなのだよ。だから自分をそんな風に言うのは止めなさい。君は君が言う様な存在ではないのだから」

恍会はそんなシャニーの言葉を聞いて顔を擦った後顔を上げた。

「シャニーさん、有難うございます。だから私は見て来ようと思います。どうしてあんなことをしたのか。そして未だに納得していない未熟な部分に決着を付けてこようと思います。それが私が前に進むために必要なことだと思うから。もう守られる必要が無い様にするために。だからシャニーさん」

恍会はそこまで話した後言葉を切る。そしてシャニーに向かって頭を下げた。

「今まで有難う御座いました」

そう言った後再び顔を上げて喋りだす。

「今度此処に帰って来るときは一人立ちが出来る様になった時です。だからもう私のお守りは、親代わりに私を守るのはもうお仕舞です。私を育ててくれて有難う御座いました」

シャニーはその恍会の言葉を聞くと優しく微笑んだ。

「そうか、ならば楽しみにしているよ、きみが、恍会が成長した姿を」

「ええ、楽しみにしてして下さい」

そして今度は二人ともお互いに笑い会った。恍会はシャニーへの感謝を、シャニーは恍会への愛情をそれぞれ笑みに込めながら。

「まあこの私の方も出掛ける予定が在ったからでむしろ丁度良かったかもしれない」

その言葉に恍会が意外そうな顔する。

「あら、シャニーさんも出掛ける予定ですか。どこか観光にでも行くんですか？」

「いや、久々の“守護者”としての仕事だがね」

「へえ、他の人を代わり使わず自分で行くなんて、珍しいことも在るんですね」

「うむ、どうやら今回は一人じゃ厳しいということで魔王の称号を持つこの私も仕方なく行ってやることにしたのだよ」

「・・・つまりもうサボった後ということね。まあいいです。それよりシャニーさん」

「ん、何かね？」

「先代の魔王ってどんな人だったんですか？」

「先代か」

その言葉を呟いたシャニーは懐かしいそうに目を細めながら遠くを見る。しかしその眼差しはそれ以外にも何か別の感情が混ざっているように恍会は感じた。

「聴きたいかね？」

シャニーが聞いてきたので恍会は、はい！と嬉しそうに返事をした。シャニーはうむうむ、呟いて喋りだした。

「そうだね、どこから話そうか。確か前の魔王は聖女だった。という所は話したのだったね。・・・うむそうだよ。君の父と同じで、そして君の父の代わりに使命を果たした人なのだがね。・・・」

そうして二人はこの後も暫らくの間外が完全に暗くなった後も喋り続けたのだった。

盗賊達が捕まってから二日後の夜の事だった。城の牢獄を抜け出して城の外を逃げて行く一団があった。

「ほらもっと速く、もっと静かに！追っ手が来る前に逃げ切るよ。誰の所為でこんなことに為ったと思ってんの！」

そう言いながら一団の指揮を執っている一人に逃げている団員のほぼ全てが同時に言った。

「あんたとお頭の所為だろ！！」

「あ、あははそうだっけ」

一団の指揮を執っていた春風は笑って誤魔化す。一団は諦めたかのように溜息を吐いたり首を振ったりしながら前に進み続ける。春風が仲間の集場所まで一団を導いていると横からある男が話しかけてきた。

「いやー、はっはっは助かったよ春風、君のお陰だな。もし君が助けてくれなかったらどうなっていたことか、想像するのも恐ろしいな。はっはっは感謝してやるぞ」

「感謝してやるぞじゃないでしょー!!」

春風はそう叫ぶと同時に、隣で喋っていた人物（お頭）にアッパーをぶち込み放物線の軌道で吹っ飛ばした。

「ぐぼ!？」

そして地面に墜落したお頭に対してさらに何度も踏みつけて攻撃を加える。

「だいたいねえ、あんたが下らない勝負なんて仕掛けてこなかったらこんなことに為らなかつたんでしょー!! それは過ぎたことだから仕方が無いとしても一団の頭が捕まるってどういう事!？人の忠告無視した挙句がこれ!!？ふざけてんじゃねえぞ!! お頭といったらリーダーでしょ!？まとめ役でしょ!？代表ですよ!!？そいつが下らない面子や意地で捕まるってどういう事さ!？ええ!！どんな手段使っても絶対に逃げ延びるのがあの状況でのあんたの立場の責任でしょうが!!！解ってんの!!？そのはずのあんたが何で捕まってんの? 何で手下に助けられてんの? 逆でしょ!! あ

あ！！？解ってんのかあ！！！返事ぐらいしたらどうなんだ！！バ
カ頭領！！！！」

ゲシ！ゲシ！ゲシ！ゲシ！ゲシ！
・ ・ ・ ・ ・

「ちよ、ちよつと待つつお!? あ、あやまぶ!! から・・・」

そんな二人に気が付いた手下が急いで止めに入った。

「ちよつ、春風さんやり過ぎ！やり過ぎです！自分のお頭ぼろ雑巾にしてどうするんですか！」

春風は手下に止められてハッ！となり踏みつけるのを止めて自分の足を退ける。

「は、春風。君はもっと俺に対する敬意の念を持ってもらいたいんじゃないのかな？」

「ふん、知ったことか。ほらさっさと立って。見つからない内にさっさと逃げるよ」

そう言いながらお頭に向かつて春風は手を伸ばし、お頭はそれに掴まって立ち上がる。そしてその一団は再び逃亡を始めるのだった。

昔々のお話

三日月が静かに浮かぶそんな夜。男女の二人組みが焚き火を間に置いて向かい合った状態で座っていた。二人は食事が入った入れ物と近くに水の入ったカップを置いて食事をしているところだった。

「どうだヤサ、不味くはないと思うが」

ヤサと呼ばれた少女は食事をしている手を一旦止めてこちらを見る
とコクンと首を縦に振った。少なくとも不味くはないらしい。その
男、瞬はよかったと言呟いて止めていた食事の手を再び進める。

二人は瞬がいた街クランを放れヤサが観光ガイドを見て興味を持っ
た幾つかの場所に近い方から順々に回って行こうということで、そ
の場所の一つに行く途中なのだった。二人の食事が終わり、後片付
けを済ませた後、観光ガイドを見ながら瞬はヤサに喋りかける。

「だけどヤサがこういうのに興味を持つなんてなあ。ちょっと驚い
たな」

ヤサは瞬の隣に来て横で字を書き始める。

＜変ですか？＞

「いや、変じゃないよ。ただ意外だなと思ってね。こういう物に興
味無いと思ってたから」

＜そうですか？自分のイメージとかよく解らないです＞

「ははは、そうだね。まあ気にすることは無いさ、所詮は個人の勝手な思い込みだしね」

瞬はそう言ってから地図を取り出して目の前に広げた。

「えーと。今はだいたいこの辺で次の場所が……うん、どうやら明日の内に着きそうだな」

瞬は地図で場所を確認する。瞬とヤサが今目指している場所とは通称壊された町跡と呼ばれているカルメアという町跡だ。その他にヤサが興味を持った所が“滅びた国イストリネア”“英雄の街メリストリネア”がある。今行こうとしている“崩壊の町跡カルメア”を合わせたその三つの場所は昔からおとぎ話などでも伝えられている“あるお話”の元になった場所なのである。

「崩壊の町跡カルメア、どんな所なんだろうな」

瞬はヤサに喋りかけながらヤサの方を見るとヤサは眠たそうに目を擦っていた。今日の見張り役は自分だった筈だからこのまま眠っても問題ない。瞬はそう判断するとヤサに今日はもう眠るように言うのだった。ヤサが眠った後、瞬は夜の見張り役をしながら昔、子供の頃聞かされたそのおとぎ話のことを思い出していた。そう、確かこんな話だった筈だ……。

“昔々ある所にとっても平和でのんびりとした町が西と東にありました。そんな平和な町にある日突然に化け物が西と東にそれぞれ一匹ずつ現れたのです。”

その化け物はどうしても凶悪で町に現れるなりたちまちにその町を滅

ばしてしまったのでした。そして化け物はそれだけでは飽き足らずさらに周りの村や町を攻撃して滅ぼし始めたのです。その化け物の強力な力に人々はなす術も無く滅ぼされていったのでした。

そして周りに滅ぼす物が無くなると今度は近い国を手当たり次第に攻撃していったのでした。国も必死に抵抗しましたが相手になりませんでしたと全部壊されてしまったのでした。

今度こそ近くに壊す物が無くなった西と東の化け物は今度はお互いに壊しあうために、東の化け物は西に、西の化け物は東に進みだしたのでした。化け物は見つけた国などを壊しながらも確実にだんだんと近付いていったのでした。その時西と東の化け物の間にあった国の人々はさあ大変このままでは中央の国も滅ぼされてしまうでしょう。しかしその国は周りの生き残った国と協力して強力な軍隊を作っていたのです。

そしてその軍隊を二つに分けて西と東にそれぞれ向かわせたのでした。

軍隊と化け物の戦いはとっても激しく、とても長く、そして厳しい戦いになりました。そしてその戦いの末、西と東の化け物はついに倒されたのでした。

しかし勝利の代償もたいへん大きかったのです。西の軍団は全滅最後に軍団長が相打ちになって化け物を倒したのでした。東は残ったのが団長一人という結果になったのでした。人々は化け物が倒されたことを喜ぶと同時に多くの人達の死を嘆き悲しんだのでした。そして犠牲になった人達のお墓と二人の団長の像を建てて祭ることにしたのでした。

そして最初に犠牲になった国を崩壊の町。最後に滅ぼされた国を滅

びた国。そしてその中央にあった国を英雄の国と名づけてその英雄の国にお墓と像は建てられて祭られることになったのでした”

存在の跡

崩壊の町跡カルメア。瞬とヤサは町の入り口前に立っていた。

「ここが崩壊の町跡カルメアか。どんな場所なんだか」

ヤサと瞬は町の中に入り周囲を見渡しながら町を歩き出す。瞬がカルメアの町跡を見て最初に思った感想はヒドイの一言だった。

「ひどい有様だな」

まず第一に無事な家が一軒も存在しない。建物の壁の崩壊に始まり上半分の消失に建物が在ったのでは？と思われる場所に深く抉った様な跡が地面に残っているだけだったり、全ての建物が何らかの形で壊れている。他にも地面に残る巨大な抉った様な跡などまるで昔の出来事の凄まじさを表している様だ。

たった一匹でこれ程のことを可能としたその化け物とはいったいどんな姿をしていたのだろうか。他の滅ばされた町や国も全てこの様な、いや、もしかしたらもっとヒドイ有様だったのかもしれない。もしそうならその存在を化け物と呼んだのも解る気がする。瞬はそこまで考えてヤサはどうしているだろうとチラリとヤサの方を見つめる。

ヤサはどこか脅えた様な顔で町のあちらこちらをキョロキョロと見渡しながら歩いていた。

「ヤサ？」

瞬がそんな姿を不思議思い声をかける。するとヤサは驚いた様にビクリと体を震わせて何処か脅えた顔でこちらを振り向いた。瞬は優しく話しかける。

「大丈夫か？」

するとヤサはハッとした顔になってコクリと首を前に振った。瞬はそうか、なら良かったと言ったきりそのまま隣で一緒に町を歩く。二人はそのまま暫らく二人で歩いていたが町のある状態を見て瞬とヤサは足を止めることになる。

「なんだ・・・これ。町が抉り取られてる？」

二人が足を止めた状態とは、町が途中からその先が全て消えていたのだ。そしてその消えた町の代わりに残ったのは先が見渡しきれない巨大なクレーター とそこに生えた草達だ。

「なるほど、つまりこの町が唯一残った西の崩壊の町って訳か」

いったい何をすればここまでのことになるのか。一万人以上の上位実力者による合同攻撃、またそれこそ在り得ない様な巨大な核爆弾でも使ぐらいのことをしない限りこれほどまでの有様にはなら無いだろう。瞬が町の跡を見ながら放心していると不意に横に立っていたヤサが走り出した。

「ヤサ？どうしたんだ！？」

瞬が声を掛けるがヤサは振り返ることもせず真っ直ぐに草の生えたクレーターの上を走っていってしまう。

「くそっ！」

瞬は一言呟いてそのまま走ってヤサを追いかけ始めた。ヤサは草木が生い茂る道無き道をただひたすらに走り続ける。瞬もヤサを追いかけて走り続けるが地面と視界が悪い所為で追いつけない。瞬はせめて前にいるヤサを見失わない様にと追いかけて続けた結果、草木の空間を抜けて道に出た。と思ったらその先に今度は木が生い茂った森の入り口が瞬の目の前に存在していた。そしてヤサがその森に入っていくのが見える。

「ヤサ！！」

瞬は見失ってたまるかとその森の中に駆けて行くのであった。

この町に来て、最初に二つ感じるものがあった。その一つ目は懐かしいという感情。知らない筈の町それなのに感じるこの気持ち。自分はこの町を知っている。そしてもう一つの感情、それをヤサの感覚で表すのなら“痛み”だった。

そう、“痛い”のだ、この町に来てから。胸の奥の方から込上げて来る何とも言えない様な形容し難い、痛み。その痛みが町にいればいるほど、進めば進むほどその痛みはどんどん強くなっていき、ヤサは我慢出来ずにその場を逃げ出した。この感覚が辛いから。この感情が苦しいから。この感じが無くなる場所へ。この感じとは違う暖かい懐かしさを求めて。彼女は道無き道を己が感じるままにただひたすらに走り続ける。

ただ走り、そして走り、とにかく走り、そしてたどり着く、その暖かい場所に。そこは半径十メートルほどの円形の空間だった。同じ

高さの草が同じ感覚で規則正しく生えているある意味奇妙な空間。
そしてその空間の中心に立つたった一本の巨大な樹。

自分はこの場所を知っている。ヤサは感じた。この空気、この感覚、
そしてこの温もり、懐かしい。嫌なこと、哀しいこと、辛いことが
あってもどうしても我慢出来なくなったらそんな時、いつも此処に来て
泣いていた。この樹の根元でたった一人で。

ヤサは中心の巨樹に近寄りそして手を伸ばす。

この場所は何時も温かくて、そしてまた明日頑張ろうって気持ちに
なれた。

そしてヤサはその巨樹を両手で抱きしめる。

もし、貴方に感情が在るのなら、まだこんな私を慰めてくれるのだ
ろうか。また私を支えてくれるのだろうか。・・・・・・解らない。

そして、少女はその思いの中静かに眠りに付いた。懐かしくそして
温かい温もりを感じながら。

それから暫らく時間が経ち、瞬がその空間に足を踏み入れた。ただ
草だけがやけに規則正しく生えていて他には何も無い円形の空間。
瞬はその中心に眠っている少女ヤサを見つける。

「・・・・・・ハァ。まったく、何やってんだか」

瞬は呟きながら心地良さそうに眠ってるヤサに近付いて行く途中ふ
と何かに気が付いたかのように目線を上に向けて立ち止まった。

「・・・気のせいかな？」

何か巨大な木みたいのが一瞬見えた気がしたがどうやら勘違いだった様だ。瞬はそう思いヤサに近付くとそのままヤサを背負い後ろを向いて来た道に戻りだした。

「夜になる前に抜け出せればいいんだけどな」

そしたらこの町跡の近くに町があったはずだ。そこで宿を取るとしよう。瞬はそう決めるとこの森を抜け出すためにヤサを背負ったまま歩き出すのだった。

待ち人。

沢山の四角い形の石が並んで建っている。そんな場所に一人の女性が周りよりも大きな石の上に座っていた。女性はある人をそこに座って待っていた。もうどの位そうして座っていたのかも解らなくなる位長い間、無限にも感じられるほどの時の中、ただ座り続けることで。

そんな時間の中、女性は微かだが“何か”を感じてその顔を上げた。そしてそのまま顔を上げてジッとしてたがその内その顔に微かだが笑みを作り微かな声で呟いた。それは誰かの名前だった。その名を呟いた後、女性はまた元の様に顔を下げ、再びその誰かを待ち続けるのだった。

朝、瞬は起き上がり窓のカーテンを開く。窓から朝日が入ってきて一日の始まりをその身を感じた。

ここは英雄の街メリストネリア、リムノリカ国の首都にあたる街だ。

瞬とヤサは昨日の夕方ごろこの街に着き今日の所は宿を取り、この街の観光は明日以降にしようということになって今を迎えているのだ。この街は英雄達の墓や像、そして英雄達に関する物などを展示している英雄館という所がある。ついでだが他にも英雄まんじゅうや英雄せんべいなどといったお土産まであったりその頃の話に基づいたドラマや絵本などが作られたのもこの街だったりする。まあ色々な意味でここは英雄の街だと言えるだろう。

瞬はカーテンを開けた後、部屋の外に出て下のロビーに下りる。そこでこの街の地図を見ながらどの順番で回ろうかと思案している。とヤサもロビーに下りてきてこちらにお辞儀をして挨拶をしてきた。

「ああ、お早う。今どの順番で見て回ろうか考えていたんだけどヤサはどうしたい？」

瞬が聞くとヤサは紙に字を書いてこちらに見せる。

＜今日は一人で回りたいのですが良いでしょうか＞

「個人行動か。別に良いと思が、何故いちいち俺に許可を取る？」

あいからわず丁寧な・・・言い方？だ。ヤサはそれを聞くと何処かホッとした感じで＜有難う御座います＞と書いて再びお辞儀をしてきた。

「いや、お礼されても困るんだけどね」

ほんと、丁寧な奴だ。瞬は密かにそんなことを思った。

「まあいいか。そうと決まれば朝食だ。一日は挨拶と朝食から始るんだからな。しっかり食べて気楽に見てこようぜ」

そうしてヤサと瞬は食事場へと移動してその後それぞれで街の観光を始めるのであった。

ヤサが宿を出たのはお昼を過ぎてからだった。何故朝ではなくお昼になったかというそれは単に眠かったから二度寝をしたからである。起きた時にはすでに昼頃で当然の如く瞬はすでに出た後であった。ヤサは顔を洗った後お昼を食べてヤサはやつと外に出たのであった。

ヤサは外に出て伸びをする。そういえば吸血族は日光に弱いだとかニンニクや十字架が苦手だとか水にどーたらなどさまざま言い伝えが外の世界では在ったりするが、実際の所そんなのはただの嘘っぱちだ。

自分は朝に弱かったりよく眠ったりするがそれはただの個性の一つでしかない。一族とは何の関係も無いことだ。まあ、血を吸ってエネルギーにするというのも出来るがそれすら食事の代わり程度でしかない。まあ半端者の自分では説得力が薄いが。

そう、自分は吸血族と人とのハーフ。最近思い出したことの一つである。

（それにしても瞬さん。本当に朝早く出て行ってしまいました。最近野宿続きだったのに疲れてないんでしょうか。今回ばかりはあのペースには合わせ切れませんね、別行動で正解です）

ヤサが思う内容は今回の別行動の理由。その最大の理由が、眠いからっ！！である。瞬の早寝早起きは、まあ健康的だし立派だとも思うが決して真似しようだとか憧れたりとかは出来ないヤサなのであった。

まあ微みよーうに罪悪感みたいなものは感じていたりするのだが・・・。

そんなことを考えている内にヤサは今回の目的地にたどり着いた。その目的地の名は“英雄館”。たしか過去の英雄達に關係する物の展示やその事件の悲惨さを伝える為に建てられた場所だったはずだ。ヤサは暫らくその建物の入り口を見ていたが歩き出し、中に入って行くのだった。

「はあはあはあ。現在二千段目、くそ、こりやロープウェイに乗った方が良かったな」

瞬は右側に立っている立札を見て呟いた。瞬は最初に英雄館に行きその後に英雄達が眠る墓場に行くことにして今、行く途中だ。墓場に行くには全六千段ある階段かロープウェイに乗って行く二種類の方法があるが瞬は最初はロープウェイに乗ろうかと思ったが何となくで六千段というとてもない長さを持つ階段坂を登ることにした・・・が今になって思いつきり！後悔していたりする。

今現在二千段。ここまで来てしまうと今更戻る事も出来ず瞬は仕方なしにまた先へと上り続けるのであった。

そういえば英雄館を見てきたが大した物はあまり置いていなかった。展示されていた多くは剣等といった武器類や肉片や写真で瞬としては興味が沸く物では無かった。どちらかというと本人達が大切にしていた物の方が瞬にとって退屈しないですんでいた時間だった。そしてその中でも最も気になった展示品が、ある団長の持ち物だった。

それは百を超え、そのほとんどが未開封な手紙の束。後に読む気があったのか無かったのか。今となっては解るはずも無い。相打ちになった英雄。名前は確か・・・。

空が赤く染まり始めた頃、瞬はやっと頂上の墓場にたどり着いた。

「はあ、はあ………到着」

瞬は息を切らせながらほつつつとウンザリした感じで呟いた。

瞬は息を整えてから周りを見てみるとなるほど、確かに見渡し切れないほどの何百万という英雄達の墓が並んでる。その墓達の最前列に二つの大きな墓が並んで建っている。おそらくそれが英雄達の二人の団長の物なのだろう瞬はその墓に地価髄て行く。すると上から声を掛けてくる物がいた。

「こんにちは。こんな所に来るなんて。観光旅行かな？」

瞬は声のする方に視線を向けてみると一人の女性が墓の上に座っていた。

「墓の上に座ってお喋りか。随分と失礼なことをしてると思わないか？」

すると女性は少し笑みを浮かべながら喋る。

「別にいいじゃない。私のために作られた物よ？私が良いと思えばどうしようが勝手でしょ。それに使われないよりも誰かに使われた方がこの墓も喜ぶんじゃないかしら」

「ちっ、やっぱりか」

瞬は女性の話を聞いて呟いた。

「君の名は？」

瞬がそう聞くと女性は下を指差した。どうやら墓を見ろという事らしい。瞬はしゃがみ込んでその女性の名を確認する。そしてその上でさらに質問をする。

「此処には何時から座ってるんだ？」

瞬がそう聞いた。

「さあ、年を数えるのもめんどくさくなったから」

瞬は続けて聞く。

「なんで此処に？」

「目的の為に、色々待つ必要があったから。それには此処にいるのがベストだと思ってね」

「三千年もの時間をかけてもか？理解できないな」

「あはは、そうだね結局私が何をする訳でもないしね。きっと私は何も出来ずに見てるだけ。そして何かをするのは“君達”の方。まあ、貴方の方も何も出来ずに終わるかもしれないけどね。そして、彼女がこの場所に興味を持ったということは、それがあと少しだという証明……。この街を一つの鍵として色々と思い出すかもね」

こいつは彼女のことについて何か知っている。瞬はその女性の言葉に憤りを感じずには居られなかった。

「エリエル・ヤサ・シルエイ。おまえは何を知っている？」
「あはは、いきなりフルネームで呼ぶんだね。そんなにその名前が誰のものか確認したいの？まあ、いいけどね。安心してよ。さっきも行ったはずよ？私は何もしない。ただ、残した結果と結末を確かめたいだけ……。ただそれだけよ」

その女性エリエル・ヤサ・シルエイは自分の墓の上で座っていた状態からヨイショと立ち上がりさらに言葉を続ける。

「普段だったら誰か着た所で空に浮かんで隠れるだけだね。たまに君みたいに見える人もいるしね。本当は“実体化”してでも姿を見せようか思ってたんだけど、手間が省けたよ。ああ、そうそう。あの子には私のことは言っちゃだめだからね？」

瞬はこれ以上こいつと話しても無駄だと判断し、後ろを向いて歩き出そうとする。

「あらあら、帰っちゃうんですか？この時間のロープウェイは景色良いですよ。歩くよりもそちらの方をお勧めします」

「ウッ・・・」

（くそ、見られてたのか）

瞬はちよつとばかり恥ずかしく感じてつい強めに言い返してしまふ。

「そんなに解ってる！」

あははとエリエルの笑い声を聞きながら瞬はロープウェイ乗り場に向かってその場を去るのだった。

英雄館の帰り道。ヤサは帰りに英雄の像を見ようと思い、そこに向かっていた。

英雄館で見たあの手紙とそのあて先人の名、エリエル・ヤサ・シルエイ。それらを見てから頭が痛い。月並だがこれが思い出しそうな時に感じる痛みというやつなのだろうか。だが、頭痛以外にこう、なんと言うのか。胸に変な嫌な感じがするのだ。この感じはいったい何なのだろうとヤサが考えて英雄の像の所まで歩いていくと、その下で座ってボクとしている瞬を見つけた。

ヤサが横に立つても気が付かないので肩を叩いてやって初めてこちらに気が付いた。

「ん？ ああ、ヤサ」

ヤサは笑いながら瞬に手を差し伸べた。瞬は、ありがとうと言いながらその手を掴もうとしたその時だった。ヤサの耳に何かキインと金属製の鎖みたいのが千切れる音がした。何だろうと瞬の手を掴みながら左右を見ているが何も無い。聞き間違いかなと判断して瞬と一緒に宿に帰ろうとして後ろを向いた瞬間だった。それがヤサの目に入ったのは。

それは目の前に存在する沢山の人という命。その命を見た瞬間。ヤサの鼓動がドクンと飛び跳ねる。ドクンドクンとその鼓動はどんどん大きく、そして早くなっていく。そしてそれに比例して大きくなっていく頭痛と胸のイヤな感じ。ヤサはそうやって自分が立ち止まっていることも気が付かずにいた。そのヤサに不思議に思った瞬が話しかけた。

「ヤサ？」

するとヤサはハッとなって回りを見渡す。

「どうかしたのか？」

瞬がそう聞くとヤサは、なんでもないと書かれた紙を見せてまた歩き出して行ってしまった。

その姿を見た瞬は先程のエリエルの話を自然と思い出していた。

「この街に興味を持ったということは、それがもう直ぐだという証明。そしてこの街を鍵に色々と・・・か」

彼女の待つ結果とはいったい何なのだろうか。瞬はわかるはずもない問いを抱えながら夕焼けの下、ヤサに駆け足で付いて行くのだった。

自虐の秘密 恨みと疑問 (前書き)

“それ”は気が付いたらそこにいた。何時からそこに存在していたのか、なぜ自分がここにいるか。そのことは“それ”自信にも解らずただそこにいるだけ。水の中に漂い、自分の一部から出ている細長い何かから栄養をもらい、たとえるならTVの砂嵐の様な音の中それはそこに存在していた。

やがてそれは“それ”はその空間の外から聞こえる音に意味があることに気が付く。“それ”はその音を聞いている内にその意味を理解して外の世界を知った。

そこは感情という物を軽蔑しあつてはならぬ物として扱う世界。

そこは合理性のみを追求し変わることを何よりも恐れる無情で臆病な世界。

そして“それ”は解っていた。本来なら自分もその世界に行くことになるはずだったのだろうと。

しかし“それ”は知っていた、自分の体の異常に。生身の体に刻み込まれているシステム自信に起きたバグ。生まれつきの特性。決っていた死。もはや終わりがけた個体。“それ”は今の現状を“仕方ない”と判断した。

そう、それは“仕方ない”ことなのだ。これは自分が初めてそこに存在した時から、最初から決っていた“仕方ない”出来事。どうすることも出来ないのだ。

そんな時だった。そこにあるもう一つの存在を感じたのは。その存

在は自分に良く似ていた。しかし根本的な部分で何かが違う。そんな存在。そして何よりも違う所がその存在は体に異常を持っていないということだった。

そのことを確認した時だった、“それ”にその感情が芽生えたのは。そして何よりも“それ”はその感情に逆らう手段を持っていなかった。

その感情のままに自分の体の一部その存在に向けて一生懸命うごかして、その感情のままにその存在を自分の体の一部で掴む。そして“それ”は強く望んだ。ただ“生きたいと”・・・・・・。

自虐の秘密 恨みと疑問

ここはエミナス王国の城下町ジャタル。その街のある宿屋のある一室の前。そこで銃は立っていた。

“外出中”のように書かれたプレートが目の中のドアに架かっている。銃はドアの前に立ちながら溜め息を一つ吐いた。

「夢加のやつ、今日もか」

銃は思う。最近夢加の様子が少し変だと。一人で考え込んだり、今日のように朝早く出て行って数日帰って来なかったり、妙に仕事熱心だ。あの仕事している姿を見るとまるで何かを考えないようにしている印象を受ける。どうせろくに休まずに今日も仕事三昧でいるのだろう心配するなという方が無理というものだ。

「どうせ聞いても答えてくれないんだろうなあ……。何やってんだか」

銃はそう言いながら部屋に戻って行くのだった。

「はあはあはあ……。あのガキどこに行きやがった。撒いたのか？ ああくそっ！ 解りやしねえ」

ここはジャタルの近くにある森の中。その森の中を男が一人、息を切らせながら走っていた。

「ちくしょう。まともに戦い合えばあんなガキ。覚えてやがれよ絶対に思い知らせてやるからな」

口惜しそうに顔を歪めながらとにかく走る。だがそれなりに儲けはした。最後の仕事はあのガキに邪魔されたものの手に入れた物を一通り高く売ればかなりの額にならだろう。これで暫らくはまた遊んで暮せる。

男はへへへと思わず笑ってしまう。その笑った瞬間、一瞬だが周囲に対する警戒を怠ってしまった。

それは僅かな時間でしかなかったがその一瞬が男に確實過ぎるをどの確かな隙を作ってしまう。男が気付いた時にはすでに視界はグラグラと揺れ足もすでに力が抜けて体が地面に倒れていくのが解る。男はしまったと頭の片隅で思いながらそのまま気絶した。

夢加は暫らくの間、男の様子を窺っていたが気を失っていると判断すると男に近づいてそのまま担ぎ上げる。しかし男を支えきれず夢加はそのまま倒れこんでしまう。

「いったあ。ああもう、これは思った以上に酷いね」

上に乗っかっている男を蹴り退かして夢加は立ち上がった。今回の仕事は各地で頻発している窃盗犯を捕まえることだ。最初は正面からぶつかって行ったが最近無理を重ねていたせいで疲れが溜まって体がうまく動かず失敗。自分にとって都合の良い時間とタイミングと場所に相手がはまるのをジッと待ち続けて今にいたるのだ。

「・・・これ以上やったら本当に倒れるかも。別にお金に困ってる訳じゃ無いからここまで働くことも無いんだけどね。はは、我ながらバカみたいだよ」

でも、それでも行動している間はそのことだけを考えているだけで良いから楽だ。なぜなら、自分のことを思わないですむから。自分のやって来たことを思い出さないですむから。

思い出せば出すほど、どうしても思ってしまう。

自分がなんて愚かしく、そしてなんてミジメナンドロウ・・・と。

夢加は気合を入れてもう一度男を担ぎ上げた。ふらつきながらも今度は倒れることなく歩き出す。夢加は何となく上を向いてみると今日も月が良く見えた。夢加は月を見ながら一人呟く。

「もう少し・・・か。もう十分楽しんだよね」

そして夢加は一人森の中を歩いて行くのだった。

視界が回る如何したのだろう、何かの病気だろうか。

体が重い、何故だろう。荷物なんて持っていただろうか。

そして妙に足がふらつく。足に怪我なんてしていただろうか。

「ああ、そうか」

夢加はフラフラと歩きながら呟いた。前方には自分が泊まっている宿屋が見える。そこまで行けばゆっくり休める頑張ろう。そう思いながら一歩ずつゆっくりとだが夢加は宿屋との距離を詰めていく。

「私・・・疲れてるんだ」

訴う呟いたとたん、夢加は自分の足から力が抜けてそのまま地面に倒れこんでしまった。あともう少しで着いたのに、残念だ。

夢加は遠のく意識の中で一言だけ呟いた。

「疲れたなあ」

目を覚まして最初に見たのは何処だか解らりもしない見覚えが無い知らない部屋。すぐ近くには窓があり、それでもこの部屋が真っ暗な状況を見るとどうやら今は夜らしい。

夢加はそのことを確認すると直ぐ近くで椅子に座ってこちらを見ている一人の人物に話しかけた。

「銃、私を運んだのはあなた？」

椅子に座っていた銃は暗闇の中でコクリと頷く。

「まあね、入り口で見つけたときは驚きを通り越して呆れたよ。バカだろおまえ。それに苦労したんだよ。わざわざ担いで病院まで運んだんだから」

夢加は銃の話を聞きながら溜め息を一つ吐く。

「余計なことを。ほっといってくればよかったのに」

銃はその言葉にイラっとするが表情には出さず呆れた口調で話す。

「あのなあ、ここは有り難うだろ。助けて貰っというて失礼とは思わないのかお前は」

「ん？ ああそうだね。有り難う銃」

「あ、ああどういたしまして。珍しいな夢加が有り難うなんて」

何かが変だ。普段の夢加の応答のパターンじゃない。なぜだか妙に雰囲気静かというか落ち着いてるというか、どこか暗い雰囲気だ。これはもはや考え込んでいるというレベルではない。仕事中に何かあったのだろうか。銃は夢加に如何したのか聞こうと口を開き掛けるが先に夢加が喋りかけて来たので聞くタイミングを失ってしまう。

「どの位寝てた？」

「寝てた日にち？ そうだな、二日後の夜に成る位」

銃が質問に答えると夢加はふうんと呟いて今度はそのまま黙ってしまった。

やはりやり難い。伝えておきたいこともあるのにこの重い空気の中では話も切り出し難い。しかし雰囲気がそれっぽくなかったので話しませんでしたですむ問題ではないのも確か。銃は仕方なしに重い雰囲気の中、口を開いた。

「夢加、起きたばかりで悪いとは思いますが明日この街を出るぞ」

夢加はチラリとこちらを見るだけでそれ以外の反応はせずに言葉を返してきた。

「出る、この街を・・・何で？」

「戦況が変わった。リサ・ウルス国がこの街に攻めて来るのが思ったよりも早くなりそうだ」

「そう、またあの国。この国も下らない正義とやらに潰される訳か」
「まあな、元々潰されるのは時間の問題だったんだ。それが予想外にこの国が情けなかったただけだ。もう何時攻めてきても可笑しくない。まあ二日も寝てたんだから体力は大丈夫だろ？いきなりで悪いと思うが朝が来たら宿屋の荷物まとめてさっさとこの街から出るでしょう」

銃が言い終えても夢加の反応は無い。銃が辛抱強く返事を待っているとやっと夢加が返事を返してきた。だがしかし。その内容は銃が期待していた内容とは違うものだった。

「逃げるなら一人で逃げて。私はもう少しだけこの街に残るから」

銃は一瞬、夢加が言った意味が解らなかった。残る？何を言っているのだろうか。この状況で残る意味は？なぜそんなことを言えるのか。ただの我がままでこんな滅茶苦茶なことを言う奴じゃなかったはずだが。

「理由を聞いていいか？」

訳が解らず銃が理由を聞いても夢加は左右に首を振って拒絶。そんな夢加の行為に銃は思わず大きな声を出してしまう。

「何でだよっ！ただ理由を聞いてるだけだろ！？何で話せない！！」
すると夢加はここに来てやっと反応を示した。夢加は薄っすらと笑ってこちらに向いてきたのだ。

「ねえ、銃。昔、聞いたことが在ったよね、銃の昔のこと。今、私が銃の昔のことを聞きたいって言ったら貴方は本当のことを私に話せるの？」

「・・・どういうことだよ。だいたいそれとこれとじゃ話が違うだろ」

「違くないよ。解るでしょ？あなたも似たようなものでしょうし。私は誰にも話す気は無いし知られたくもない。特に君だけには絶対。だからさ、逃げればいいよ。しょせん私の我がままだから。だいたい帰って来る保証も無いんだから待つ方がバカだね」

そして夢加は言うことは言ったとばかりにベッドから下りて部屋のドアに向かって歩き出す。

「じゃあね。さっさと荷物纏めなよ」

「おい夢加。ちょっと待てっ！」

夢加はそんな銃の声も無視して部屋を出て行ってしまった。一人病室に残された銃。力づくで止めようとすれば出来なかった訳じゃない。しかしなぜだか止めてはいけない気がしたのだ。きっと今回の夢加の出来事には自分は関わるべきではないと。

「くそ！」

銃はそう言いながら椅子から立ち上がり窓を開けて顔を出し呟いた。

「お前を見捨てて一人で逃げろ？出来るわけないじゃないか」

そう言って外を眺めていると一気に眠気が襲って来る。ずっと寝ないで夢加を診ていた所為か凄く眠い。さっさと宿屋まで戻って寝るとしよう。銃はそう決めると病室を出て宿屋に向かいだす。

「くそうフラフラする。今度は僕の方が途中で倒れそうだよ」

まあ何とかなるだろう。銃はふらつきながら歩くのであった。

最初はただ怪しいだけだった。体も持たないよく解らない意味不明なやつ。それが亜魔ノ赤にとって夢加の最初印象だった。夢加が自分の体を持っていると聞いた時はそれにさらに変な奴という印象が強まった。

普段の生活の中でも決して自分からは行動したがらず、ただ見て話しているだけ。私が変わろうか？と聞いた時も色々と理由を付けて断っていた。何時も何でだろう？って不思議に思っていた。

その内体がい物にならなくなるんじゃないの？と聞いた時はあなたの経験は同時に自分の経験でもあるんだと解るような解らないような説明も受けた事もある。どんな奴なのか、何を考えているのか、色々と解らない奴だった。

何時からかは解らない。おそらく少しずつゆっくりと。気が付いたら私はそんなよく解らない夢加のことを好きになっていたんだ。

姿の見えない二人のおしゃべり。私と過ごす内に偶にだけど私の体を使って二人で軽いボール遊びとかもやるようになっていった。精神世界とやらで私の姿を借りてお喋りとかもしたり。そいつはいつの間にか私にとってもう一人の家族に成っていたんだ。感覚的に言うなら夢加のほうがお姉さんって感じで。

でも夢加にとってはそれは違ったみたい。

夢加は私の精神を隔離した空間を作ってそこに閉じ込めた。閉じ込

める少し前、夢加が言っていた言葉がある。その言葉とは「そっか、あなたなら私を殺すことが出来るのか」という物だった。ちよつとした何時ものお喋り。そんなお喋りから出てきた事実。でも私はそんな言葉は直ぐに忘れてしまっていた。

やろうと思えば気が付かれない様にやるのも可能らしい。でも私はそんなことを夢加がやるとは思っていなかったしやろうとも思っていなかった。

でも夢加にとって私はどう映っていたんだろう・・・解らない。

色々と疑問の中、確かに言える一つの言葉。

今はただ、奴が難い。

二人だけの戦闘

赤が目を開けるとそこは自分がよく知る村が見渡せるある崖の上だった。

「ここは、ルーア村？そんなことが在る訳・・・」

「目が覚めたみたいだね。二人の世界へようこそ」

赤が声の方向に振り向くとそこには自分と同じ姿をした“あいつ”が立っていた。

「夢加。なるほど、つまり準備はもう出来ていると？律儀なものだね。待ってなんかいないでさっさと消しちゃえばよかったのに」

「ハハハ、やる必要性がないでしょ、そんなの」

その言葉に赤は気に入らないといった表情で舌打ちを一つする。

「ひ弱なへたれニートめ。なめるなよ」

「だったらなめられないだけの証明をして見せたら？まあ、出来ればの話だけどね」

そう言って夢加は赤に向かって来てみると手招きをしてみせる。しかしその時にはすでに目の前に赤の姿は無く、代わりに後ろから声が聞こえた。

「ああ、言われなくてもその積りだよ」

夢加が後ろを振り向くとそこにはすでに腕を振り上げて構えている

赤の姿があった。そして気合を入れながらそのまま腕を振り下ろす。

夢加はそれを片足を支点に円を描くように足を回して体の向きを素早く変えることでそれを回避。手が通過した後を見ると触れていないはずの地面が何かに切られたかの様な跡が付いているのが見えた。

「気の刃か。なるほど、さすがに以前よりも錬度が上がっているみたいだね。距離は推測約90cm強って所か」

今度は斜め上に振り上げられた腕を避けながら夢加は落ち着いた様子で自らの推測を口に出す。

そんな夢加に対して赤は無言で前方に跳んで夢加の懐に入り込みそのまま腹に向かって拳を振り上げる。夢加はそれを避けきれずに手で防いだ。

見えていない訳では無いだろう。おそらくこちらが仕掛けてくるタイミングも全て把握できているに違いない。だがしかし、単純に体が追い付いていかないといった所か。

腹部に打撃を当てた後、膝で打ち上げたてさらに先程の拳と同じ所に連続で蹴りを加えいく。

手で防がれてはいるがダメージは通っている筈だから問題ない。

赤はラストに掌底を叩きつけて夢加を吹っ飛ばす。夢加は地面を跳ねながら転がった。

地面にうつ伏せで倒れている夢加を見て赤は気に入らないといった雰囲気です。舌打ちをして夢加に言葉を吐き捨てる。

「あんた舐めてんの？元々貧弱なあんたが肉弾戦とか。ふざけていると思えないんだけど？」

すると夢加が突然倒れている状態で笑い出した。そしてゆっくりと立ち上がりながら喋る。

「くつくつく。あはははは。そうだね、さすがにふざけ過ぎたかな。じゃあ、いい加減失礼な手加減は止めて。少しだけ真面目にやろうか」

そうして構える夢加。

「また肉弾戦？ いい加減、嬲り殺すよ？」

「ふふ、この場所がどういう場所なのか。それを教えてあげる」「まずはその口を黙らせる！」

赤は全力で夢加に向かって走り拳を突き出す。見えていても反応出来ないのなら意味は無い。制限を外すこともせずにこれを避け切ることは出来ないだろう。

赤が当たったと思った次の瞬間。不意に夢加の姿が霞んだと思ったら何時の間にかこちらが突き出した拳を夢加に手首の部分を掴まれることで突きが受け止められていた。

「なっ！」

「一つ言っておこう。さすがにこの世界にまでは私の制限は届かない」

そう言った後、夢加は赤の顔面をホールドしてそのまま地面に叩き付けた。そして素早く足ですくい上げられたと思った直後わき腹に強い衝撃がきて赤は吹っ飛び地面を転がる。

「ごほっごほっ・・・くそ」

咳き込みながら立ち上がるとすぐさま夢加に襲い掛かる。

左右の拳と足を連続で繰り出していくがその全てが防がれたり受け流されたりして当たらない。夢加の動きが先程とは比べ物にならないほど早くなっているのだ。いや、それだけじゃない。先程こちらの攻撃を軽々と受け止めたことを考えると速度だけじゃなく身体能力が全般的に上がっているとみていいだろう。いったいどういう仕組みになっているのだろうか。

赤がそんなことを思っていると夢加が赤の拳を再び受け止め、そのまま自分の方へその腕を退きながら思いつきり振りかぶったもう一つの空いてる手で殴り飛ばした。

向かう先はルーア村上空。赤は地面も無い崖の向こう側へと吹っ飛ばされながらも気の力で落ちた時のショックを和らげようと体勢を整えていると、こちらを吹き飛ばした夢加がなんと今度は自ら崖の上からこちらの方に向かって跳んできたのだ。

「なっ!？」

「でりゃあぁっ!!」

そして気合と一緒に落ちながらもこちらの蹴りを繰り出して赤を空中から地面へと叩き落としたのだ。

赤と夢加はそのまま崖下のルーア村へと落ちていったのであった。

ドオン!! 夢加は凄まじい勢いで家の屋根から一気に一番下まで落っこちたが煙がなくなる頃には無傷の状態で立ち上った。

別に無傷だった訳ではない。倒れている間に治したのだ。

この世界は精神世界。つまりは思い込みの世界なのだ。自分は速い
と思い込めば速くなるし硬いと思えば硬くなる。そんな世界なのだ。
そしてこの世界においての“普段の状況”というのは自分はこんな
奴だという無意識のうちにやっている自己評価がそれにあたる。

「ハハハ……。痛いなあ」

夢加は呟きながら辺りの様子を窺う。

・・・“いる”。すでに赤の方はこちらを捉えている様だ。赤の方
も落ちた時のダメージはかなりのものだった筈だ。それがここまで
早く動けるようになり、さらには既に隠れて襲い掛かるタイミング
を計っている状態。思ったよりも早くこの空間の仕組みに気が付い
て慣れはじめているみたいだ。

「クッククク。まったく、現実主義者の私にとっては辛い空間だね。
法則も相手側だし。……。だけどまだまだ甘いね！」

夢加は振り向きながら拳を振ると、その手に確かな手応えを感じる。
見ると赤が拳に当たって向こう側へと吹っ飛んでいった。

壁を壊しながら赤は空中で体勢を整えて滑りながらも着地。そして
球状の気を飛ばしてその気玉が当たる前に破裂。そこから視界が殆
ど無くなるほどの煙が辺りに飛び散る。

しかし夢加は視界が利かない煙幕の中にも関わらず視界以外の所で
赤を捉えた。

煙の中を疾走して今度は夢加が赤に襲い掛かかり視界零の中での近
距離戦闘が始まる。

その戦闘での勝者は夢加といっているだろう。赤が再び吹っ飛ばされ家の外壁を突き破って外に飛び出てしまう。

「知識に無い自分の知らない経験を反射的に引き出したのは良いんだけどね……。でも忘れちゃ困るのがそれは私の“経験”だということなんだよね。自分にとっての経験と夢加にとっての経験。いくら共有したとしても、それらには自然と“差”が生まれるんだ。“夢加の経験”を使って勝負した所で勝てるわけがないんだよ」

夢加は喋りながらも赤に向かってゆっくりと歩いて行く。家の真ん中辺りに来た所で赤が新たな行動を起こした。

「くそっ!!」

赤は腕を真横に構えて大きなモーションでこちらに向かって振ろうとしている。

おそらく気の刃でこちらに遠くから切りかかる積もりだろう。確かに牽制には効果的だ。そして何より此処は家の中だ。つまり切られれば家ごと崩れかねない状況なのだ。

「潰れろ」

赤は構えた手をこちらに向かって思いっきり振ってきた。夢加は体を低くすることで避けるがまだ終わったわけじゃない。先程の攻撃で切られて上空に上がった家の上半分がさらに何度も切られることで数を増やした危険物が夢加に降り注いできたのだ。

ドオンッ!! 先程夢加が墜落した音よりもさらに大きく激しい墜落音が粉塵と共に鳴り響いたのだった。

潰れてガレキとなった家の前。そのガレキの上を見ながら赤は片手で頭を抑えながらしゃがみ込んでいた。

「はあ、はあ、はあ・・・何で」

赤の視線の先、ガレキの上に“それ”は静かに座っていた。

「何で、何で平気なんだよ。在り得ないんだよ!!」

そうやって叫ぶ赤を見つめながら“それ”は静かに微笑んだ。

「如何なってるんだよお前!! なに人の世界で好き勝手やってるんだよ、ふざけんな!! 世界の法則無視してんじゃねえ!! 嘘つきやがって、気が付かれないとでも思ったか!? 此处は“私の世界”だ!!」

気が付いた切欠は崖からけり落とされた後の自分で傷を治した時だ。

別に何処が不自然だとかではない。まあ、確かに風景が小さい頃の物だとか気が付いてみればといった物は幾つもあった訳だが・・・。

ただ、感じたのだ。言うなれば世界に込められた感情。それかこの世界の元になっている何かといった所か。

やり方さえ解れば後は簡単だ。その元を探ってみたら彼女の感情が一切見つからなかった。それだけだ。

しかし、だからこそ在り得ないのだ。イメージの実現化はあくまでもその精神世界の王様。

つまりは本来この世界では自分しか出来ない筈の反則技。王である

自分でも無い限り体が潰れた状態からの復活なんて出来るはずが無いのだ。

だが今、それが目の前で起きている。もし本来在り得ないはずのそれが起こるとしたら理由はたった一つ。単純明快。

ここは精神世界だ。どんな理由を付けた所でそれだけは変わらない。つまり在り得るとしたらそれこそ“生物離れ”した在り得ないほどの精神力で世界ごと従わせること。そして、“それ”は確かにその在り得ないことを実現して見せたのだ。

「ふふふ、辛そうだね。まだなれ初めの癖に“命令”なんてするからだよ。いくら貴方の世界とはいえ無制限に出来る訳じゃないんだよ？ 実現化は使いすぎれば氣力を使い果たして自滅するだけだから氣お付けなきゃ。まあ、無理矢理、行使している私も同じけどね。無理矢理使っている分こちらの方が圧倒的に消費が激しんだよ？」

「余計なお世話だ。大体そんなこと聞いてるんじゃない話を反らすなっ！」

「これだから余裕が無い奴は……。そうだね、一言で表すならば、化物……かな」

彼女の最後の一言。その一言を切欠に赤は理性を吹っ飛ばして気が付けばただ感情のままに動いていた。

手を下から上に振り上げて伸ばした氣の刃で相手を土台のガレキごと切り上げる動きだ。

「ふざけんじやねえええ！」

赤はイラついていた。なんでこんなにイラつくのか、それは自分で

も解らない。彼女が憎い、それは確かだ。

でも、それだけを考えていればこれほどまで無駄に感情が揺らぐことなんて無いはずなのに。

そもそもそれだけを考えられるなら今のこの茶番にだって付き合ってる筈が無いのだ。

本気で相対する気が無い彼女にムカつく。

自分から逃げる彼女にイラつく。

彼女に届かない自分が許せず。

そして何よりもそれだけを考えられない自分に嫌気が差す。

（何もかも嫌になる。お前に、そして自分にも！）

振り上げられた刃は確かに彼女の立っている土台を切り裂いた。だがしかし、やはりその刃は彼女には届かない。その赤の刃は彼女に触れる直前で四散する。

しかし赤は構わずに攻め続ける。今度は法則の変化“大気圧の増加”しかしそれも彼女にその法則自体を拒絶されることで無効化。

そして次は命令“心臓麻痺”やはりこれも抵抗されて通用しない。ならばと今度やったのは身体強化“私は強い”単純だがだからこそ効果も強くなる。赤はそのまま彼女の方へと突っ込んだ。

どうやら先程の“命令”が多少なりと利いてるらしく彼女は心臓の場所を押さえ込んでいる。再び近距離での肉弾戦。

赤が相手へと繰り出した一撃目の拳は防がれたが体制は崩れた。

ここぞとばかりに赤は攻撃を連打する。

顔面、腹部、脛、太腿、顎……。最初の内は防がれていたが連打を重ねていく内に少しずつ入り始めていく。そして遂に腹部に拳がめり込んだ。

「りゃあああああ！！」

そして腹を抱えこんで前のめりになっている彼女に思いっきり拳を振りかぶって相手の顔面に全力で叩きつけた。

ズバン！！しかし赤の拳に伝わってきたのは顔面の感触ではなく、その代わりとして手の平の感触と受け止められた音であった。

「な！？」

「身体強化“生きていたい”解りやすく命名するならこんな所かな？知ってる？人の想いで

最も強い物の一つが生存願望だよ」

赤は腹部に衝撃を受けて再び空中に浮かぶ感覚、それから直ぐに今度は自分からみて右の方の脇腹に衝撃を受けて吹っ飛んで地面を転がった。

「かはっ、こほっ……。はあ、はあ……」

腹部の打撃の所為で息が苦しいが、反対にそのお陰で大分冷静になってきた。

「やっぱりまともなやり方じゃ届かないか」

「あら、私が憎いんじゃないの？いいのかなあ、そんな簡単に諦めちゃって」

此方へと彼女が歩いてくる。相変わらず余裕綽綽といった感じだ。だが構わない、いい加減、降らないことでイラつくのにも疲れた所だ相對する気が無いというなら此方から出向けば良いだけの話。それに、もう嫌というほど自分というものを思い知った所だ、ここらが良い頃合だろう。

「よく言うよ。まあいいや。どちらにしろお前には関係の無い話だ。こんな茶番もいい加減飽きてきた所だし、もう終わりにしよう」

「あはははは。どうやって？自殺でもするのかしら？」

「簡単な話。こうやってだよ」

そして赤は目の前にいる彼女を指差して言った。

「命令だ“戻れ”人形」

赤がその言葉言ったとたんに彼女の体にひびが入り、そして砕けた。

そう、偽者。今、目の前にいる彼女は夢加ではなくただの偽者。精神力を固め変質させて擬似的な人格を作りこんで作った、ただの人形。

「やっぱり。どう、抵抗できないでしょ？なんせこれは貴方にとって何時起こっても可笑しくない、もはや貴方の体自体に刻まれた否定したくても出来ない状態だものね」

赤がそう言うのと彼女は砕ける体が痛むのか顔をしかめながらも笑い出した。

「っ！・・・ったあ。くくく、やっぱ気付かれたか。それにしてもよく可能性の問題まで気付いたね。切欠は心臓麻痺といった所か」
「まあ、確信はね。本来、あんな明確な“死”のイメージが貴方みたいな化物に通用するはずが無いからね。偽者の偽者にあたるただの人形の貴方が此処までの“強さ”を持ってるなんて、アイツは本物の化物だよ」

そうやって離してる間にもドンドン彼女のひびは広がっていき、遂に体全体にまで達する。どうやらそろそろ限界みたいだ。

「赤、一つ聞こう。本物に会いたいのか？」

「っ！それは・・・」

赤は彼女の質問を聞いて俯いてそのまま黙ってしまふ。

「まあ、無理にとは言わないけどね。ただ、全部貴方次第とは言っておくよ」

「・・・うん、会いたい。会わせて、アイツに」

赤がそう言うのと彼女は何も言わず、ただ頷いただけだった。

そして後ろを向いて何も無い前方に手を伸ばし、そのまま何かを掴んでひねる動作をするとそのなにも無い空間にドアが現れて、そのまま彼女はドアを開け放つ。

「さあ、ようこそ。彼女の世界へ」

そして、それが彼女の最後の言葉となるのだった。彼女はその言葉と同時にそのまま四散して塵と成り、そして静かに空へと散ってい

った。

残された赤は無言のままゆっくりと立ち上がり、そのドアへ歩き出す。目指すはドアの向こう。自分の世界に閉じこもるバカを見つける為に。

正直、夢加を見つけて自分が如何したいのなんて解らない。でもこれだけは確信を持って言える。自分は夢加に会いたい。まだ、何をするかは決ってないけれど、それもきつと会えば解る。

そして赤はその思いを胸にドアの向こう側、夢加の世界へ一歩踏み出すのだった。

最初の秘密

“それ”は気が付いたらそこにいた。何時からそこに存在していたのか、なぜ自分がここにいるか。そのことは“それ”自信にも解らずただそこにいるだけだった。水の中に漂い、自分の一部から出ている細長い何かから栄養をもらい、たとえるならTVの砂嵐の様な音の中、それはそこに存在していた。

やがて“それ”はその空間の外から聞こえる音に意味があることに気が付く。“それ”はその音を聞いている内にその意味を理解して外の世界を知った。

そこは感情という物を軽蔑し、あつてはならぬ物として扱い卑下する世界。

そこは合理性のみを追求し変わることを何よりも恐れる無情で臆病な世界。

そして“それ”は解っていた。本来なら自分もその世界に行くことになるはずだったのだろうと。

しかし“それ”は知っていた、自分の体の異常に。生身の体に刻み込まれているシステム自信に起きたバグ。生まれつきの特性。決っていた死。もはや終わりがけた個体。

“それ”は今の現状を“仕方ない”と判断した。

そう、それは“仕方ない”ことなのだ。これは自分が初めてそこに存在した時から、最初から決っていた“仕方ない”出来事。どうすることも出来ないこと。

そんな時だった。そこにあるもう一つの存在を感じたのは。その存

在は自分に良く似ていた。しかし根本的な部分で何かが違う。そんな存在。そして何よりも違う所がその存在は異常を持っていないということだった。

そのことを確認した時だった、“それ”にその感情が芽生えたのは。そして何よりも“それ”はその感情に逆らう手段を持っていなかった。

その感情のままに自分の体の一部をその存在に向けて一生懸命うごかして、その感情のままにその存在を体の一部で掴む。そして“それ”は強く望んだ。ただ“生きたい”と………。

ドアを抜けた後、赤は気が付くと知らない場所に立っていた。

そこは真っ暗で、小さくて光を放つ何かがたくさん散らばってその空間を照らしていた。

地面も無くただ真っ暗な空間が何処までも続いている。ここはそんな場所だ。

そんな世界の中、赤は頭を抑えながら口を開く。

「今のは、夢……な訳無いか。それだったら感情まで伝わるわけないし」

眩きながら周りを見渡すと赤は側に小さな光を放つ何かが浮かんでいるのを見つけ、それに手を伸ばしてみる。

すると先程の映像とその時の感情が赤に流れ込んできた。

感じるのは純粹すぎるほどの生への執着。赤は光から手を遠ざける。

「なるほどね、言うなれば記憶の破片でいった所かしら」

どうやらこの小さな光の一つ一つが夢加の・・・いや、彼女の記憶を形にした物のようだ。

彼女を構成する世界の根源となる感情とその時の記憶がこの空間に形となって漂っているのだろう。

けして見せることの無い彼女の本質がこの世界には詰まっている。そしてそれが剥き出しになるのが心の世界なのだ。

「初めて見せる剥き出しの自分か。ったく、あいつは何がしたいんだよ！」

それも彼女に会えば解るのだろうか。・・・解らない。

ならば進もう。考えて解らないのなら実行して確かめればいい。単純なことだ。

赤が一步踏み出すと突然その空間に浮かんでいる記憶の欠片の全てが動いて二つの列を作る。そして出来たのは次の行き先を示す道だ。しかしそれは同時に全ての記憶の側を通らなければならないことになる。

正直怖い。でも知りたいと、そう思う。

知ってはいけない気がするのと同時に知らなければいけない気もあるし、如何したらいいなんて解かるはずもなく。

でも、だからこそ如何したいかを考えるのだ。

「っ！上等だよ。行ってやろうじゃない」

そう叫びながら赤は記憶の道へ踏み出すのだった。

「~~~~~!!!!」

記憶の世界で赤が最初に感じたのはある部屋に響く、声にならぬ五月蝸い叫び声だった。

思わず赤は耳を手で押さえるがその音量は変わる事無く赤の頭へと響いてゆく。どうやらこの世界ではその時本人が意識していた音が直接自分へ伝わる仕組みになっているみたいだ。

「~~~~~!!!!」

泣き声の中、周りを見渡してみるとなるほど、一人の赤ん坊が布団の上で母親らしき女性に抱かれて泣いていた。どうやらこの声は赤ん坊の泣き声だったようだ。

そんな泣き声の中、一人の男性が静かに部屋に入って来た。

「産まりましたか。どうですか赤ん坊の様子は」

「ふふふ、見ての通り、とても元気です」

「そうですか、おめでとう御座います。それで名前は決めてあるのですか」

男がそう聞くと女性は、実は・・・と言葉を濁しながら照れ笑いを浮かべる。

男はそれを見て呆れた様な感じでため息をついた。

「ハァ・・・。まだなんですね。張り切っていたわりにはやけに時間が掛かっているじゃありませんか」

「それがいざ自分で考えてみると沢山アイディアが浮かんじゃいまして。で、でも候補は幾つかに絞ったんですよ! あとはその中から一つ選ぶだけです!!」

「ほう、一応聞きますがその絞った候補とやらの数は？」

「77個!!」

「馬鹿にしとんのかあんた!!?」

「そんなことないですよ、だって77ですよ!?!?7が二つ、ラッキーセブンとラッキーピースでミラクルラッキーです!!」

「ははは、寝言は寝て言いやがってください」

赤は二人の会話に呆れつつも赤は周りを見渡して彼女の姿を探していた。

ここは夢加の“記憶”の世界だ。つまり“何処かに”この会話と風景を見ている本人がいる筈なのだ。

だがそれらしい姿は何処にも見当たらない。いったい何処にいるのだろうと周りを見渡していると先ほどの女性に抱かれていた赤ん坊が目に入った。

いつの間に泣き止んだのか今度はキョトンとした顔で二人のやり取りを見詰めている。

そしてよく見ると僅かにだが口を動かしているのが見えた。

そこまでは別に大したことではない。むしろそれは赤ん坊の微笑ましい光景の一つだろう。しかし、問題はそこからだった。赤はその赤ん坊の口の動きにある種の違和感を感じたのだ。赤はその違和感をハッキリさせようとジッとその口の動きを見る。

しばらく見ている内に赤はその違和感の正体をハッキリと理解した。しかしそれと同時に赤は寒気を感じるようになったのだ。

赤ん坊に対する違和感の正体、それはその赤ん坊が言葉を喋っていることだった。

発声器官が未熟なせいで声こそ出てはいないがその口の動きを見るとそれは確かに言葉であることが解る。

（お母さん）（私のお母さん）（始めまして、私は貴方の子供）（聞こえる？聞こえてない？でも嬉しい）

そうか、この子が彼女なのだと、赤は自然とそれを納得して受け入れていた。あり得ないはずの出来事が何故か当たり前に、しかし怖くも感じる。

彼女はただ喋ることが嬉しくて楽しく、その内容などどうでもよくて、ただ夢中だった。

そして彼女の言葉は側の二人の物真似へと入る。

「まったく。これなら機関の人達に決めてもらった方が早いし楽でしょうに。あなたもそうしたらどうですか？」

「それはダメです。それはやっちゃいけないことです」

女性が静かにだがキツパリと言い放ったその言葉にはどこか決意みたいなのが含まれているように赤は感じた。

「いいですか？名前とはとても大切なものなんですよ？大切な自分の子供に付ける最初の名前。それは親がその子に込める想いの象徴。それは最も身近な愛の証明。

親は子の名前を呼んでその想いを伝え、子は無意識の内にですけど確かにその想いを受け止め、そして確認し、それをどういう形であれ自らの生の基盤として創り上げるんです。

そんな大切なものを機関に預けて性質を現すだけのただの記号になって、出来る訳が無いでしょう。だいたいこうやっていっぱい、いっぱい悩んで決めるからこそ大切なんです。冗談でも貴方の今の言葉は言っではいけないことですよ！」

「・・・大切に思えるんですか？その子を」

男の言葉を聴いて女性は手元の赤ん坊を撫でながら聞き返す。

「なぜです？」

「惚けないでください。貴方がその子を生んだのはあくまでも機関の命令だからです。その子の父親も貴方との資質の相性で無理矢理ならされたに過ぎない。実際、貴方もあの男もお互い無関心。電話の一つどころか会話も食事もしないのでしょう？」

「そんなどうでもいい男との子供を大切になんて思える訳が無い。偽善もいい加減にしたらどうだ。・・・そんな所ですか？」

男は答えない。女性はそれを肯定と捉えて話を続ける。

「最初は私も嫌でした。正直なんであんな奴の子供なんかっ！て思いましたし。でも、ある日ふと思っただんです。

どんな子が生まれてくるのかなあって。こんな子かな、あんな子かな？ 顔や体格や体質だったり。名前はどうなるんだろうって。

そうやって考えている内に気付いたんです。確かにあの人は私にとって如何でもいい人で一緒になったのも機関の命令。この繋がりにはなんの愛着も沸きません。

でも、この子だけは違います。たとえあの男との間に愛情が無くとも、それでもこの子は私が産んだ私の子なんです。だれの子供だとか何処の命令とか私にはそんな下らない小さな物事、興味ありません。この子は私の子供。それだけハッキリしていれば私には十分だったんです」

男は呆れたというかの様にため息をつきながら言った。

「・・・解りませんね、自分には到底理解できそうにありません。好きになったって辛いだけです」

「・・・そうかもしれませぬ。あの臆病な総括神のことです、気が付くでしょうね」

「だったら何で？ 解っているでしょう？ その子は神界に生まれて来

るべきではなかった」

「うふふ、先程も言ったでしょう？生かしてみせます。なにせ、私はお母さんですから」

「・・・私は貴方を不幸だと思います。安心してください、その時は自分も手伝いますよ」

男の言葉を聴いて女性は心配そうにいいの？と聞いてきたのに対し、男は首をゆっくりと縦に振ることを返事とした。

女性は嬉しそうに微笑みながら一言、小さな声でありがとうと呟く。

「ふふふ、何はともあれ今日はお祝いです。こういう時は飲明かしましょう！」

「ははは、病み上がりは何言ってるんですか？」

「コップと酒は台所にありますよ。うふふ、今日のために買ってあった特別なお酒です。妊娠中は飲めなかったから楽しみだわ♪あなたも早く大きくなって一緒に飲めるといいわね」

「ちくしょう完璧に無視する気ですね？いいでしょう、なら力づくで・・・いや、冗談ですって。いやだなそんな怖い目しないでくださいよ。さあ今夜は飲明かしましょう！」

こうして小さなお祝いは朝まで続いたのだった。

秘密の願い 秘密の思い (前書き)

ねえ、何で泣いてるの

貴方は何時も自分を見て悲しそうにするけれど・・・

ねえ、何で泣いてるの

それは嬉し涙と言うけれど

その位の嘘なら解るから

貴方の涙を見ると自分も悲しくなるの

その涙が自分のせいならば

自分をもっと成長すれば貴方は笑ってくれるのかな

自分をもっと“すごく” なればあなたは笑ってくれるのかな

貴方が笑ってくれるのなら自分をもっとと頑張って“すごく”
なるから

だからその時は笑って私を抱きしめて

秘密の願い 秘密の思い

名前決定から十ヶ月、生後約一年、趣味は“読書”
“彼女”は一才になっていた。

全体的に木造で作られた家、その明るく日が差している外に開けた一階の渡り廊下、そこで一人の赤ん坊がまるで辞書のように厚い本をニコニコと楽しそうに笑いながら眺めている。

赤ん坊はそこに書かれた小さな文字を目で追い、端まで追ったら次のページを開いて行く。別に本で遊んでいる訳ではない、その赤ん坊は本を読むことで遊んでいるのだ。

自分が知らないことに対する興味、知りたいという欲求、その面で見れば彼女にとって本とは自分の望みを叶えてくれる絶好の遊び道具なのだ。

次から次へと沸いてくる知識欲、知識に対する興味、興味に対する想像、想像に対する探索、そして探索に対する想像。その過程の全てと過程の繰り返しが楽しくて仕方がない彼女にとっての遊び。文化、事象、概念、自分、世界、次元、存在……。知りたいことは山ほどあると同時に何を知りたいのかさえ解らない。全てが彼女の遊び場になりえる。

しかし、彼女は解っている、自分はまだ子供どころか赤ん坊であることを。興味に対する探索といっても出来ることはせいぜい違う本を漁る位だ。“確かめたい”そう思うが未熟な自分が邪魔となる。そんな自分をついもどかしく思う。

早く成長したいと思い、しかしそれが叶うはずも無く、だからせめて今の内に知識という名の土台を今の内から組み立てる。

つまりこれは彼女にとって遊びであると同時に勉強でもあるのだ。

そうやって本を読んで“楽しんで”いると何処からかトタトタとだれかの足音が近付いてきた。

彼女はその足音を聞くとガバツ！と読んでいた本から顔を上げてヨロヨロと立ち上がりながら音がする方向を見つめる。

そして足音の本人を確認すると、嬉しそうに声をあげながらヨタヨタとその人の所に歩いて行った。

「ままーっ！」

「あら？、ふふ、ほら持興^{じきよう}おいで、ままはここよ」

彼女に母と呼ばれた女性はそう言って危なげに歩く彼女をしゃがみながら手を広げて彼女が歩いて来るのを待っている。

赤は“持興^{じきよう}”と彼女の本名を呟いてみる。久延毘持興^{くえびじきよう}不思議と知らないはずなの名前なのに、その文字が頭に浮ぶ。

きつとこの名前も彼女にとって知られたくないことの一つなのだろう、今まで知ることすらできなかったのがその証だ。でも、今になってそれを教えようとする。それも彼女にとって一番秘密にしたい全てが詰まったこの場所で。

「ままー、捕まえたあゝ」

「わあ、捕まったゝ」

そう言ってその女性は持興をゆっくりと優しく持ち上げた。

「ほーら、よしよし。何を読んでいたの？」

「んーとね、術式の型式大全、湖備得庫／作。色んな世界の術式の基本、描き方が書いてあるの」

「湖備得庫作……。理解出来るの？」

女性がそう聞くと持興はニコニコしながら頷く。

「うん、知識を形にするなんてすごいよね！形にした知識から作り出すのは自分の心の表現。理性と感情のコラボレーション！知れば知るほど興味がわいてくるの。そしてね、とっても不思議に思うの」「不思議？何を不思議に思ったの？」

「えーとね、だってこの本は色々な世界の型式を集めた本なんですよ？なのにみんな大原則の円を基準にして書く所は一緒なの。この知識が生まれたきっかけは皆違うのにそこだけは絶対に同じなんだよ。別に丸を使わないで三角や四角だけで作った物があっても可笑しくないのに。不思議に思えば思うほど、どんどん興味が湧いてきて余計に知りたくなるの」

「そう……。凄いな！持興は。将来の夢は術士さんかな？」

「うん！私は“すごい”の。だから夢の方も私に相応しく大きくて凄いものじゃなきゃいけないんだよ」

「むむっ！もっと凄いもの？解った！全知の賢者さんだっ！」

「ブブー、ハズレ。私の夢は全知全能の神王だよ」

「神王……。統括神のことだね、どうしてソナモノになりたいの？」

「だって、それ位凄くなれば、どうすればいいか解ると思うから」

赤にはその時、持興の明るい表情に少しだけ陰りが見えた気がした。それは女性の方も感じたらしい。なぜか悲しそうな顔をして何を知りたいの？と女性が聞くと持興は自分を抱きしめながら答える。

「私がどうやって生きていけば良いのか。愛鏡とどうやって付き合っていけば良いのか。その方法が知りたいの」

「持興……」

「まま・・・私はね、今でも死に掛けているの。ただこの子の体を奪って私の体に健康に動いている経験を与えてなんとか生き繋いでいるだけ。愛鏡の生の情報に必死に喰らいついているただの寄生虫みたいなものなの。私が生きるってことは同時にこの子の全てを奪い取るってことなんだよ、そんな私がどうやってこの子と関わっていくの？どやってこの子が私を認めるの？出来るわけない。まま、私ままのこと好きだよ、この子も好きだよ、どうしても嫌いにならない位に。皆、大好きだよ。でもね、だからこそ否定されるのが怖いの。嫌われたくない、認めて欲しい。怖くて怖くて、仕方なくて嫌いになろうとするけど出来なくて、ままも愛鏡も他の皆もっ！！だから知り

たいの、見つけたいの、解りたいの。どうしたらいいのか。だから“すごく”なるの。皆が認めてくれるくらい凄くなればその方法もきつと解るから」

そうやって持興はいつの間にか荒くなっていた息を整え5分ほどかけて感情を落ち着かせてから再び持興が母と呼ぶ女性の方に顔を向けた。

「それでね、私が今言っみたいに“すごく”になったら、その時はままの笑顔を見せてほしいの。約束してくれる？」

持興は未だに母の心からの笑顔を見た記憶が無い。だから持興は聞いたのだ。貴方にとてこれは嬉しいことですか？と。赤が女性の方を見るとなんだか女性は迷っている様子だった。その様子はやった方がよいのかではなく、まるでやってよいのかどうかと言った方がしっくりくる迷い方だ。赤がなぜだろうと疑問に思っているとやがて女性はやつくりとだが確かに小指を持興の前に差し出す。

持興もその出された小指に自分の小指を絡み合わせて指を切る。

「うん、約束するよ。そして願ってる。貴方が“すごく”なって私の前に現れることを」

指切りをしながら女性は最後に持興へ宣言するのであった。

秘密と支え（前書き）

それは必然だったのかもしれない。

それを知る者ならば誰もが予測出来たであろう未来の予測。

誕生というたった一つの偶然から生まれた必然の道筋。

抗う意思を持つとも、抗う方法を知らず。

抗う方法を知ろうとも、抗う術を持たず。

知らなければ想わずに居られたのでしょうか？

知らなければ望み続けていられたのでしょうか？

私は未だに過去の中。

秘密と支え

日がよく当たる明るい場所、そこは床に畳みが敷いてあり、周りが障子で囲まれている、そんな一室だった。持興はいつもどうり本を読んでいた、しかし、いつもとは違い障子の外にいる2人の話をこっそりと盗み聞きしていた。

「・・・もうすぐですね」

「そうね、あの子ももうすぐ2歳になるのね。普通なら2歳で検査を受けて名前を付けられ、そして本人の才覚にあわせての教育が始まる。でも、あの子はその検査でひっかかるのでしょうかね」

「そもそもあの検査は統括神が自分を脅かす可能性がある者を排除するための作った物ですからね。あの子の素質は異常ですよ、見つかったら確実に消されるでしょうね」

「本当は解った時点で決めるべきだったのでしょうね・・・」

「久延毘古さん、何であの子達を育てたんです？どちらにしろ捨てるか殺すか、その二択しかなかったでしょう？」

「そうですね、家族の仲なんて作るべきではなかったのでしょうね、でも、私だって少しぐらい母親でいたっていいじゃない。何の自由も無くただ人形のように暮らすこんな世界で、唯一私だけの結果なのよ？可愛いじゃない、愛しいじゃない、放せるわけ・・・ないじゃない」

「それは、あの子を傷つけてまでやることだったのですか？すぐ行動していればお互い苦しみも浅くすんだでしょうに」

「解ってますよ、私がやってるこれはただの我が侘で自分自身どうしようもない馬鹿だってことぐらい。でもね、だからこそ思えるんです。あの子達、持興と愛鏡には・・・もう殺されても良いかなって」

「久延毘古さん・・・」

「クスクス、人して生きれず、異端扱いされて物としても生きれず、そして最後に手に入れた母親としての立場にもいられない不適応者の最後としては好い終わり方だと思えますよ」

話に聞き入ってボンヤリとしていた赤はポタリポタリと落ちる水の音でハッと我に返る。音の方に向いてみるとそこには、ただ静かに涙を流す持興がいた。

何も出来ない自分が悔しい、未熟な自分が憎い。母を苦しめ、笑ってほしいと思うが叶わず、母を思う自分の存在こそが笑ってほしい人を苦しめている張本人という自覚、自分の存在自体が許せなくて、でも死にたくないという矛盾した思い。そんな感情が幼い彼女をかき乱し、そして苦しめる。

ただ泣くことしか出来ない現実が余計に悔しくて、悲しくて、そして惨めで仕方ない。

「うあああ、ああああうううあああ・・・！」

持興は一人、そこで泣いていた。

夜、持興は布団を抜け出して一人、壁のない廊下で空を見ていた。

「・・・・・・・・」

その表情はまるで疲れきった様で、覇気の無い目でただ一人。

持興がそうやって空を眺めていると後ろからトタトタと誰かが歩く音が聞こえてきた。

持興は足音の主が右隣に來た所で顔を向けて確認する。その足音の主は持興が予測した通り、久延毘古だった。

「眠れないの？」

久延毘古は優しく問いかけるが持興はそれを無視して空を眺め続ける。

「泣きたい時は、泣いた方が良いわよ」

持興はその言葉を聞いて何かを我慢するかのように唇をかみ締めた。

「泣いて・・・何か変わるの？」

「ううん、何も変わらない。でも、溜め込むよりは泣いた方がいい。特に、子供の内はね。子供は泣いた分だけ成長出来るのよ」

「ただ未熟なだけじゃない」

「成長するっていうのはね、先を望むってことなのよ。そして未熟であるということはそれだけ先に進めるということなの。成熟はね、先を諦めた者がすることなのよ」

「・・・何か、嫌味に聞こえる」

持興の言葉を聞いて久延毘古はクスクスと笑い出す。

「“すごい” 奴に成りたいんでしょ？ 成熟はね、“立派な奴がするもの”なの。何度でも泣きなさい、何度だって失敗しなさい、何度でも挫けなさい、その度に貴方は成長し続けるのだから。結局はその度に立ち上がれば良いんだからね」

「私は・・・弱いね」

持興はそう呟いて不意に久延毘古の胸元に抱きついた。久延毘古は一瞬驚いた表情をしたが、すぐに微笑んで持興を優しく抱きしめた。“暖かい”抱きしめられた持興は何時もの様に母の温もりを感じて

いた。

「私、強くなるよ。今は何も出来ない子供だけど、でも強くなるから。“すごく”なって戻ってくるから。だから・・・悲しませてごめんね」

「っ！何でそんなことが言えるの、私は貴方を捨てるんだよ？怨んだっていいのよ」

「あはは、出来はしないよ。だって私、ママのこと大好きだもんっ！愛鏡のことだって任せてよ。絶対、私を守るから。だから、“待ってて”ね？私は貴方を悲しませるけど、絶対に会いに来るから」
「・・・うん！ありがとう、約束だね」

2人が交わした“それ”は約束であると同時に一つの決意だった。先が見えない状態の中で、それでも先を目指すための最後の支え。相手を支える希望で在ろうと、お互いはお互いの為に約束を交わす。ただ、生きてほしい、その想いの元に。

「でもね、ママ、私疲れちゃった。だから暫く眠ってもいい？」

「そうだね、ずっと頑張ってたもんね、いいよ、お休み。適度な休息も頑張る為には必要だよ」

「へえ、そうなんだ。じゃあ、これからはちゃんと眠る様に・・・しなくちゃ・・・ね」

「ふふふ、ちゃんと毎日眠らなきゃだめからね、これまでの様に何年も起きてたら許さないわよ」

このまま寝たらきつと何日も何日も、今まで起きてた分眠り続けることになるのだろう。そして起きた時にはもう自分の母親はきつと目の前から消えている。

ならば今しかないと持興は考える。今までずっと言いたかった言葉、けれどもずっと言えずに胸の中に抱え込んできたたった一言の言葉。

こんな時だからこそ正面からちゃんと言いたいと持興は思う。

「はあい………ねえママ」

「なあに？」

きつとまた会える。いや、会いに行こうという決意を胸に、赤ん坊は別れの一言を告げた。

「……大好き」

そして、持興は長い眠りについた。

「ひっく、ひっくひっく。ぐすん」

(……ううん……五月蠅いな、誰が泣いてるのよ)

持興は幼い女の子の泣き声で長い眠りから目を覚ます。

「お父さん、お母さん、どこお？帰って、きてよ。一人は、やだよ
お」

なるほど、大方両親が死んだのを受け入れられず現実逃避の真っ最中といった所か。

持興は未だ覚め切らぬ頭で状況を把握しようと辺りを見渡そうとするが体が動かない。それどころか勝手に体が動いて、やろうともしない行動を勝手にやっていく。

ああ、なるほど、そういうことか。持興は状況を完全に理解する。

まあ、このまま放っていても誰かが助けに来るだろう。別に自分がわざわざ出て行くこともない。持興はこのまま泣き疲れるのを待ってまずは外でも出歩いてみよう考える。

だがしかし、その考えとは別に、無意識に持興はその少女へと声を掛けていた。

なぜ掛けたかは解らない、だが母と別れる前、守ると言ったのは確かだ。

少女が怯えた様に声を上げる、持興はそんな少女の姿を微笑ましく思う。どうやら少女は“亜魔ノ 赤”という名らしい、別に本名を言っても良いがそれだと何となく味気ない。ならばどうするかと持興は考え、そして一つの名を思いついた。

「なるほど、亜魔ノって名前なんだ。ふふふ、君にとっては始めましてって事になるのかな？ だったら私は夢加。亜魔ノ 夢加だよ」

そして持興は最後に宜しくねと付け答えるのであった。

夢加

見えた扉を開けた先、そこは白い白い、まるで空白の様な何もない部屋だった。

そしてそんな空白の様な部屋の中央に丸い球の形を作っては崩れていく光のような何かがある。

赤はその何かに近付いて手で触れてみた。

「これは記憶？ いや、何か違う。私が見たものと少し違うかな？」

赤はしばらくの間記憶のような球体に手を伸ばしていたが、5分ほどで手を離して呟く。

「・・・ほんと馬鹿なやつ」

この球体は記憶ではなく、彼女にとっての“もし”の話だ。もしもこうだったら、もしこんなことをしていたら、もしこんなことが起きていなかったら。

もし、もし、もし、もし・・・。。。

そんなifの想像の塊がこの球体というわけだ。今よりも良い結果があったのでは？ そんな現実逃避をさまざまな可能性を含めて何万、何千万、何億というパターンを恐ろしいほどの制度でシミュレートしている。まったくもって才能の無駄遣いといしか言いようのない馬鹿馬鹿しい行為だ。

「でも、そのifの世界でさえアンタが出す最善は自分が生まれな
いことなんだね・・・」

現実で生きるべきだと思えないからせめてi fの世界でそれを探す。生きていたいと望みながら自分は生きるべきだと思えず、だからi fの世界にそれを求める。

しかし、せめてもの支えとして求めたそれさえも最良が自分が生まなければならないという最悪の結果に結びつき、そしてその答えが“どうせ自分なんか”と思わせる。

どうせ自分は一人だ、どうせ誰も自分のことなんか思っていない、どうせ皆から嫌われているんだ、どうせ、どうせ、どうせ、どうせどうせドウセ・・・・・・。

そんな考えが彼女の中で渦巻いて膨れ上がり、そして私が彼女を殺せると理解した時、その感情は彼女自身どうしようもないくらいに膨れ上がり、そして爆発した。

その結果とった行動が恐怖の対象を目の前から消すことだったというわけだ。

まさに愚かとしか言いような最低で軽蔑すべき行動。

「それで、その肝心な馬鹿はいつたいどこに居るのよ」

赤は周りを見渡すと周りが白一色のせいで解り難いが、壁に一つのドアが在るのを見つけた。

赤がドアを開くとそのドアの先は森のような緑であふれている空間に繋がっているみたいだ。赤がその緑の世界へと続くドアを潜り抜けるとドアが消えるが、気にせず先へと真っ直ぐ進む。

なぜだろう、彼女がいる場所が今はハッキリと解る。あの子はこっちだと、何かが自分に囁きかけてくる。こちらにおいでと、とても小さいがハッキリと聞き取れる声で。

いや、何かではあまり適切な表現とは言えない。なぜなら自分はそ

れを知っているのだから。

それは彼女にとっての嘘、自分と付き合うために彼女が必死で作上げた一つの境界線。本当の自分を傷つけられるのが怖いから、傷つけられても平気なように作り上げた心の盾。

違う自分を作り出して本物を守り続けてきた虚構の象徴、その名は

“夢加”

“夢加”が私を呼んでいる。

赤は夢加の声に導かれるままに進み続ける。進めば進むほどその声は大きく響き、より正確な場所を伝えて来る。

“ここにおいで” “こっちこっち” “ほらもう少し” “いらっしやい、来訪さん”

声に導かれて赤が辿り着いた場所は穏やかに流れる川と見上げるほどの大きな樹であった。

赤はいつの間にか流れる川の中央に立っていて、根元の大きな洞窟のような穴から水を流し続けるその巨大な樹を見上げていた。

「・・・ここに、あいつが？」

巨大な樹を見上げながら呟くと、突然右のほうから声がした。

「いらっしやい、よく来たね」

「っ！・・・アンタがいるってことは彼女は近いのかな？夢加」

「まあね、近くも何もほら、あの樹の中だよ」

「・・・随分と簡単に教えちゃうんだね。警戒心が足りないんじゃない？」

「っと言われてもね、元々来たら通すつもりだったからなあ」

自分と同じ姿をした少女、夢加は困った様子で頭をかく。赤はそれが妙に間触り、つい声を荒げてしまう。

「何それ！、それって私が何もしないと思ってるってこと！？」

「まさか、むしろ今大人しく話を聞いてる方が以外だよ」

夢加は薄っすらと笑いながらこちらに話す。

「で、どうするの？怖いなら案内するよ？」

「ちっ！いらないよ、気遣いご苦労様！」

「あはは！それは残念。じゃあ、さっさと進むんだね、私たちのご主人様がお待ちかねだよ」

ふんっ！と鼻を鳴らしながら先に進もうと歩き始めるが5、6歩進んだ所で足を止めて夢加に振り向いた。

「ああ、そうだ。ねえ夢加、質問があるんだけど」

「ん？何、まだ何か用？」

「結局、夢加は持興にとっての何だったの？」

「そうだねえ、ほらあれを見てごらん」

夢加は赤から見て左の方を指差した。そこにあるのは先程から立っている大樹、それ以外は何も無いように思えるが。

赤はどういうことなのだろうとまた夢加を見ると、クスリと笑いながら夢加は口を開く。

「ほら、見える？あの大樹こそが夢加そのものなんだよ」

「・・・持興はあの中にいるんだよね」

「そうだよ、解ってるでしょ？夢加はいわば持興の世界を支える柱であり彼女を守る鎧なんだよ。自分を守り、支えてくれるなりたかった理想の自分。それが私であり普段の彼女なんだよ」

「それは、私が一緒に過ごして、見ていた姿も貴方だったの？」

「さあ、どうなんだろうね？」

「ふざけないでっ！」

赤は鋭く言い切った。その様子はまるで、下らない誤魔化しは許さないと言っているかのようだった。

「ご免ご免、じゃあ、ヒントをあげる。貴方が感じる私は貴方が慣れ親しんだ夢加と同じものかな？」

「私が感じた夢加・・・うん、有難う感謝するよ」

迷いが消えた。赤の目を見て夢加はそう感じる。持興にとっての自分、今まで自分が見てきた彼女。別にそれを知って行動を変えるなど、そんなことを考えていたわけではないだろう。理由はおそらく純粹に気になったから、彼女にとって自分は何だったのか、ただ純粹にそれが知りたかった。そんな所だろうか。聞きたいことを聞いて再び大樹へと歩き出した赤を見ながら夢加は思った。

（ほんと、素直じゃない子だ）

夢加は考える。赤が主に会って自分はどうなるのだろうか。元々身を守る為に作られた嘘が自分だ。いずれいらなくなる自分が何時までも存在してられる訳がない、行き先はきつと一つ。

「まあ、これも仕方ないんだよね・・・」

その呟きは心の世界で、誰にも聞かれることなくただ世界に散って逝くのであった。

感情と理性

“それ”はある日夢を抱いた。光になりたいと。

全てを支え希望を振りまいて生を強制する光になりたい、そんな夢を抱いた。

しかし、その才能を自分は持っていなかった。光として相應しい人から生を受けながらも自分に与えられたのは一瞬の生と目の前の死。そして、その光としての才は自分の双子の姉妹に委ねられることになる。

なぜ自分はこうも理想とかけ離れているだろうか。なぜ自分は理想を追うことも出来ないのだろうか。

無邪気すぎる姉妹が羨ましく、壊したいほど憎たらしく、そして顔も向けられないほど怖かった。

それはもう、近くににいるだけで壊れてしまいそうなほどに・・・。

洞窟の中に入ってまず感じたことは、暗い場所だということだった。

まるで外の光さえも吸い取ってしまっているのかと思える程に真っ暗で、ある筈の壁さえも消えてしまったかのように感じてしまう、そんな空間だ。

己の姿さえ見えず、聞こえるのは流れる水を踏みながら進み続ける自分の足音のみ。

だがそれでも、いや、だからこそ赤は彼女を感じることが出来た。まるで行き先を示しているかのように今まで以上にハッキリと感知することが出来る。

（やっと向き合えるんだね、お互いに）

無限に続くかの様に広がり続ける暗闇の中、赤は歩みを止めた。ついに自分が向き合うべき相手、“彼女”の元に辿り着いたのだ。顔が見える訳じゃない。ただ感じる。持興がそこにいるのだと。

「・・・持興」

明かり一つ無い真っ暗な空間の中、持興は一人そこに立っていた。

「・・・大嫌いだった。無邪気で、気楽に生きてる貴方が」

「うん・・・」

赤は持興の言葉にただ頷いた。

「何も知らないで、泣き虫で、甘えん坊で、私がどれだけイラついてたか貴方に解る？」

「うん、そうだね。そうだと思ってた」

「ずっと怖かった、貴方と話しているとまるで責められているみたいで」

「私は持興じゃないんだよ、覚えてる訳ないじゃない」

「私はこんなだから、何時か壊されてしまうんじゃないかって怯えてた。いくら理性で押さえつけようとしてもだめ。イラついて、妬んで、怯えて、貴方の近くにいただけで壊れてしまいそうだった。いや、違うかな、あの時はもう壊れていたんだ」

「・・・私も嫌いだよ。ずっとずっと大嫌いだった。卑屈で生意気で、何も出来ないくせして強がりで、・・・甘えてばかりの私が嫌いだった」

「っ！・・・なんで、そんなことが言えるのよ、なんでそうやって思えるのよ」

「持興と同じ。理由があるとすればそれは自分自身がそう感じているから。ねえ持興、そこにいるんでしょう？」

赤は止めていた足をユックリ、ユックリとだが再び進める。

「知らなかった、持興が苦しんでること。解らなかった、怯えたこと。ご免ね、気が付けなくて。大丈夫だよ感じてるから持興の優しさ。最初から怖がる必要なんてなかったんだ。だって大好きだから。憎くてムカついて意地悪で怪しくて、でもだからこそ好きなんだ！好きだから憎らしくて、憎らしいからこそ、それ以上に好きなんだよっ！・・・持興と同じだよ」

赤は歩きながら手を広げ、そしてしゃがみ込んで自らの感情が示すままに持興を抱きしめ、小さく囁いた。

「ほら・・・捕まえた」

伝わる感触、感じる温もり、冷たく流れるこれは涙だろうか。赤は全身で持興がそこにいることを確かめた。

「そうだよね、そうなんだよね。ずっと憎かった。ずっと妬んで、ずっと怯えてた。でも、それ以上に愛しかった。愛しいからこそどうすればいいのか解らなかった。妬んで恨ことしか出来ない自分が嫌で仕方なかった。ただ嫌いなだけだったら楽なのに、そう考えてながらあなたと本当の意味で関係を持つとしない自分が何よりも嫌いだった」

「持興、私全部見たよ、あなたの記憶。どうして貴方が自分の体の機能を下げるようなことをしたのか、今ならよく解る。でも、だか

らってあなたが無価値なんてことは絶対に無い。苦しんで死ねばそれで解決なんてするわけじゃないじゃない。だれも悲しまないわけ無いじゃない」

「感情ほど怖いものは無いよ、好きな人が私を嫌っていたらどうしよう。そう考えただけで体が震える。知るのが怖くて仕方ない。こんな私を好きなやつ、いるわけない」

「大丈夫だよ、だって私がいるもの。だから大丈夫だよ。一人好きでいてくれたならきつと100人は持興のことを好きになるから」

「そうだよね・・・そうだよね！ツ・・・ヒック・・・うああうあああああん！！・・・。」

ずっと、ずっと我慢してたんだよね。私が弱かったら挫けないようにいつも支えてくれた、私のお姉ちゃん。ならせめて、今だけは私が貴方を支えよう。もう支えることも支えられることも出来ないのだから。

持興の記憶、知識の中にそれはあった。それは今まで当たり前だったことを当たり前ではなくする方法。私と持興がお互いを見詰め合える方法。私たち2人が分かれる方法が。

見つけたのではなく作り出した術式。それこそずっとずっと頑張つて、唯一彼女が自分と向き合う為に作り出した物だった。

どうすれば生きていけるのか、どうすればこの体を返せるのか。一生懸命、最後に残った僅かであった一つのプライドを掛けて持興はそれを作りだしたのだ。

(やっぱり持興はすごいよ)

そして持興は自分の前から姿を消すのだろう。自分の姉はそういう人だ。でも何時か見つけ出す。見つけ出して一発殴ってこう言うてやるのだ。“またね”と。

「持興、私まだ持興の顔見てないよ」

「ヒック・・・うん、そうだね。きつともう直見えるよ」

「もうすぐって何時よ」

「直だよ。ほら、だんだんと見えてきた」

持興がそう言うのとだんだん辺りが明るくなってきた。いや、正確には自分たちの周囲にだけ光が当たり始めているのだ。

赤の目に持興の素顔が映る。持興の顔は涙の跡が残っていたがもうその目から涙は無く、持興は微笑んでいた。

その微笑を見ながら赤は自分が眠くなってくるのを感じていた。やはり思った通りだ。しかし自分に抵抗出来るような力はない。

「さよう・・・」

しかし赤はその言葉を自分の言葉で塗りつぶす。言わせてなるものかと、それはただの自己満足でしかないがしかし赤は言わずにはいられなかった。

「ちがう！また会おうね・・・だよ」

それを言い切った時点で赤は眠りへと落ちて行ったのだった。

起動準備

・・・音が聞こえる。狂気が混じった沢山の怒声がこの町中に広がって響きわたっているのが解る。
戦争、一つの単語が頭に浮んだ。

「ちっ、五月蠅いなあ。寝起きなんだから静かにしなさいよねえ」

今は使われていないある建物の中、持興はフラフラとよろめきながら立ち上がる。体の調子を試しかめるために手に拳を作って力を入れてみるが上手く力が入らない。目は霞んで殆ど見えないし足も思う様に動かず体を支えることすら困難な状態だ。この様子だとあまり時間は残されていないだろう急ぐ必要がある。

「さて、始めるか」

持興は壊れていく体を感じながら呟いた。

夢加が出て行ってから次の日の朝、城下町ジャタルにリサ・ウルスの軍隊が攻め入って行く。銃はその様子を今や街の殆どが空き家となった家の屋根に座りながら見詰めていた。

「来たか。一、二日ぐらいならと思ったんだけどなあ、やっぱり駄目か」

逃げるなら今のうち、軍が自分の所まで到達してしまえばここは戦場となり命の保障は出来ない。この街にまだいるかもどうか解らない女の子一人待ったために命を掛けるなんて正直自分でもどうか

していると思う。

「別にやりたいことがあるわけでもないし、そんな暇な時間を過ごすぐらいならここで・・・てね。まあ、だからといって夢加に興味があるわけでもないんだけど」

銃はそう言って屋根の上に仰向けで寝転がる。こうやって毎日を過ごしているといつ忘れそうになる、夢加とい続ける本当の理由、それは一人の少女に会いたいからだ。その子は一度会ったら姿を消してしまったけれど今でも自分の中にはその子がいた証としてその時の感情が残ってる。その感情はとても純粹でだからこそとても強く自分の全てを支配した。

「・・・なんだ、どちらにしろ終われないじゃないか」

ならば答えは簡単、全力で足掻けばいい。隠れて、迎撃して、殺していけばその内全てが終わる。

「それに何でだか解らないけど、今日は会える気がするんだよね彼女に」

銃は一人呟くと勢いをつけて起き上がった後、準備運動として適当に体をほぐす。

「さてと・・・戦争の始まりだ」

銃はそう言いながら薄く笑みを作るのだった。

術式起動、内部構造製作完了、各種身体機能活動開始・・・。

「・・・ふう、製作完了」

持興は一息ついて一気に床に座り込む。持興がこの建物でやったことは自分の足りない身体構造の製作、そしてそれを動かすシステムの構築だ。

生きて行くのに足りない部分を人為的に力で作りだす。それが今回持興がやったことだった。

持興は手の平を握ったり開いたりしながら呟いた。

「ふむ、まあこんなもんかな」

とりあえず急に体の調子が悪くなる様なことはなさそうだ。力の七割ほどを内部にあてることになるがそれは仕方ないというものだろう。後々調整をする必要があが、とりあえずはこの街を出ることが先決だ。赤の方もこの調子だと直に目を覚ますだろう。戦場もまだここまでは広がっていないし一人でも十分逃げれる。後気になることといえば・・・。

「銃はちゃんと逃げたかな。・・・少し探してみるか」

何せ銃は持興にとっての特別だ。万が一他人に殺されでもしたら堪えたもんじゃない。持興は次の行動を銃の探索に決めると早速出入り口に向かいだすのだった。

タン、タタン、タン、タンタン。民家の屋根の上で断続的にしかし小気味よく拳銃の音が響いている。銃は周りを敵の兵士に囲まれな

のを躊躇してるようでこちらへの攻撃が止む。

「なんだ、おしまいかな。前戦のプロといっても案外大したことないんだね」

「ハハハハならこれなら満足してもらえるか!？」

真上からの声と同時に自分の足元に自分の物でない影が重なる。銃が自分の真上を確認するとそこには手に槍を持った全身を覆う鎧、フルプレートを着込んだ2メートルほどの兵士が空中から襲い掛かって来ていた。

銃はその全身鎧の兵士に3発弾丸を打ち込むが全て弾かれてしまう。

「むだむだっ!」

「ちいっ!」

銃が避けるために屋根から地上に降りた所で全身鎧の男の攻撃が今さっきまで銃が立っていた民家に直撃しそのまま轟音と共に民家ごと貫いて倒壊させる。

自分の弾を弾いたということはおそらくあの鎧は特注品、速度を犠牲に自慢の力と鎧の防御で突っ込む大砲型といった所か。

「ちっ、面倒な相手だ。単純ゆえにやり難い」

銃が悪態を付きながら相手の方を見ると全身鎧の男は倒壊する民家の中を平然と歩きながらこちらに槍を向けて悠然と言い放った。

「我2番大隊第4師団副隊長ヴァクセル・ライセンそなたに一騎打ちを申し込む!」

本当に面倒な馬鹿だ。だがその心意気は嫌いじゃない。

「だったら、やるしかないな」

銃はニヤリと笑った後相手に習って自分も相手に悠然と言い放った。

「こなし屋、白原銃。その勝負受けて立とう!!」

お互いの意見が一致したな言う事は後一つ、銃と全身鎧の男は開始の合図でもあるその言葉を同時に口にしたのだった。

「いざ尋常に勝負っ!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3284j/>

リーブMyハート

2011年11月16日11時00分発行